86

690
83

戰史評論　第四卷目次

第二十二　古今殲滅戰例……一
第一例　カンヌ會議……一
第二例　ロスバッハの戰鬪……一
第三例　ロイテンの戰鬪……一五
第四例　ツオルンドルフ附近の戰爭……一六
第五例　マレンゴの會戰……一八
第六例　ウルム包圍戰とフランダース殲滅戰……三一
第七例　一八〇六年戰役大追擊戰及フランダース會戰後に於ける大追擊戰……四七
第八例　ドレスデン附近の會戰……七〇
第九例　奉天會戰……八四
第十例　タンネンベルヒとロッヅ……九五
第十一例　波蘭軍殲滅戰の梗概……一三一

殲滅戰に關する綜合的所見……一四五
第二十三　夜間戰鬪例……一五二
第一例　普佛戰役に於ける普軍小部隊の不得要領なる夜襲……一五五
第二例　敵の慣用手段を逆用せる小戰例……一六〇
第三例　敵陣地の側背より夜襲せる小戰例……一六二
第四例　夜間陣地の間隙より進入せる小戰例……一六五
第五例　金州城に對する夜襲……一六八
第六例　北陵（昭陵）夜襲戰……一七七
第七例　弓張嶺の大夜襲戰……一九八
第八例　三塊石山の大夜襲戰……二二四
第九例　黑溝臺會戰に於ける第八師團の夜襲戰……二三八
第十例　黑溝臺會戰に於ける敵の大夜襲に對する我が軍の防戰……二五〇
第十一例　夜戰實驗談小集……二六五

戰史評論　第四卷

第二十二　古今殲滅戰例

戰鬪の目的は、敵を壓倒殲滅するを首眼とする。然るに古來眞の殲滅戰として模範的に遂行せられたる戰例の稀なるに徵しても、之が現實は容易でないことが判る。故に指揮官たる者は其の位置の上下を問はず、之が研究と訓練とに最大の努力を拂はねばならぬ。以下各時代に於ける若干の戰例を紹介して之が吟味を試み、以て參考の資とする。

第一例　カンヌ會戰

此の會戰は西暦紀元前二百十六年八月二日にカルタゴの勇將ハンニバルと羅馬のワロ軍との間に起つたもので、ハンニバルが羅馬軍を包圍して殲滅的打擊を與へし有名なる戰例であり、殆ど周知の事に屬するのみならず、本評論に於ても「包圍運動に關する史的關察」に於て紹介したので茲には其の經過及所見を省略する（第二十、第一　包圍運動に關する史的關察　ハンニバルの包圍運動參照）

第二例　ロスバツハの戰鬪（第七十八、第七十九圖參照）

此の戰鬪はフリードリッヒ大王が寡軍を以て遙かに優勢なる墺、佛等の連合軍に對し殲滅的大勝を博したる痛快なる戰鬪である。

普軍對連合軍の行動

フリードリヒ大王は敵の連合軍を擊破すべく西進し、一七五七年八月三十一日ドレスデン（第七十八圖東南端）に到り、モリッツ皇子の軍を併せ歩兵三十大隊、騎兵四十五中隊計二萬五千の兵力を提げ續いて前進し、九月十日ナウムブルヒ（ドレスデン西方百四十粁）に到達した。

之に對し佛將スービースの率ゐる二萬四千とヒルドブルグハウゼンの指揮する帝國軍（獨逸の諸王侯が法規により各一定の軍隊を準備し置き有事の際に使用に供するもので、其實力は劣等であつた）三萬計五萬四千の兵力は、此の頃エルフルト（ナウムブルヒ西方六十粁）に在つたが、大王の前進を知るや、從來の威力に恐怖を懷き優勢を擁しつつも尙西方アイゼナッハ（エルフルト西方五十粁）に退避した。是に於て大王は前進を續行し、九月十三日エルフルトに進入し、市民から大いに歡迎された。

大王は敵を誘出して決戰を餘儀なくせしめんと欲し、九月二十八日ブッテルステッド（エルフルト東北二十五粁）に、次で更に其の東北方ブットステットに退いた。敵は大王の豫想せる如く東

790
86

進を開始し、十月五日に再びエルフルトに戻つて來た。然るに爾後は前進の模樣がない。加之復も退いてゴータ（エルフルト西方二十粁）を經て西北方ランゲンヅアルツア（ゴータ西北二十粁）に退き、此の地で更にブログリーの指揮する歩兵十七大隊、騎兵十六中隊を合した。

斯くの如く大王は敵を捕捉するを得ざる間に敵の一部は伯林の手薄なるに乘じて之を襲ひ、多額の軍稅を徵し、市街一部を騷擾せしめ、數百の死傷や捕虜を得られた外、遠く東方國境シュレジエン方面では大王の部將ベウエルンが優勢なる敵から包圍せられ危機に瀕しつつある。此の重大なる情況の下に大王は急遽主力を率ゐて東方に轉進し、ベウエルン軍の解圍を圖るに決し、之が實行に就かんとするや、恰も後衛としてザーレ河畔に停止しありしカイト部隊より「佛軍及帝國軍が前進中である」との報告に接した。大王は卽ち好機逸すべからずとなし、前決心を飜し此の敵に向ひ前進するに決した。

帝國軍司令官ヒルドブルグハウゼンは、是より先十月十日維納政府に對し極めて悲觀的なる報告をなして曰く、

帝國軍は縱ひ普軍に比し二、三倍の優勢を擁しても尙且普軍を擊破することは不可能である と。何んと情なき弱音ではないか。併し之は實績より觀察すれば、自己を知れるものであるとも

謂ひ得る程、素質の低劣なる烏合の衆であつた。

然るに、前述の如くハディック支隊の伯林襲撃の小成功があつたので、大王は、シュレジエン方面に退却するならんと判斷し得るのと、維納政府からは積極的行動を執るべく督促頗る嚴重なるに動かされて、自信なき弱將ヒルドブルグハウゼンも再び東進を始め、以てザクセン地方を勢力下に置かんとするの決意をなし、佛將スービースも亦ヒルドブルグハウゼンからの哀求もあり共に携へて歩みを進むることとなつた。斯くして十月二十四日帝國軍はマルククレーベルヒ(ライプチヒ南方)に、佛軍はリュッツェン(ライプチヒ西南)に達した。

普軍後衛司令官カイトは、此の敵を誘致しつつ退却してライプチヒに停止し、以て大王の來著を待つた。大王はライプチヒと東北方七十粁のヘルッベルヒに在つたが、カイトに命ずるに、ライプチヒを死守すべきを以てし、且十月二十六日には大王親ら主力を提げて同地に到著すべきを通報した。

戰々兢々として牛歩を進めつつあつた連合軍は、カイトの停止するや既に十月二十五日先づ佛將スービースが弱音を吐き出した、曰く、ライプチヒの攻撃は不可能である、故にザーレ河及ウンストルート河の彼岸に堅固なる陣地を占むるに若かずと。之に對しヒルドブルグハウゼンも獨力

で前進するが如きは思ひもよらず、依つて異議なく之に同意し、共に退却の途に就いた。

大王に取つては、折角の敵を復た取り逃がさんとするの狀勢になつたが、大王は更に前進して之を捕捉すべく決心した。そこで十月二十九日全部隊(二萬二千)がライプチヒに集結を終るや前進を始め、三十日はリュッツェンに達し、三十一日にはザーレ河左岸に移らんが爲主力を以てワイセンフェルス附近より、又カイト軍を以て其の北方メルゼブルヒ附近より渡河を試みたが、敵の妨害によりて不成功に終つた。そこで大王は敵を欺騙する爲、十一月一日カイトをして北方ハルレ方向に、又大王親らオストラウ方向に轉進し、以て敵を該方面に牽制し、翌十一月二日ワイセンフェルス及メルゼブルヒに架橋せしめ、三日を以て騎兵若干はハルレから、軍の一部はメルゼブルヒから、又大王の主力はワイセンフェルスから、何れも少敵を驅逐しつつ左岸に渡り、ウエルンスドルフよりブランスドルフに亙る線に進出した。

此の日、連合軍はミュヘルン南方で第七十九圖の如く北面して陣地を占領して居るので、其の左側面は大王軍に對して暴露されてあつた。

小評論 連合軍は優勢を持ちながら大王の威勢に恐怖して敢て正面衝突に出づるの勇氣がない。併しそれもその筈で、從來幾回となく大痛擊を被つて、到底角力にならぬことを知つて

居るからである。故に大王が來れば卽ち退避し、遠卷きに大王をして東奔西走所謂奔命に疲れしむるを期待するより外に策なしとなしたのも、庸將として無理からぬことであらう。大王としても、此の「三十六計逃ぐるに若かず」の戰法に出られるのが、最も苦手である。何とかして之を捕捉せんと苦慮した跡を認め得る次第である。

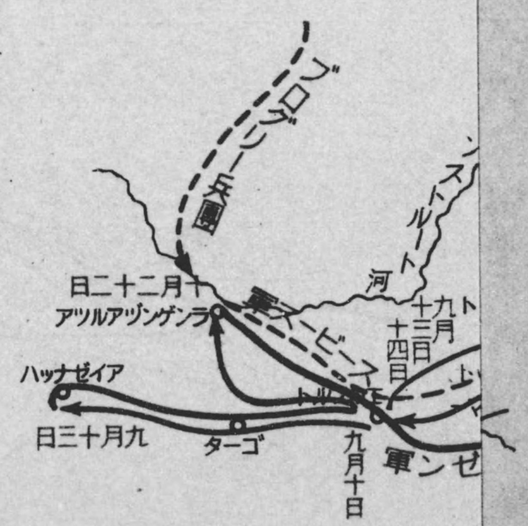
要するに敵を誘致して決戰に餘儀なからしむる手段方法に就ては、吾人も亦大いに意を留めて研究せねばならぬ。對支作戰の經過に鑑みるも思ひ半ばに過ぐるであらう。

戰鬪經過の概況（第七十九圖參照）

大王は敵の右側背を攻擊する目的を以て翌十一月四日西南方に移動しショルダウ附近の線に進出した。然るに連合軍は大王軍の行動を知るや、夜間に其の正面を變換し、左翼サン、ウルリヒ附近から右翼ブランデローダ南方に亙る線に陣地の正面を選定した。

大王は敵の新陣地は正面堅固で、遙かに數に於て劣れる寡軍を以て攻擊するの困難なるを察し直ちに攻擊するの決心を翻へし、ベドラから其の南方ロスバッハに亙る線に後退して敵の移動を待ちて攻擊に轉ずるに決した。是大王の判斷によれば、此の地方の給養力が連合大軍を長時日に亙り駐留するを許さぬから、恐らく敵は攻勢を執るか或は退却するであらう、其の何れに論な

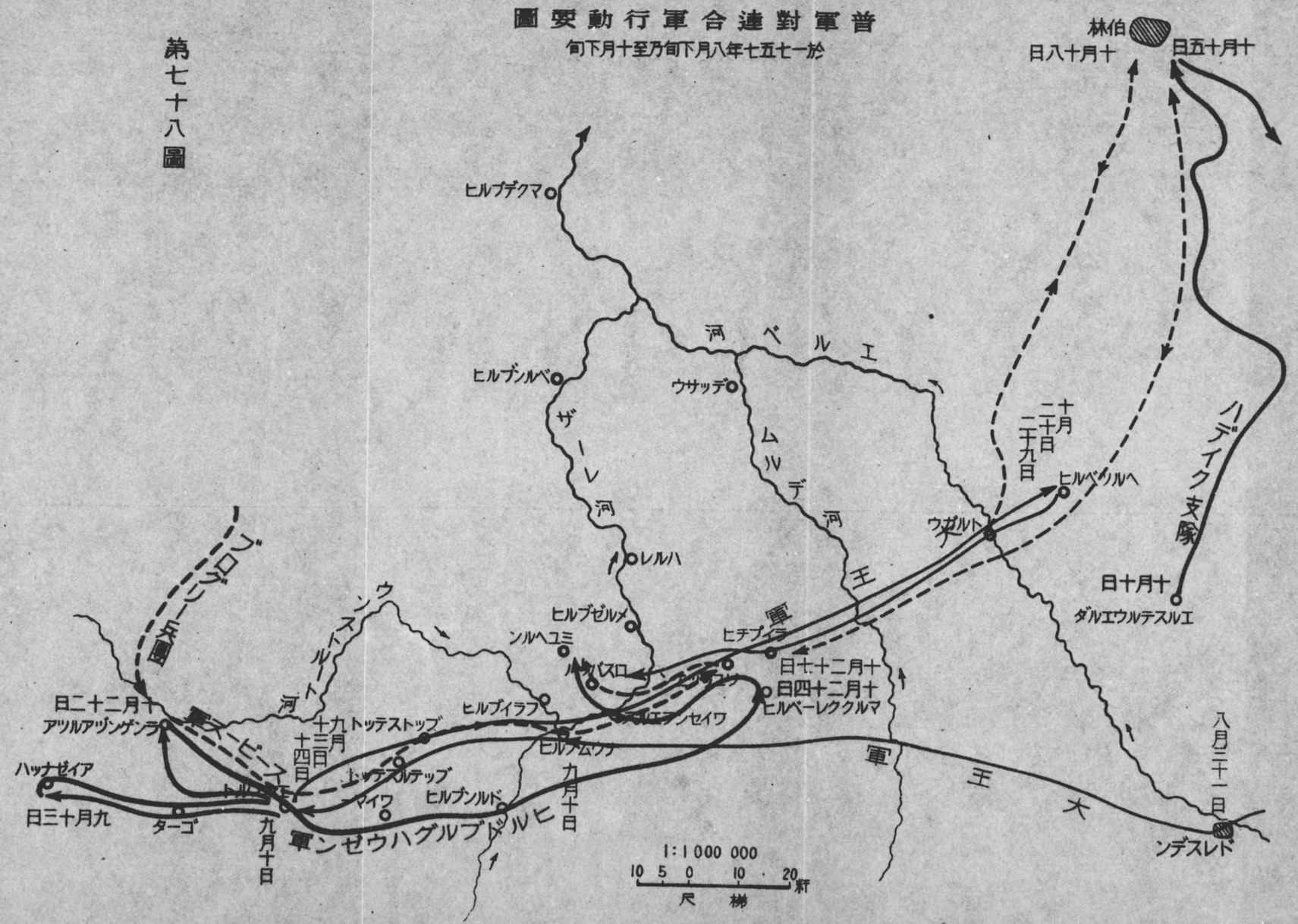
第七十八圖



第七十八圖

普軍對連合軍行動要圖

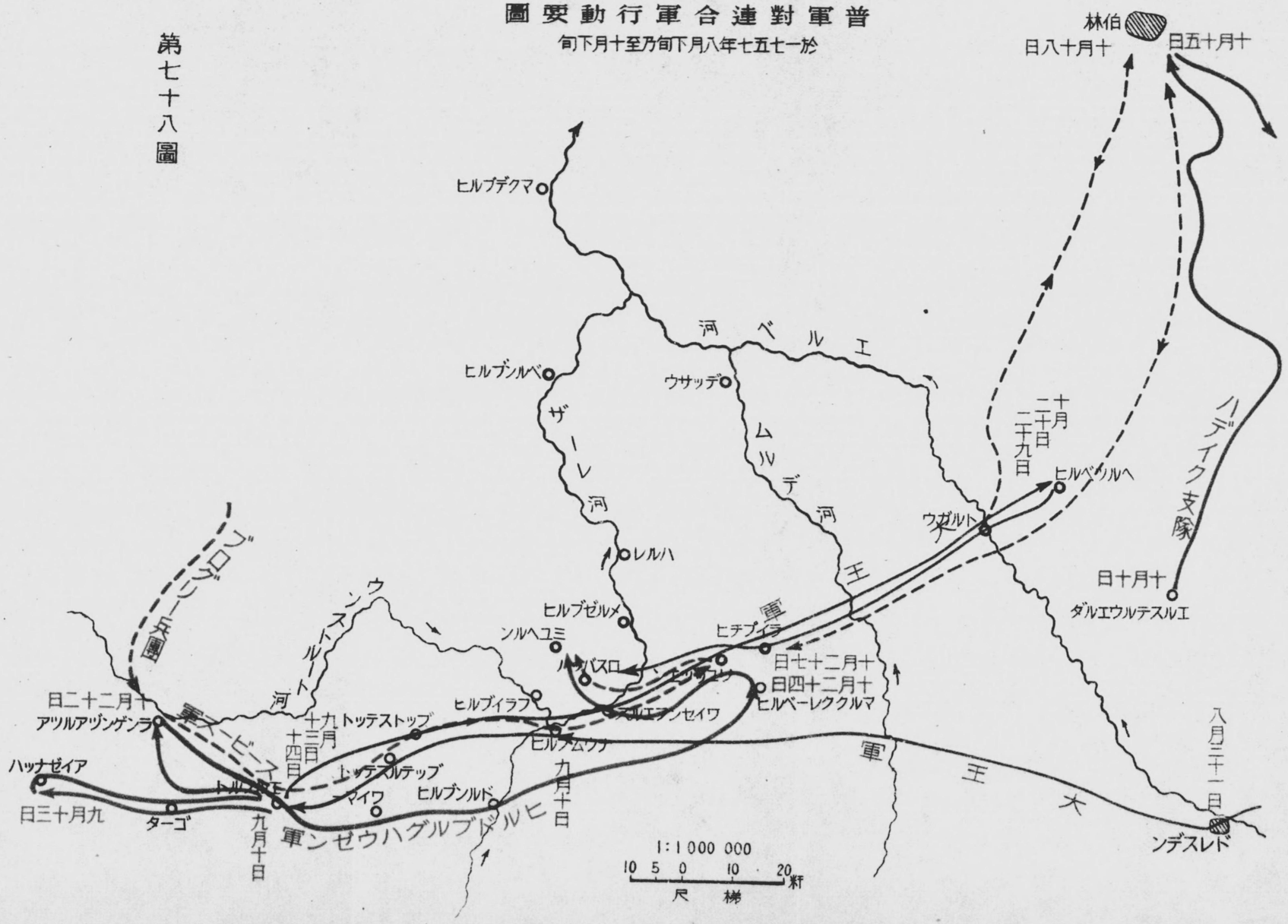
於一七五七年八月下旬乃至十月下旬



第七十八圖

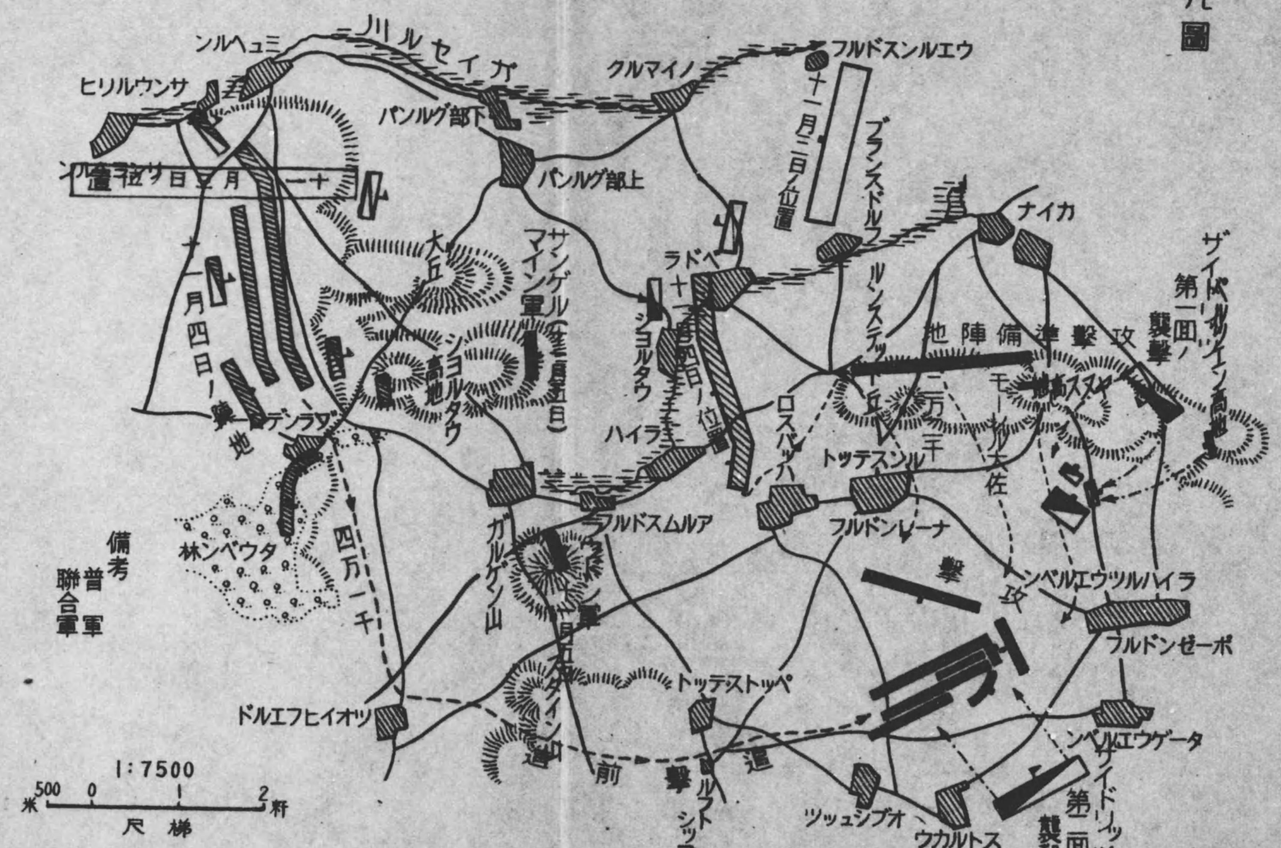
普軍對連合軍行動要圖

於一七五七年八月下旬乃至十月下旬



第七十九圖

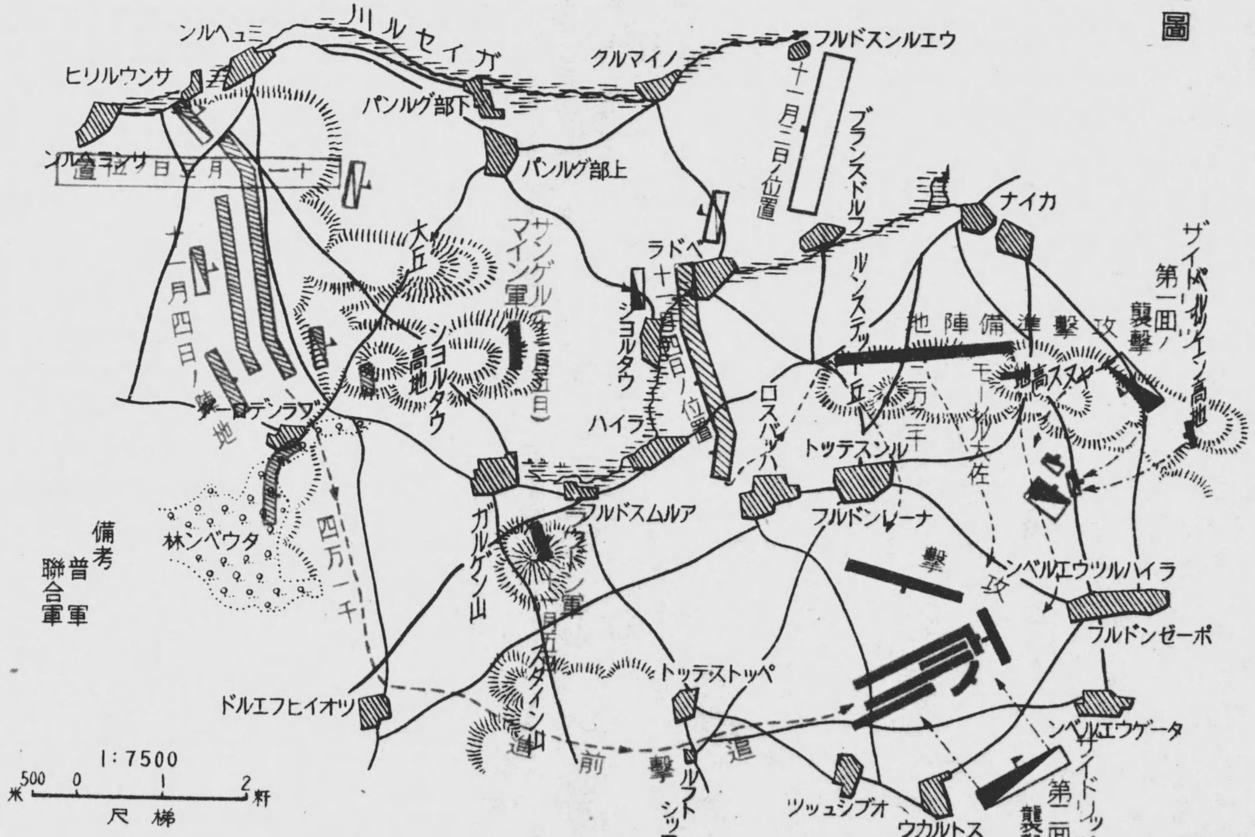
ロスバッハ附近ノ戰鬪
於一七五七年十一月五日



第七十九圖

ロスバッハ附近ノ戰鬪

於一七五七年一月五日



く移動に乘じて決戰を求めんとするに在つた。而して大王の占領せる陣地は右翼及正面は地形上堅固であるが、左翼は平坦で薄弱部を成形して居る、之は大王が故意に左側を暴露せしめて敵に乘ずべき隙を與へたものと思はれる。要するに何とかして敵を捕へようと苦心の跡が窺はれる。

連合軍は大王に對して攻勢に出づるの勇氣はない、併し大王の判斷せる如く、帝國軍は殊に給養上困難を感じて居たので、フライブルヒ（ロスバッハ西南十粁ウンストルート河畔）方向に退却するの意圖を持つた。然るに其の退却にはウンストルート河を渡らねばならぬ、然らば渡河に乘じて大王が攻擊し來ることは豫期せねばならぬ、故に此の危險を避くる爲には一時大王軍を東方に壓迫するの必要があると云ふことに歸著する。之は恐ろしき冒險事業ではあるが、幸ひ大王軍の左翼が地形上薄弱であるから、其の側面を衝いて退却の餘儀なきに至らしむべきであるとヒルドブルグハウゼンは考へた。依てスービースに之を謀つたが、最初は意見が一致せぬ、併し結局不本意ながらスービースも之に同意し、愈、五日を以て攻擊の決行となつた。大王の爲には思ふ壺である。

連合軍の攻勢前進　恐る恐る肚をきめたる連合軍は、愈、五日の正午頃から東進を開始した。歩兵六十二大隊、騎兵八十二中隊、野戰重砲四十五門總勢四萬一千の大衆は、其の騎兵團を先頭

に進め爾餘は本隊となり、別に前衛をも設くることなく南方ツオイヒフエルドを經てルフトシフより、ライハルツウエルベン方向に前進し、別にサングルマインの指揮する歩兵八大隊、騎兵十二中隊を以てショルタウ高地を占領せしめ、更にラウドンの率ゐる歩兵三大隊、騎兵三中隊を以てガルゲン山を占領せしめ、何れも主力縱隊の轉進を掩護せしめた。斯くして十四時軍の先頭はルフトシツフに達した。各高級指揮官は部隊の先頭に出で普軍の狀況を視察するに、其の陣地は依然として變化なき如くに觀察せられた。そこで今までの積極的鬪志は動搖を始め、本日攻擊を實行するの可否に就て論議が始まつた。然るに暫くすると普軍が天幕を撤して東北方カイナ方向に其の影を沒したことを發見した。是に於てスービースは「普軍がメルゼブルヒ方向に退却する」と判斷した。かうなると急に勇氣百倍するが弱者の常である。曰く「須らく機を失せず急追せざるべからず」と、戒心の氣も失せて、猪突的暴進の形と化した。

大王の奇拔なる決心、處置　連合軍移動の有樣は、ロスバツハから目擊することが出來たが、當初は敵がフライブルヒ方向に退却するならんと判斷した。蓋しショルタウ高地及ガルゲン山に在る部隊は其の後衞陣地であらうと。斯く判斷せる大王の決心は明白である。此の機に乘じ之に打擊を與へんと其の準備に著手した。然るに暫時にして展望將校から「敵はツオイヒフエルドに

停止し其の東方スタイン高地には敵の高等司令部を認む、恐らく前進し來るのであらう」と。尙之に續いて同樣の報告が二、三あつた。併し大王は尙敵の前進を信ずるに至らぬ。依つて自から前方に出でて敵情を視察したが、ペツトステツト高地に敵騎の出沒するを望見し得たのみであつた。故に之は敵の偵察隊の一部に過ぎざるならんと、飽く迄敵の怯懦、退避に慣れたる大王は敵情を斯く判斷するのも無理はない。然るに暫くすると敵騎の後方かち一團の歩兵が之に續行するを發見するや、大王の判斷は誤なるに氣著いた。其の瞬間彼は之を迎擊するに決した。大王も之で敵を捕捉し得るの確信を得て心陰に快哉を感じたであらう。

即ち歩兵一大隊、騎兵七中隊を以て西方に對し警戒に任ぜしめ、主力二萬二千(歩兵二十七大隊、騎兵二十八中隊、重砲二十五門)を以て急遽左方に轉向し、東北方カイナに方向を採りて行進せしめ、其の先頭がヤヌス高地の西北側に達するや、同高地の北側に沿うて東進し、軍の全部がヤヌス高地線に入り終るや南面して同高地に展開せしめた。

連合軍の不用意なる前進　急に元氣を出したる連合軍指揮官は、依然其の騎兵を先行せしめ歩兵は之に續行した。當時歩兵は山地を通過する爲に隊伍亂れ且間隔狹小なる五縱隊となりつつ行動した。先行せる騎兵團は墺軍騎兵を先頭として十六時頃ライハルツウエルベンの西北側に達し

た。勿論警戒も嚴ならず單に敵に追尾する積りで居つたであらう。然るに豈に圖らんや此の時普軍は既に展開を完うし其の重砲はモーレル大佐の指揮を以てヤヌス高地に布陣し、又騎兵三十八中隊は勇將ザイドリッツの指揮を以てペルチエン高地に隱蔽し滿を持して待機し居らんとは。是に於て先づ普軍砲兵は好機乘ずべしとなし突如として敵騎兵團に猛射を浴せた。全然不意を打たれし騎兵團は、勿論動搖せずには居られぬ。其の弱點に乘じザイドリッツは其の第一線列十五中隊の騎兵を放ちて敵騎が普軍砲兵に對し展開中なるに乘じて襲擊を決行した。次で第二線列の二十二中隊も之に加はり、尙側面警戒中であつた五中隊の騎兵も亦敵騎の側面に迫つた。敵の先頭騎兵團は忽ち潰亂した。之に續ける佛騎兵團は先頭騎兵團の潰走に卷き込まれて是亦回轉逃走した。ザイドリッツは深く追擊することなく、更に方向を轉じてターゲウエルベンとストルカウの中間に集合し隊伍を整へて第二の企圖を準備した。

連合軍指揮官は自軍騎兵團の敗走を目擊せるも既に先入主となれる敵情判斷に變化なく依然敵の主力は退却中であると確信した。蓋し敵騎兵團は主力を掩護するものであるとなしたのであらう。要するに現在の態勢の儘急進した。此の間普軍歩兵は大隊毎の梯隊となり左翼から前進を起し、ライハルツウエルベンとルンステットの線に於て右方に旋回した。大王は自ら之を視察中であ

つたが、時機至れりとなし、直ちに其の歩兵を放ちて攻擊前進を起さしめた。

其の部署は左翼の八大隊をして敵の先頭に向つて正面より突進せしめ、右翼の十二大隊は之を敵の左側面に迫らしめ、其の他は左翼部隊に續行をした。連合軍は豫想に反し全然不意を襲はれ、心身共に受動に陷り、驚いて急遽之に向ひ展開せんとしたが、時既に及ばず、優勢の兵力も用ゆるに由なく、正面及左側面より包圍席卷せられんとする危機に陷つた。加之、恰も此の時ザイドリッツの騎兵團は再び猛然として連合軍の右側に向ひ襲擊した。勝敗は直ちに決した。結果は連合軍の潰亂となつたことは言ふまでもない。先を爭うて西に走り、ウンストルート河に向つて逃走した。是より先サングルマインの部隊はラウドンの部隊と共に主力縱隊に追ひつくべく轉進しつつありしが、其の退走を見て、ペットステット附近で收容に任じた。時恰も夜に入らんとす、大王は追擊を止めた。連合軍は爲に殲滅を免れた。而して大王は翌六日フライブルヒを經てエッカルツベルガ(フライブルヒ西南二十粁)に追擊したが、最早何等の獲物もなかつた。斯くして連合軍は解體の形となり、西方及西北方へと逃げ失せた。

兩軍の損害　普　軍(二萬二千)　五百五十

連合軍(四萬一千)　一萬一千五百　砲七十二門

評論

一、奈翁は此の戰鬪を評して曰く、ロスバッハの戰鬪は其の勝敗の數固より定まり敢て怪むに足らぬ、是普軍の二萬餘は悉く精選の兵のみであり號令嚴命であつたに反し、連合軍は四萬餘の大衆を擁するも號令整はざりしに因る。併し大衆を持つこと斯くの如くにして僅かに步兵六大隊と騎兵三十中隊の破る所となつたことは驚くに堪へた、又恥づべき至りである云々。と如何にも勝利は鮮かであり、敗北が餘りに簡單であつた。

二、大王の指揮統帥卓越であり、兵團を動かすこと手足の如く、敵情に應じ臨機應變、神速敏活に行動し、常に主動的位置に在つて、大敵を翻弄すること恰も小兒を扱ふが如く、而かも能く戰機に投じ、衆敵をして全然其の力を發揮するの暇を與へざりし本戰鬪の如きは、稀に見る鮮やかなものである。而して此の戰果を獲得するに至れるは、敵側の無能振りが徹底的であつたことも大いに與つて居る。元來帝國軍が寄り合ひ世帶で謂はば烏合の衆であり、之に佛軍が加はつて不統一なる軍の標本が出來上つたのである。殊に兩軍は各、其の本國政府より互に矛盾せる訓令を受けて居た。卽ちヒルドブルグハウゼンは墺國政府よりの嚴重なる督促によりザクセンの占領を企圖せねばならず、スービースは佛國政府からザーレ河を越えて東進すべからず

との命令を受けて居た。斯くの如くして同一戰場に於ける兩軍の圓滑なる連合行動が出來る筈はない。

三、敗戰後ヒルドブルグハウゼンは本國政府に報告して曰く、

予は未だ嘗て斯くの如き戰慄すべき恐慌を見聞したることなし、吾人の最大幸福は間もなく夜暗となりたるに在る。然らざれば恐らく全滅の不幸に陷つたであらう。

而して彼は其の司令權を辭して曰く、

少くも予が奉公の義務は既に終りを告げた。皇帝は縱ひ予に一百萬フランの月俸を賜はるとも最早現職に留まるの意なし。

と。例を月俸の額に取つたことは何と評すべきかを知らぬ。兎に角、總司令官としての志氣の喪失、薄志弱行の如何を窺はしむるに足ると同時に、大王の卓拔なる統帥に對し間接に讃辭を贈れるものと謂ひ得る。

又佛將スービースの武將らしからざる辯疏的言辭に曰く、

吾人の計畫は適當であつた。併し普王は吾人に之を實施する餘裕を與へなかつたのである。差し當り努むべきは爲し得る限り國民の榮譽を傷けざる爲、不幸なる敗戰の責任を帝國軍に

讓るに在る。

と。唾棄すべき庸將の不純なる心懸けではないか。

四、大王の戰績の赫々たるは勿論異論なき所であるが、吾人は殲滅戰の立ち場から嚴密なる觀察と研究とが注がれねばならぬ。其の意味に於て大王軍の行動に就て、現今の戰術思想から批判するとき重要なる一大缺陷がある。其は何か、諸君も既に氣著かれたことと信ずるが、卽ち「追擊の續行」と言ふ平凡なる事項である。當時は追擊なる觀念は一般になかつた、戰勝を得たる後は、更に次の戰鬪に向つて前進するのであつて、追擊を以て其の戰果を徹底的ならしむるの意味を持たなかつたのである。故に大王の此の戰鬪に就て特に之を非難するは當らぬが、唯吾人として之を研究する場合、必ず敵の潰走に乘じ少くも一氣にウンストルート河畔に猛追擊をなし、以て之を同河に壓迫殲滅せしむべきである。若し今日の戰鬪に於て之を敢行せざりしとすれば、其れは寧ろ大なる過失に屬することを銘記せねばならぬ。

此の見地より觀察するとき、ロスバッハの戰鬪は、寡軍能く大敵に對し大々的勝利を獲得せるを確認し得るも、吾人の所謂眞の殲滅戰には尙距離の存することに注意すべきである。

第三例　ロイテンの戰鬪

此の戰鬪は、曩に「第二十包圍運動に關する史的觀察」中の「第二フリードリヒ大王の包圍運動」に於て紹介したのであるが、該觀察に於ては大王の敢爲なる側面運動に就て評論したものである。依つて其の大體の經過に就ては之を省略するが、之を殲滅戰的見地より簡單に評論を試みる。

蓋し殲滅戰例としては一應之を研究すべきものであるからである。(第六十二圖參照)

一、大王が臨機、敵の左側に大迂回を決行し以て敵の不意に出でたるは、卽ち戰勝の主因であり、之は爭ふの餘地を有せぬ。同時に又墺軍が約二倍の大衆を擁しながら、從來に於ける大王の神技に恐怖をなし敢て積極的行動に出でず、徒らに陣地に據り唯防戰準備に是努めたる有形無形の消極主義が、大王をして一層其の戰績を偉大ならしめたと謂ひ得る。

二、併し墺軍に與へた有形上の直接損害が半數に充たざる程度（六萬五千の兵力中死傷二萬二千、逃亡六千）より觀れば、眞の殲滅戰には尙及ばざるものである。之に就ては、大王の兵力が著しく劣勢(三萬五千)であつたことが主因であり、又他に一の原因に算し得ると思はれることは、大王が最初敵の正面前卽ちボルネ附近に輕步兵四大隊を配置し以て好機に乘じ敵の背後

を衝かしめんと企圖したのであるが、其の指揮官アンゲレン大佐は遂に好機を逸し且其の攻擊動作も緩慢であつたのは、其の殲滅戰的效果を減ぜしめたと謂へる。但し斯くの如き局部的不適當なる動作は、戰場の常とも謂ふべく、何れの戰場にも見ることであるが、吾人としては、其の由來を究め、以て可及的過失を皆無ならしめんことに努力せねばならぬ。

三、要するに、大王が二倍優勢の敵に對し、果敢なる大迂回の冒險を敢行し、以て敵をして大兵を運用するの暇なからしめ、以て大損害を蒙らしめたるは、眞の殲滅的ならずとも、之を殲滅的打擊を蒙らしめたる一範例として認むるを得るであらう。

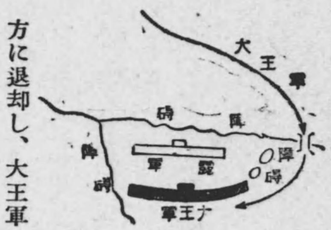
第四例　ツオルンドルフ附近の戰鬪

此の戰鬪も、「第十七對露戰例」中の「第一ツオルンドルフ附近の戰鬪」で紹介したものである。其の際も露軍が所謂執拗、頑强なる抵抗力を有するものであり、大王も有利なる位置、態勢に在りながら最後の留めを刺すに至らずして止んだことを評論したのであつた。今之を殲滅戰の立場から簡單に評論を試みる。(第十九圖參照)

一、大王が前例のロイテンに於ける大迂回に比して更に思ひ切つたる「敵の背後に進出」せる全力

迂回を敢行したことは、殲滅戰遂行の爲、形の上では殆ど完全であると謂へる。卽ち第八十圖の如く露軍を正面及兩側面共に通過至難なる障碍に依托して消極的防禦に甘んじあるとき、大王は遠く東方より迂回して全然露軍の背面に進出し、北面して展開したのであるから、露軍としては兩手を擧げて全部降服するか、或は三方障碍の內で殲滅せらるるかを想はしめる。從つて玆に眞の殲滅戰が成立すべきであると連想し得るであらう。

第八十圖



然るに事實は之に反し、露軍の窮鼠的抵抗極めて執拗であり、爲に大王軍も、一再ならず不利なる戰鬪を交へ、惡戰苦鬪二日間に亙り辛うじて露軍を西方の一隅に壓迫したが、兩軍共力盡きて露軍はすご〳〵と南方に退却し、大王軍は僅かに之に跟隨せるに止まり、兩軍共に大損害を蒙つただけで戰は終りを告げたのであつた。

以上の見地から觀察するに、形の上に於て完全なる態勢に在つても、敵が窮鼠的に抵抗力を發揮する場合には、必ずしも殲滅的效果を擧げ得ざることを示すものである。

二、而して大王が、第二に於て露軍に一條の退路を與へんが爲、自軍をランゲングルンドの後方

チッヘルの線に後退せしめた處置に就て考察するに、

右の退路を與へられたる露軍は翌二十七日早朝之を利用して南方に退いたのである。此の機に乘じ大王が全力を擧げて退却中に殺到したならば、敵をして隨意退却より潰亂狀態に移らしめ玆に殲滅戰が成立する公算大なるものがあつたと思ふのである。

要するに、彼我策の施すべきなき如く行き詰まれる際に於て敵に退路を與ふることは、同時にをして、急に抵抗意志を弱め、一圖に逃げ延びんとする心理に驅られ易きものである。此の機敵に乘じて猛烈に攻擊を加ふることは、卽ち、戰機を膠著狀態より一變せしむる所以であると信ずる。

然るに大王が敢て此の擧に出でなかつたことは、其の軍が既に疲勞の極に達し其の餘力なかりしものと察せざるを得ぬ。

三、要するに此の戰鬪は、形に於て殲滅的理想を現るに拘はらず、其の效果を奏し得ざりし戰例である。

第五例　マレンゴの會戰

此の戰鬪は奈翁が一八〇〇年大軍を率ゐてアルプスの嶮難を踏破し墺軍を求めて之を攻擊せるも一度は敗れて若干後退の後、直ちに增援を得て反轉し、以て墺軍に殲滅的打擊を加へ戰役を終局に導きたる敎訓深き戰例である。

會戰前に於ける佛墺軍の行動（第八十一圖參照）

奈翁が埃及に遠征中、伊太利方面では、佛軍が墺露連合軍の爲に擊破せられ一八〇〇年の初期に於ては僅かに伊太利の南端及西隅に餘喘を保つに過ぎず、曩に奈翁が奮鬪して獲得した勢力は忽然として跡形もなく消失した。實に一將帥の有無が如何に大なる關係を有するかを想はしむるに十分である。

奈翁は埃及より隱かに佛國に歸來するや伊太利方面の勢力を恢復する爲一八〇〇年一月以來豫備軍の徵集を隱密の間に開始した。

奈翁の計畫に從へば、主作戰を歐大陸卽ち獨逸方面に導き伊太利方面を支作戰場とすべき至當の考案を有したが、當時、老將モローは奈翁の指揮下に入るを好まず、奈翁も尙未だモローを抑制するだけの權威が十分に備はらざる實情に在つたから、不本意ながら、主力をモローに授けて大陸方面に策動せしめ、自己は豫備軍を提げて伊太利方面に親征し以て其の非凡なる力量を發揮

せんことを企圖した。

是に於て奈翁はアルプスの天嶮を踏破すべく、主力の路をサンベルンハルドに取るに決した。即ち四萬二千の兵力を以て此の道路を經由し、別にモンセイの指揮する一萬五千をサン、ゴットハルド峠を經由せしめ、尙チューローの率ゐる五千を以て西方アルプスの諸山徑を守備し、主力と策應して伊太利に進入せしむることとした。總兵力は六萬二千人となる。

此の大軍のアルプス踰越は、非常の冒險であり、又至大なる困難を嘗めたが、非凡なる英雄に率ゐられて通過し得たとも謂へる程の苦勞をしたのであるが、其の詳細は之を省き、五月十日から、同月二十六日迄かかつて、其の先頭は伊太利平地の出口イブレヤに達した。

當時墺軍はメラスの指揮下に在つたが、佛の敗殘部隊に對し各方面に派遣せられてあつた。殊にゲヌア要塞に餘喘を保てる佛のマッセナ軍は、有力なる墺軍の攻圍を受けて、其の陷落は切迫しつつあつた。

アルプス隘路口に進出せる奈翁は玆に極めて放膽なる決心をなした、曰く、敵の背後連絡線を戰略的に遮斷して一擧に墺軍を殲滅する爲、主力を擧げて先づ東方マイランドに向はんとす。此の痛快なる決心は一面に於て自己の退路をも放棄するものであり、極めて冒險であることは明か

第八十一圖

六月十二日佛軍配置

ポー河北岸二萬二千五百

ポー河南岸三萬四千八百

六月十四日

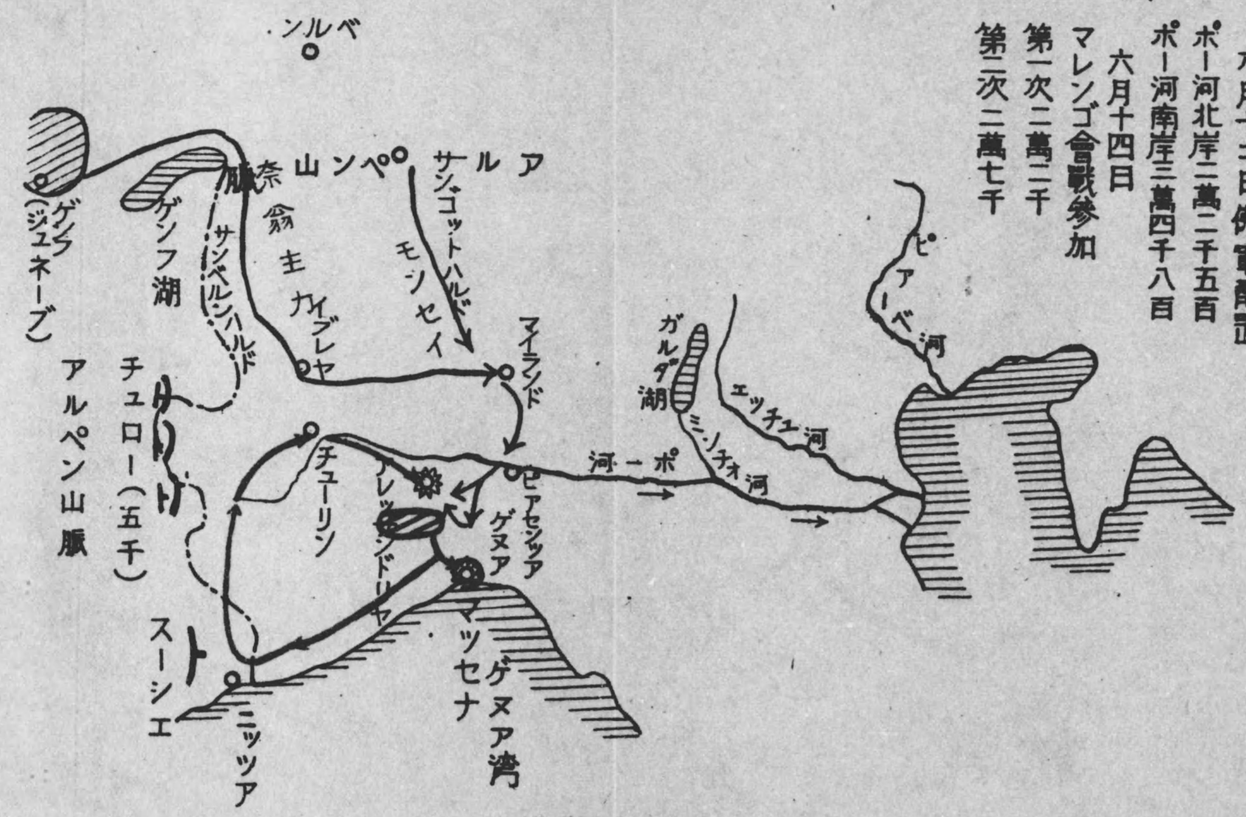
マレンゴ會戰參加

第一次二萬二千

第二次二萬七千

一八〇〇年戰役伊太利方面概見圖

於一八〇〇年五月六月



せんことを企圖した。

是に於て奈翁はアルプスの天嶮を踏破すべく、主力の路をサンベルンハルドに取るに決した。即ち四萬二千の兵力を以て此の道路を經由し、別にモンセイの指揮する一萬五千をサン、ゴットハルド峠を經由せしめ、尙チュローの率ゐる五千を以て西方アルプスの諸山徑を守備し、主力と策應して伊太利に進入せしむることとした。總兵力は六萬二千人となる。

此の大軍のアルプス踰越は、非常の冒險であり、又至大なる困難を嘗めたが、非凡なる英雄に率ゐられて通過し得たとも謂へる程の苦勞をしたのであるが、其の詳細は之を省き、五月十日から、同月二十六日迄かかつて、其の先頭は伊太利平地の出口イブレヤに達した。

當時墺軍はメラスの指揮下に在つたが、佛の敗殘部隊に對し各方面に派遣せられてあつた。殊にゲヌア要塞に餘喘を保てる佛のマッセナ軍は、有力なる墺軍の攻圍を受けて、其の陷落は切迫しつつあつた。

アルプス隘路口に進出せる奈翁は茲に極めて放膽なる決心をなした、曰く、敵の背後連絡線を戰略的に遮斷して一擧に墺軍を殲滅する爲、主力を擧げて先づ東方マイランドに向はんとす。此の痛快なる決心は一面に於て自己の退路をも放棄するものであり、極めて冒險であることは明か

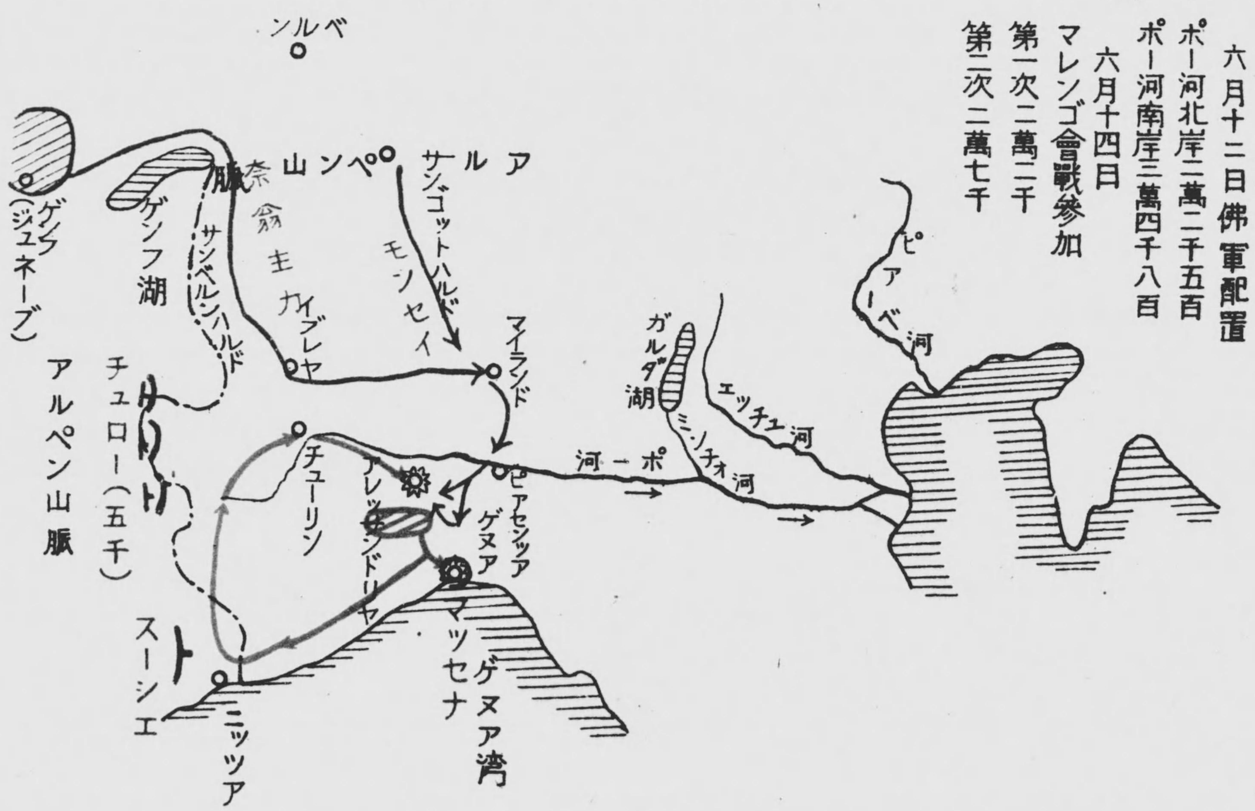
第八十一圖

六月十二日佛軍配置
ポー河北岸二萬二千五百
ポー河南岸三萬四千八百

六月十四日
マレンゴ會戰參加
第一次二萬二千
第二次二萬七千

一八〇〇年戰役伊太利方面概見圖

於一八〇〇年五月六月



である。蓋し敵の價値を熟知し自軍に絶對の信頼あるにあらずんば敢行し能はざる所である。

斯くして奈翁は一部を以てピアセンツア及其の他のポー河渡過點を確實に占領せしめ、爾餘の兵力をマイランドに集結し、以て五月末に豫期せらるるモンセイ軍の到著を待つた。

之に對し墺將メラスは奈翁軍のアルプス踏破の如きは不可能なりとして信ぜざりしが、其の眞相を知るに及び大いに驚き、奈翁軍が必ずやチューリン方面に來るべきを豫期し主力をチューリンに留めて兢々として心安からずに敵を待つた。所が豫期に反し、奈翁が東方に前進せるを知るや、一度は之を尾擊するの決心をなしたが、自軍一部隊の敗報を耳にし、忽ち怯氣を生じ急に主力をアレッサンドリア附近に集結するに決した。

ゲヌア要塞佛軍の開城　マッセナの率ゐる一軍は、僅かに伊太利南端の一角ゲヌア要塞に立籠つて、奈翁の來援を頼みに餘喘を支へつつあつたが、糧秣は將に盡きんとするに至り、已むなく「守兵全員を率ゐ武裝の儘開城する」の條件を以て六月四日ゲヌアを撤退した。攻城中の墺軍は守兵四千を此處に留め主力はアレッサンドリアに轉進した。

墺軍の狀況（第八十二圖參照）　六月十二日迄に諸方面からアレッサンドリアに集結し得たる兵力は約三萬である。是に於て同日軍事會議の結果前面の敵を擊破して退路を開くに決した。併し

此の決心や堅確ならず、諸將自信を有するものがなかりしを想はしめるものがある。斯くして會戰前日たる六月十三日には一部を以てアレッサンドリア東方のボルミダ河の渡過點を占領して出擊に便ならしめ、主力は大體に於てアレッサンドリアに集合して居つた。

佛軍の狀況　六月十二日佛軍はポー河の兩岸に分置されてあり、其の右岸(南岸)の兵團は三萬四千八百で、左岸のものは二萬二千五百である。

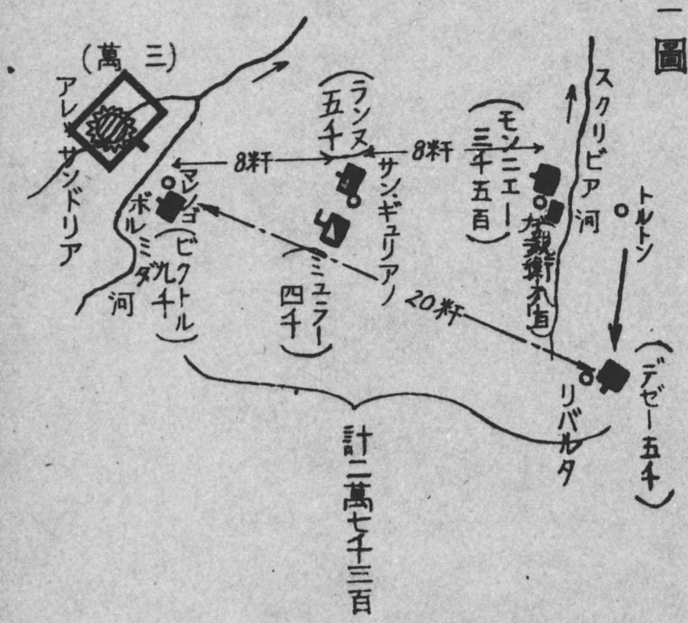
翌六月十三日南岸兵團はアレッサンドリア方面に前進を開始した。然るにマレンゴ(アレッサンドリア東南)附近の平野一帶に敵兵を見ずとの報告に接するや、奈翁は「敵が決戰を避けて南方ゲヌア方面に退却せるか又はポー河北岸に轉進せるならん」と判斷した。此の判斷の下にデゼーをして其の一師團を率ゐ南方に轉進して敵のゲヌアに向ふ退路を遮斷せしめ、又敵がポー河北方に退く場合にはポー河左岸兵團を以て之を阻止せしむべく部署を定めた。

小評論　奈翁が爲せる敵情判斷は、理論上至當であり、又之に伴ふ處置も判斷に合致せるものと謂ひ得る。然るに、實際敵は奈翁の何れの判斷にも出でず、依然アレッサンドリアに在りて出擊の準備をして居つたのである。此の誤らしめたる原因は敵情搜索の不十分に歸すべく、マレンゴ一帶に敵兵なかりしにあらずボルミダ河畔には有力なる敵兵之を占據しあり、アレ

第八十二圖

墺佛両軍ノ位置

於六月十三日夜



此の決心や堅確ならず、諸將自信を有するものがなかりしを想はしめるものがある。斯くして會戰前日たる六月十三日には一部を以てアレッサンドリア東方のボルミダ河の渡過點を占領して出擊に便ならしめ、主力は大體に於てアレッサンドリアに集合して居つた。

佛軍の狀況　六月十二日佛軍はポー河の兩岸に分置されてあり、其の右岸(南岸)の兵團は三萬四千八百で、左岸のものは二萬二千五百である。

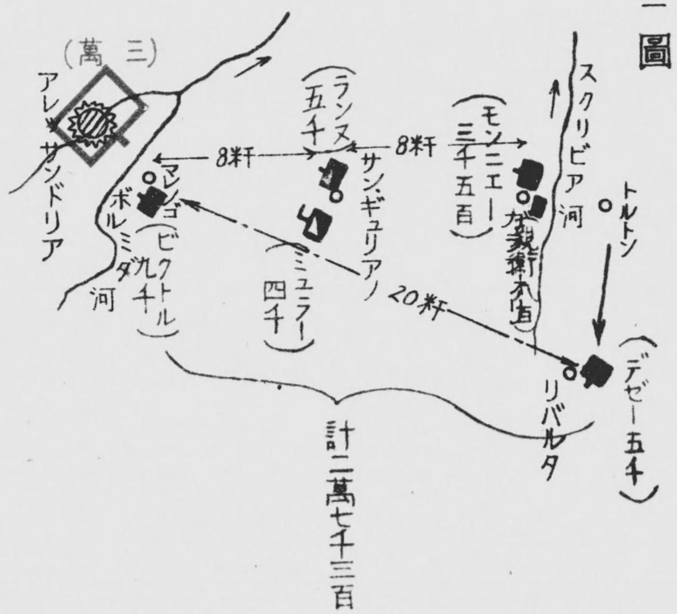
翌六月十三日南岸兵團はアレッサンドリア方面に前進を開始した。然るにマレンゴ(アレッサンドリア東南)附近の平野一帶に敵兵を見ずとの報告に接するや、奈翁は「敵が決戰を避けて南方ゲヌア方面に退却せるか又はポー河北岸に轉進せるならん」と判斷した。此の判斷の下にデゼーをして其の一師團を率ゐ南方に轉進して敵のゲヌアに向ふ退路を遮斷せしめ、又敵がポー河北方に退く場合にはポー河左岸兵團を以て之を阻止せしむべく部署を定めた。

小評論　奈翁が爲せる敵情判斷は、理論上至當であり、又之に伴ふ處置も判斷に合致せるものと謂ひ得る。然るに、實際敵は奈翁の何れの判斷にも出でず、依然アレッサンドリアに在りて出擊の準備をして居つたのである。此の誤らしめたる原因は敵情搜索の不十分に歸すべく、マレンゴ一帶に敵兵なかりしにあらずボルミダ河畔には有力なる敵兵之を占據しあり、アレ

第八十二圖

墺佛両軍ノ位置

於六月十三日夜



ツサンドリアには主力が充滿して居つたのである。要するに敵情捜索は必ずしも的確ならざること多く、又從つて敵情判斷も適中せざること少からず、故に其れに固執するは危險であり、常に臨機應變の餘裕がなければならぬことを示すものである。

佛軍前遣兵團たるビクトル軍團は、此の日十七時頃マレンゴ附近に在つた敵の後衞をボルミダ河の彼岸に擊退した。而して奈翁はボルミダ河の諸橋梁が全然存在せざるの誤報に接するや、愈、敵が南方ゲヌア方面に退却したものと確信するに至つた。是に於て、奈翁は十三日夜、軍を集結することなく各、其の現在地附近に宿營せしめた。卽ち次の通りであつた。

ビクトル軍團(九千)	マレンゴ
ランヌ軍團(五千)	サンギュリアノ(マレンゴ東方八粁)
ミュラー騎兵團(四千)	サンギュリアノ
デゼー(一師團)(五千)	リバルタ(マレンゴ東南二十粁)
モンニエー師團(三千五百)	ガラフオリ
軍司令部(親衞兵八百)	ガラフオリ
計　二萬七千三百	

小評論　六月十三日に於ける兩軍の態勢を觀察すれば、墺軍約三萬はアレッサンドリア附近に集結しあるに反し、佛軍はビクトル軍團のみを以て墺軍主力の眼前に孤立し、其の他は八粁乃至二十粁の地に離隔しありて、奈翁は全然敵主力の眼前に在るを知らざるが故に、警戒も亦從つて嚴ならざるを想はしめる。而も兵力は寧ろ劣勢であるとすれば、墺軍にして至當に行動したならば佛軍の危險に瀕することは爭ふべからざる狀態に在りと謂はざるを得ぬ。是一に敵情、地形の搜索、觀察の誤れるに歸する。戒めざるべけんやである。

マレンゴ會戰（第八十三圖參照）

第一期　奈翁軍の敗退　六月十四日朝八時奈翁は其の司令部ガラフォリに在りて突如マレンゴ方面に盛んなる砲聲の起れるを聞いた。奈翁の決心や如何。

奈翁は、恐らく敵情が自己の判斷に反し、少くも有力なる敵がマレンゴ方向に在りと氣著いたであらう。そこで其の決心たるや頗る鮮やかで、

ビクトル軍團をしてマレンゴを死守せしめ、主力を擧げて該方面の敵を攻擊するに決した。

墺軍は此の日早朝豫定に從ひアレッサンドリアを發しボルミダの渡河を始めたが、約三時間を費して其の全力を右岸に移した。其の大體の部署はオットの指揮する八千を以て北方カステル、

シエリオロ方向から佛軍の右翼を包圍せしめ、主力は直路マレンゴ方向に進ましめた。然るに軍司令官メラスは出發直前に於て、佛軍の一部が西南方からアレッサンドリアに向ひ前進し來るの誤報に接し、決戰の直前なるに敢て二千の兵を割いて之に備へしめた。

小評論　奈翁が誤報によつてアレッサンドリア方面に敵なしと信じ極めて危險なる態勢の儘十三日夜を徹し、墺將は其の有利なるを豫想し得べき天與の決戰に惠まれたる狀況に於て、是亦誤報を信じて有力なる決戰兵力を減ぜしめた。斯くの如きは戰場の常であり、互に過失の犯し合ひの如き感を懷かしめるのであるが、吾人は此の史的教訓に基き、敵情の眞相を摑み難き所以を腦裡に銘すると同時に、常に爾後の變化を確かめ、過失を改むるに速かなるを要し、且敵の過失に乘ずるの注意を怠つてはならぬ。メラスが一時二千の兵を割けるを許すとするも、爾後該方面の虛報なるを知らば直ちに之を決戰方面に招致するの準備がなければならぬ。卽ち決戰兵力を一兵なりとも增加せんことに注意を忘らざれば、從つて該方面の實狀を確かむるの手段に遺漏なかるべく、正面の戰鬪にのみ氣を奪はれ他方を顧みざるの過失に陷らざるべきである。

佛軍の挺進部隊たるビクトル軍團は、奈翁の命に依り優勢なる墺軍主力の攻擊に對してマレン

ゴを死守すべく決心した。幸に其の北側に在る小流は障碍をなせるを以て持久防禦に役立つた。

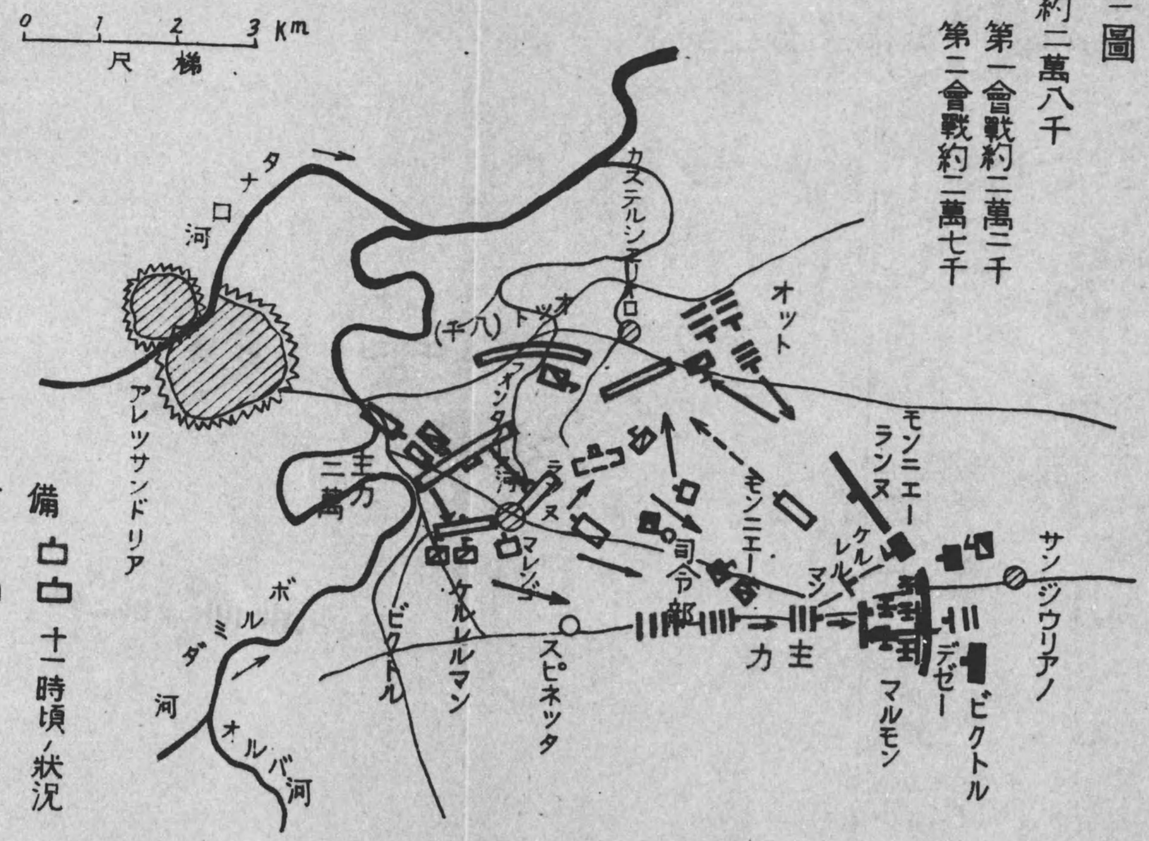
八粁後方に隔りありしランヌ軍團も急遽ビクトルの急に赴き先づ其の先頭師團をビクトルの右翼に戰線を延伸した。ミューラー騎兵團も其のケルレルマン旅團をビクトルの左翼に增加し、他のシャムブー旅團を北方に向け敵のオット軍に對せしめ、最後のボー旅團を最右翼に配置した。併し墺軍は最初より優勢を以て展開して居たのであるから、流石の佛軍も絕えず優勢に强壓を受けランヌ軍團の到著も以て之を奈何んともする能はず、從つて增加すれば從つて壓迫せられ、苦戰の狀態は刻一刻に加はつた。此の秋、墺軍騎兵旅團は佛の左翼に向ひ敢然襲擊して來た。危機正に一髮である。恰も佛ケルレルマン騎兵旅團は之に向つて反擊し、辛うじて左翼の崩壞を喰ひ止めた。併し右翼方面は將にオット軍の包圍を受けんとして危機が迫つた。

十一時奈翁は駿馬を驅つて此の危機に到著した。知らず果して如何なる神謀奇策かある。彼の眼前にはビクトルの朝來の奮鬪にも拘らず既に疲勞して力支ふる能はざるものあり、勇敢なるランヌ軍團も亦奈何んとも能はざる狀態に在ることがはつきりと映つた。彼は取敢ず其の親衞兵八百をランヌの右翼に放ちて應急の處置を爲したが、是亦敵騎の反復襲擊に甚しく苦戰に陷つた。

奈翁は、續いて到著せるモンニエー師團を待つ間遲しと最右翼に增加せしめ、以て親衞兵の危

マレンゴ會戰要圖

於一八〇〇年六月十四日



第八十三圖

兵力
- 墺軍約二萬八千
- 佛軍 第一會戰約二萬二千
- 第二會戰約二萬七千

備考
- 白 十一時頃ノ狀況
- 黑 十七時半頃ノ狀況

ゴを死守すべく決心した。幸に其の北側に在る小流は障碍をなせるを以て持久防禦に役立つた。

八粁後方に隔りありしランヌ軍團も急遽ビクトルの急に赴き先づ其の先頭師團をビクトルの右翼に戰線を延伸した。ミューラー騎兵團も其のケルレルマン旅團をビクトルの左翼に增加し、他のシャムブー旅團を北方に向け敵のオット軍に對せしめ、最後のボー旅團を最右翼に配置した。併し墺軍は最初より優勢を以て展開して居たのであるから、流石の佛軍も絶えず優勢に强壓を受けランヌ軍團の到著も以て之を奈何んともする能はず、從つて增加すれば從つて壓迫せられ、苦戰の狀態は刻一刻に加はつた。此の秋、墺軍騎兵旅團は佛の左翼に向ひ敢然襲擊して來た。危機正に一髮である。恰も佛ケルレルマン騎兵旅團は之に向つて反擊し、辛うじて左翼の崩壞を喰ひ止めた。併し右翼方面は將にオット軍の包圍を受けんとして危機が迫つた。

十一時奈翁は駿馬を驅つて此の危機に到著した。知らず果して如何なる神謀奇策かある。彼の眼前にはビクトルの朝來の奮鬪にも拘らず既に疲勞して力支ふる能はざるものあり、勇敢なるランヌ軍團も亦奈何んとも能はざる狀態に在ることがはつきりと映つた。彼は取敢ず其の親衞兵八百をランヌの右翼に放ちて應急の處置を爲したが、是亦敵騎の反復襲擊に甚しく苦戰に陷つた。

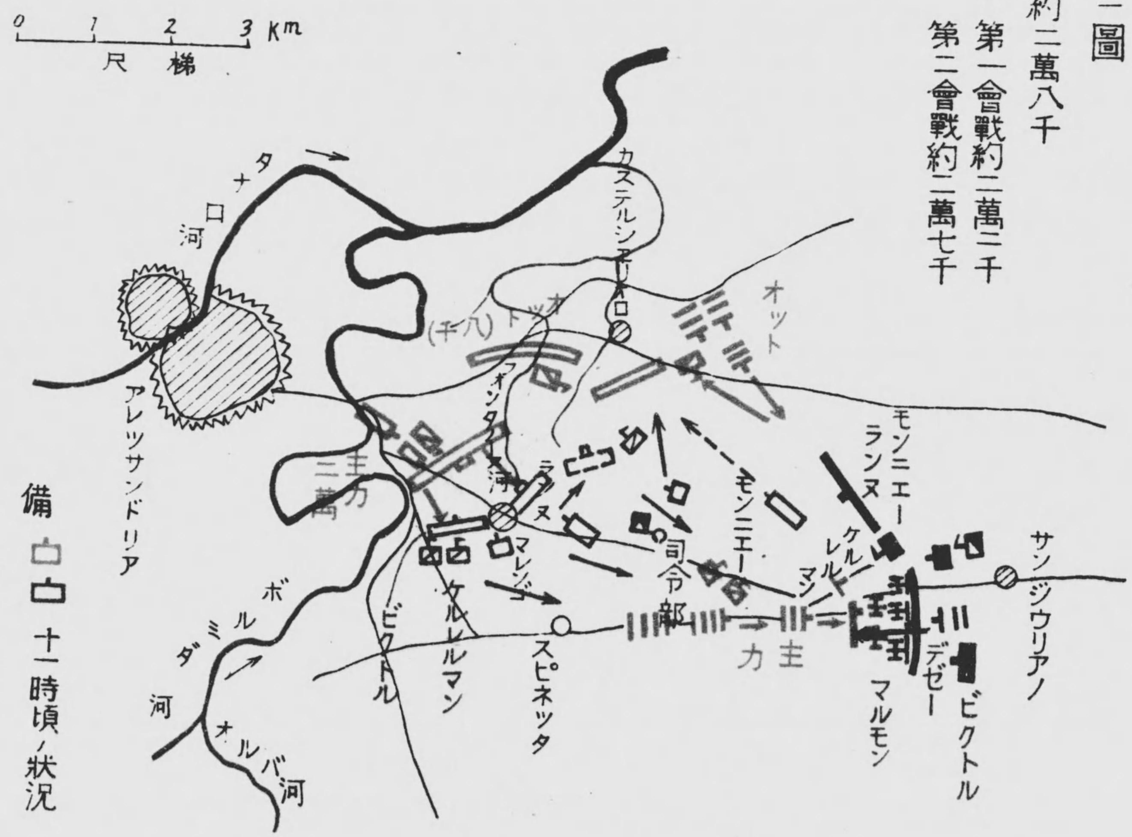
奈翁は、續いて到著せるモンニエー師團を待つ間遲しと最右翼に增加せしめ、以て親衞兵の危

第八十三圖

兵力
- 墺軍約二萬八千
- 佛軍 第一會戰約二萬二千
  第二會戰約二萬七千

マレンゴ會戰要圖

於一八〇〇年六月十四日



備考
- 白 十一時頃ノ狀況
- 黑 十七時半頃ノ狀況

急を救ひ暫時此の方面に於て小康を保つを得たるも、依然として受動の姿勢を轉回する能はず、所謂危篤の病狀を以て推移しつつ刻々危險に瀕した。斯くて名醫奈翁の手腕も施すに術なく、十四時以後ビクトル軍團は潰亂狀態となり、殆ど收拾すべからざるに至つた。ランヌ軍團も亦窮境に陷りたるも軍團長の沈著と勇敢とにより辛うじて隊伍を維持しつつ退却に就いた。

此の狀況を見た墺將メラスは、戰ひ勝てりと感得するや、喜悅よりは寧ろ身神の疲勞急に襲ひ來り、元氣は忽ち弛緩して支ふる能はざるに至り、「本國に送るべき勝報を整へる爲に」との口實の下に、其の指揮を參謀長ッアッハに委して追擊に任ぜしめ、自己はアレッサンドリアに歸還した。蓋し彼は七十歳の老齡を以て戰線に近づきて戰鬪の指揮に任じ其の乘馬二頭をも敵彈に斃された程、奮鬪緊張したる反動であつた。

第二期追擊、退却　指揮を委せられたる參謀長ッアッハは、戰勝に乘じ直ちに追擊に移るの氣力なく、先づ軍隊の集合、整頓、休憩を行ひたる後、一大縱隊となりて追擊前進を始めた。

奈翁は敵の急追を受くることなかりし爲、退却も容易に行はれ、十七時戰場より十數粁隔りたるスクリビア河畔に停止し隊伍の整頓を爲しつつありしとき、一刻千秋の思ひに待ち焦れたる南方派遣のデセーは其の一師團(五千)を率ゐて同地に到著した。

攻守忽然として逆轉　勇將デゼーは、直ちに奈翁に向つて斷乎として攻勢に轉ずべきを具申した。奈翁亦直ちに之に同意し部下を激勵して曰く、汝等は十分に退却した、今より反轉して敵を攻撃すべき時機が到來したと。斯くて十七時半先づデゼーは其の新鋭の手兵を提げ熱狂的勇氣を以て敵縱隊の先頭に突入した。ケルレルマン騎兵旅團は其の右方より敵縱隊の左側に殺到した。マルモンの砲兵十八門は墺軍の先頭を猛射した。

不意を喰ひたる墺軍は、急遽戰備を整へんとしたが、力支ふる能はず、其の前衛一千八百人は參謀長ツアッハと共に佛軍に捕獲せらるるの醜態を現出した。全軍は忽ち潰亂して逃走と變じ、算を亂して西へと走つた。其の有樣は左こそと思はれる程佛軍に取りては痛快であつたらう。逃走者はボルミダの障碍に溺死した者も少くない。其の砲二十門も河に呑まれて了つた。

墺軍のオット軍は主力縱隊よりは少しく後れて併進したが、主力の思ひがけなき敗報に、之を救援せんと思つたのは當然であるが、愈〻佛軍の整然たる前進を見るや、急に怯氣を生じ、百八十度の轉回となつた。墺軍は六千の死傷、三千の捕虜を犧牲に供した。

併し佛の勇將デゼーも此の戰鬪に於て敵彈の爲不朽の名譽を遺して戰死を遂げた。

墺將メラスは此の出來事に對し、最早如何んともする能はず、翌十五日使節を奈翁の許に派し

ミンチオ河(伊太利東部)以西に於ける伊太利全土を佛國に割讓する條件を以て講和を結んだ。

評　論

一、此の戰鬪は佛軍が二萬二千の兵力を廣地域に分散せるに乘じ墺軍が二萬八千を以て出撃せるものであり、而かも佛軍は豫期せざる戰鬪(不期遭遇戰)であり精神的に受動の位置に在りしのみならず、兵力も亦逐次に第一線に加入し常に所要に充たざる兵力を以て戰鬪を遂行したのである。第一線各部隊は勇戰奮鬪是努め十分に其の力を發揮したと認め得るに拘らず終に敗退の已むなきに至らしめたるものは、軍隊の罪にあらず用兵上の責任に歸するものであり、更に詮議すれば、敵情搜索の不適當であり、從つて敵情判斷の誤が玆に至らしめたと謂ひ得る。

二、然るに奈翁の非凡の力とデゼーの勇敢と墺軍の不用意なる前進とにより、第二回の戰鬪により全然彼我所を異にし、敵に大打撃を與へて戰勝を博し次で全軍の降服的講和の締結により結果は所謂殲滅的效果を擧げ得るに至つたのである。墺軍若しアレッサンドリアに立て籠りて抵抗を續けたりとするも、結局全滅か降服かの一を選ばざるべからざる狀態に在つたと想察し得るが故に、一種の殲滅的戰鬪と稱し得ると思ふ。

三、併し此の戰役(一八〇〇年戰役)及會戰に於て兵力の運用に關し吾人の爲敎訓となるものが自

然に浮ぶであらう。卽ち、奈翁が破天荒の冒險アルプス越を遂行したる後、敵の背後連絡線を遮斷して眞の殲滅戰を成功せしめんが爲ポー河の兩岸に兵力を二分し、何れよりするも之を捕捉し得る如く配備せるの著意は、放膽なる作戰の遂行上よりせば至當の策案であつて、今次日支事變に於ても我が軍が屢、寡兵を以て放膽に行動し包圍捕捉に努めある戰鬪極めて多きことと及獨軍が西方戰場に於ける行動及獨ソ戰に於て行はれつつある痛快なる機甲戰に於ける如き其の精神に於て一致するものである。唯此の際敵を知り己を知るの必要は、古今不變の鐵則であつて、奈翁が兵力を戰略的に二分し、其の一半も亦廣地域に分散せるは、同じく敵を捕捉するに熱中せる結果であり、爲に敵情捜索の不適當、不十分の爲、豫期せざる遭遇戰に極めて不利、危險なる態勢を以てスタートするの已むなきに至つたことは、吾人の注意して敎訓とすべきものであらねばならぬ。

四、而かも一度敗退せるも非凡の統帥力を以て戰場を距る僅かに十數粁に於て心身共に元氣を恢復せしめ、之を驅つて再び敵に突入するを得しめたことに想到するとき、彼の偉大さを想はしむると共に、デゼーの勇敢が更に一段と生氣を加へしめたことに敬意を表せざるを得ぬ。

第六例　ウルム包圍戰とフランダース殲滅戰

前者は一八〇五年戰役中の第一期戰で、奈翁が墺軍に對し、戰略的運動によりて遂に完全なる包圍に導き以て墺軍を降服に至らしめたる堂々の行動であり、後者は戰場今尙血腥き西方戰場に於けるヒットラーの統帥せる對英、佛、白軍電擊戰であり、其の構想、形式に於て相似たるものがあるによつて、玆に對照的に紹介する。

其の一　ウルム包圍戰大要

奈翁は其の不俱戴天の敵たる英國を征討せんことを企圖し、一八〇五年十五萬の大兵を英國の對岸ブーロニーに集結して海峽突破の機を睨みつつあつたが、英國宰相ピットは其の危機を他に轉向せしめんが爲、巧みなる老獪手段を弄して大陸諸國を煽動し、其の魔手に墺、露は先づ踊らされて對佛同盟を結び、奈翁の虛を窺はんとする態度を取るに至つた。恰も今次の露國が夫れであり、此の見地からすれば英國外交の成功であり、老獪飽く迄徹底して居ることは吾人の常に注意を忘つてはならぬ點であらねばならぬ。然るに奈翁は、其の企圖せる對英侵襲作戰が海戰の不利なりし爲之を斷念せざるべからざるに至つた餘憤もあり、直ちに其の大兵を反轉して墺、露の

膺懲に向けた。此の臨機の決心は奈翁としては至當であり、又英國としても思ふ壺であり、唯憐むべきは英の老獪の爲に犧牲となれる墺、露である。今次の諸威や和蘭や白耳義や乃至佛、ユーゴー、希臘なども亦其の手につかまつたのであることに於て同樣であらう。

兩軍作戰方針

墺露同盟軍

一、墺軍は主作戰を先づ伊太利方面に定め南獨逸方面は一時守勢を取らしめ以て伊太利方面の勝利を得るか或は露軍の來著を待ちて兩方面策應して攻勢に轉ず

別に一部をチロール州ガルダ湖北方及東北方地域に集結し所要に應じ南獨逸方面にも增援し得るの準備に在らしむ

二、之が爲主作戰方面にはカール大公の指揮する九萬を又南獨逸方面にはフェルヂナンド大公の指揮する六萬を、チロール州方面にはヨハン大公の指揮する四萬を配す

三、露主力軍九萬五千は墺軍に增援する目的を以て先づ其の五萬五千の第一軍は十月下旬イン河畔に又第二軍(四萬)は之に後れて西進す

別に二萬五千より成る上陸軍二箇を南部伊太利方面に上陸せしめ當面の敵を牽制す(不實行)

佛軍

奈翁は墺國が數次大打擊を受け疲勞しあるが故に恐らく獨力を以て攻勢を採るの勇なく、露軍と相合して當るものと判斷し次の方針を定めた。

一、マッセナ軍(五萬)を以て伊太利のマイクランドを根據とし主として守勢的に行動せしむ

二、主力(六軍團と騎兵集團)約十七萬を獨逸方面に使用す

而して其の戰略開進を第八十四圖に示せる如くライン河上流左岸で概ねノイブライザッハ、ストラスブルグ、ハーゲナウの線約百粁の正面に定め約十四萬の兵(四軍團及騎兵集團)を各其の現在地たる佛國海岸地方から行動を起し九月二十三日迄に其の配置に在らしめ最左翼第一、第二軍團は其の現在地たる和蘭海岸及ハンノーベル地方より行動を起し九月二十五日ウルツブリグに集結するものとす

三、步兵二十五大隊、海兵一萬を英國軍に對し海岸警備の爲殘置す

四、巴威里軍は奈翁軍に協力し主力軍と共に行動す

五、佛第七軍團は後れて南方よりボーデンゼー(湖)方面に行動す

小評論 墺軍が其の主作戰地を伊太利方面に選んだのは、政略上の目的からであつて、伊太利

方面を自己の勢力下に置かんとするに在つた。併し之を戰略上から觀察すれば、獨逸方面に選ばるべきは當然である。戰ひ勝たば自然自己の本目的を達することが容易である。抑、政戰兩略の一致、相互作用が緊密でなければならぬのは勿論であるが、政略目的を戰爭によりて達成せんとする場合には、戰略上最も有利なる方面を考察して終局の戰鬪に勝利を確實に收めなければならぬことを忘れてはならぬ。往々にして政戰兩略の圓滑なる運用に就て遺憾なる實績を見、其の結果が不首尾に終ること多きに鑑みる所なくんばあらずである。

奈翁の作戰方針に就ては、當然であり、而も其の妙味は之が實行の鮮やかなるに在る。讀者須らく次に述ぶる經過に就て了得せられんことを。

佛軍戰略開進地の變更　奈翁は九月十三日巴里に在りて次の情報に接した。曰く「墺軍は九月十日イン河を渡りて西進した」と。此の報は何を意味するか、奈翁としては其の最初の判斷を改むるを要する程の價値を有するものであつた。即ち墺軍が守勢を採るならんと至當に判斷したるに、墺軍は其の實力をも顧みず全軍の出師準備をも待たず、又露軍の來著をも考へず、其の先頭兵團を以て佛軍のシユワルツウワルド（森林地帶）通過に乘じて戰略的奇襲を敢行するの擧に出づる顧慮ありと判斷を變更するに至つたのである。是に於て彼は直ちに斷乎として其の開進地を北

方に轉ずるに決し左の部署を命じた。

イ、ストラスブルグ附近の諸要塞は敵の急襲に對し警備を嚴ならしむ

ロ、第二軍團をして速かにマインツ附近の警備を嚴ならしむ（軍の左翼警戒）

ハ、主力の開進地を北方に轉位せしむ即ちストラスブルグ以南の線を改めストラスブルグ、マンハイムの線とす（九十粁北方に轉位）

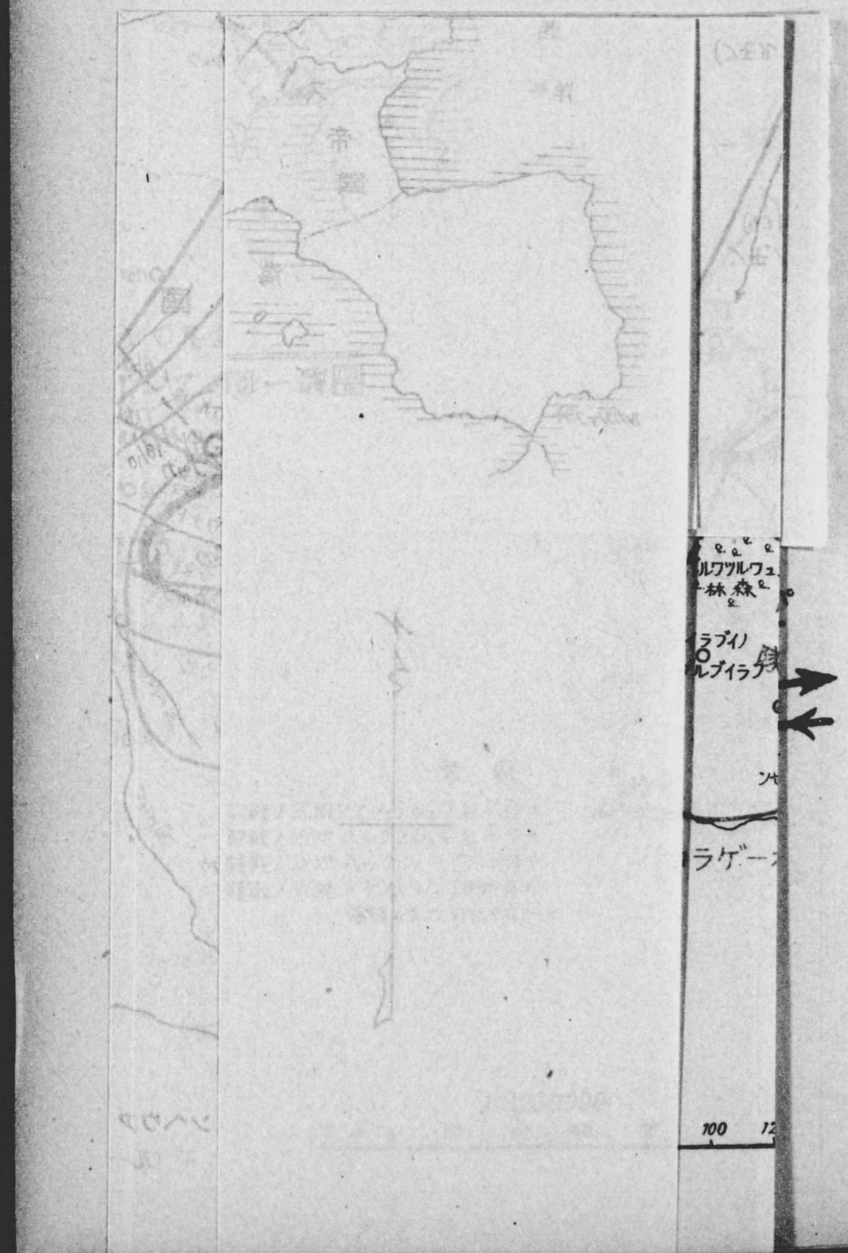
小評論　奈翁が墺軍の孤立挺進するの不利を知り先づ守勢を採るならんと判斷したのは至當である。然るに墺軍は、後述の如く政略的誤算の下に兵を挺進したのであるが、此の徵候あるを知りたる奈翁は、自軍が直接捷路をとりて森林地帶を通過するの危險なるを察知すると同時に、却つて墺軍の孤立挺進の過失に乘じ之を大規模なる迂回運動に依り、露軍の來著に先だち捕捉擊滅しようとして斯く其の開進地を北方に轉じたものであり、痛快なる行動は敵の過失により其の光輝を倍加するの機を攫んだ所に奈翁の偉大さを窺ふことが出來る。之を動もすれば敵の行動の變化乃至自己の判斷の適中せざるにより、右に代へ左に轉じ、常に敵の行動に追從して受動に陷るの不利と混合せざることが大切である。

墺軍の誤動、將帥の不和　既述の如く墺軍は當初守勢を採るの方針であつたが、事實上の實權

を握れる參謀次長マックは、軍司令官フェルヂナンド大公の意思に反して方針を變更し、其の寡弱なる軍を提げて直ちに巴威里國に侵入し同國をして强ひて自己に加擔せしめんことを企圖した。然るに此の企圖は失敗した。巴威里國王は先づ言を左右に托して準備を整へたる後其の軍を北方ドナウ河の左岸に移し奈翁軍の傘下に走つた。是に於てマックは九月二十一日メムミンゲン（ウルム南方五十粁）附近イルレル河の線に待機陣を布き、以て奈翁軍のシュワルツウワルド（森林）通過に乘じて之を攻撃するに決した。之が爲キーンマイエル指揮下の一部隊をウルムの東北百乃至百二十粁に在るノイブルグ及インゴルスタット（何れもドナウ河畔）に派遣して巴威里軍及遠く東北方より南下中なる佛第一軍團等に對して主力の側背を警戒せしむるの處置をとつた。

小評論　敵の森林通過に乘ぜんとするの意思は、抽象的に觀察すれば、卽ち敵の不利なる態勢に乘ずるに在るが故に敢て不可なりとせぬ。併し能く自己を顧みれば、其の兵力は遙かに劣勢であり、對手は名將であり自軍も屢、大打擊の痛棒を喰つて居るのである。故に奈翁が自分の判斷する如く森林通過を敢行するにしても、之に對し孤立挺進するは冒險以上の何物でもない。「飛んで火に入る夏の蟲」である。

殊に總指揮官とマックとの軋轢に就ては、最も忌むべき事件であり、統帥上の惡例を示せる

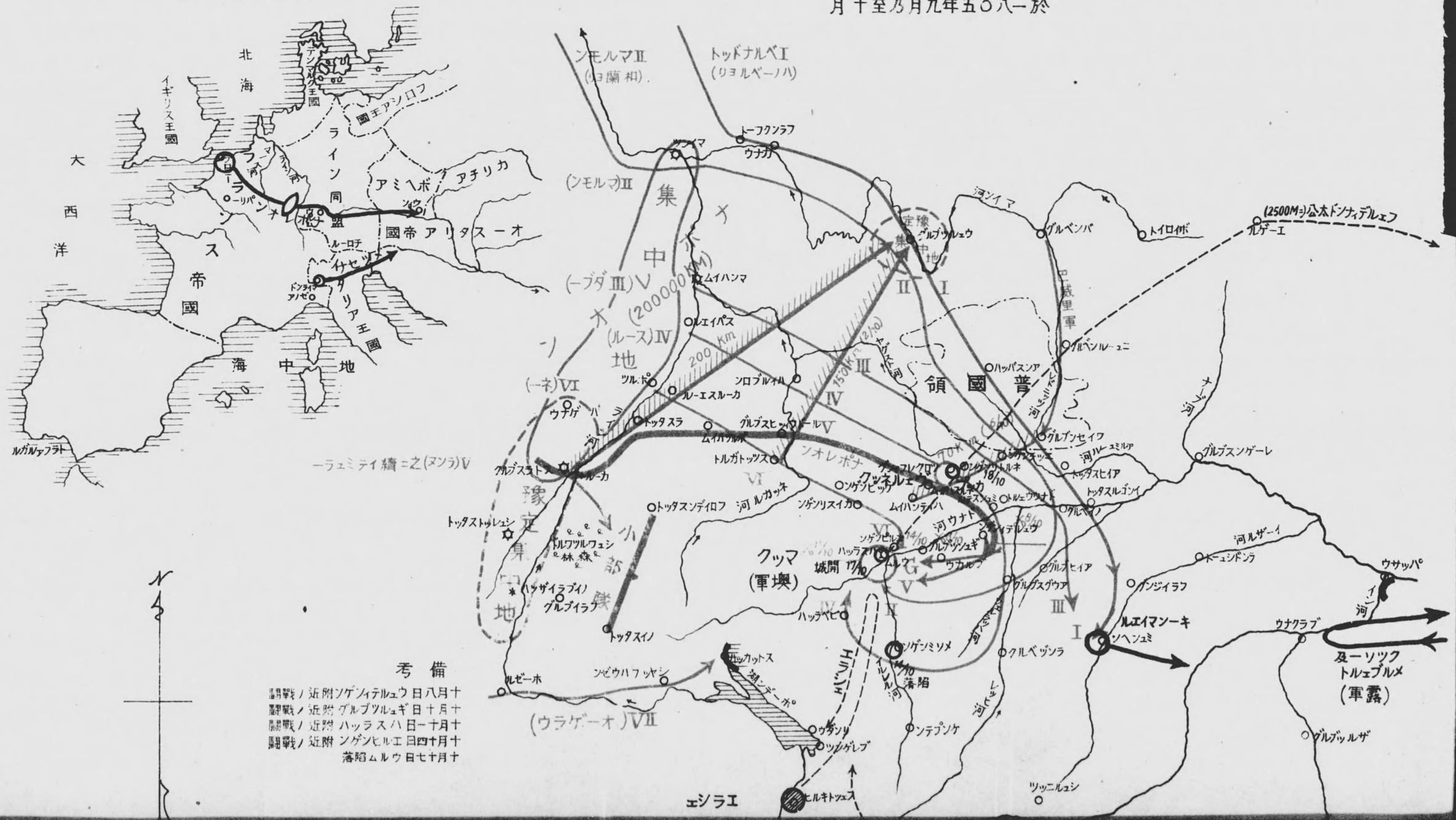


ウルム附近戰闘要圖
於一八〇五年九月乃至十月
千八百五年戰役一般圖
普國領
備考
十月八日ウェルティンゲン附近ノ戰闘
十月十日ギュンツブルグ附近ノ戰闘
十月十一日ハスラッハ附近ノ戰闘
十月十四日エルヒンゲン附近ノ戰闘
十月十七日ウルム陥落

千八百五百年戰役一般圖

ウルム附近戰鬪要圖

於一八〇五年九月乃至十月



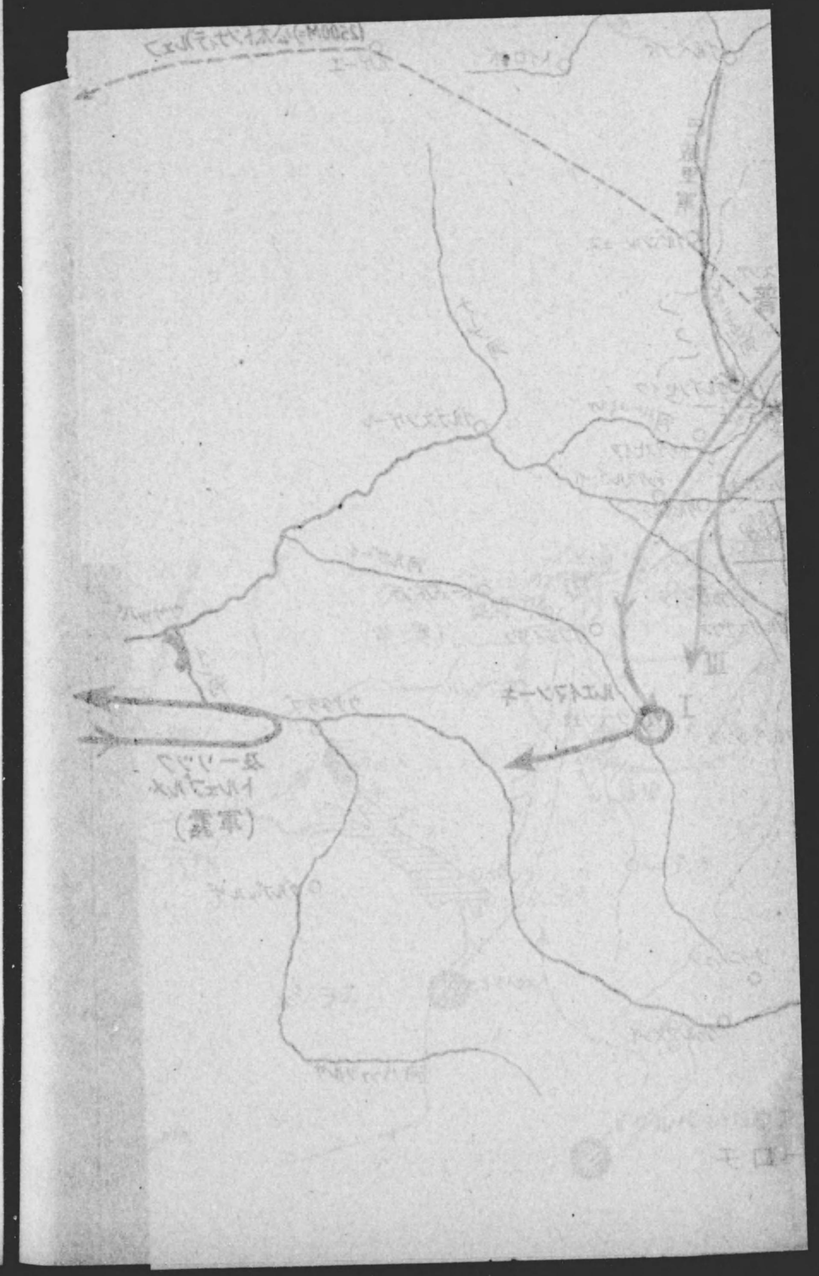
備考
十月八日ウェルティンゲン附近ノ戦闘
十月十日ギュンツブルグ附近ノ戦闘
十月十一日ハスラッハ附近ノ戦闘
十月十四日エルヒンゲン附近ノ戦闘
十月十七日ウルム陥落
V(ランヌ)之ニ續イテミュラー
1:2,000,000
20 10 0 20 40 60 80 100 120 Km.
オーストリア帝國
イタリア王國
地中海
西洋
ス帝國
普國領
集中地
豫定集中地
小部隊
ウルム
(墺軍)
クツーソフ及メルフェルト(露軍)
ミュンヘン
チロール
フォアールベルグ
エーゲル
ヒルキトッフェ

備考
十月八日ウェルティンゲン附近ノ戰鬪
十月十日ギュンツブルグ附近ノ戰鬪
十月十一日ハスラッハ附近ノ戰鬪
十月十四日エルヒンゲン附近ノ戰鬪
十月十七日ウルム陷落
1:2,000,000
20 10 0 20 40 60 80 100 120 Km.
マック
(墺軍)
ウルム
チロール
普國領
地中海
帝國
西洋
オーストリア帝國
クツーソフ及
メルフェルト
(露軍)

ものでは、其の應報の覿面なるに徴しても戒心すべきことである。

奈翁は九月十七日ライン河の渡河と其の後の行動とに關し詳細なる命令を各軍團に下したが、具體的の事は茲に省略するも、要するに第八十四圖の如くライン渡河後は右翼ストラスブルグより左翼ウユルツブルグに亙る約二百粁の正面に全兵團を統制し、更に敵に近づくに從ひ右をスツトガルトに進め以て其の正面を約百五十粁に縮小し愈、ドナウを敵前渡河せんとするに際しては之を約七十粁の正面に收縮し、爾後急に右方に急角度に轉向し時々刻々の敵情に基き巧みに各兵團を運用し、終にウルム城にマックの率ゆる墺軍を完全に包圍し之を降服せしめたのである。

墺將マックは奈翁軍の一部(主として騎兵團の一部)が、シユワルツワルド森林方面に陽動を試みたるに欺騙せられて南方ボーデンゼー(湖)方面に有力なる部隊を配置して之に備へた。然るに時日の經過と共に佛軍の行動方面が漸次明かになり、始めて其の兵力分散に過ぎたるに氣著き、急に其の兵力を集結するに勉め、一部をドナウ渡河點に配置し、其の他は全部ウルムに集結すべく、十月五日より此の運動に著手した。其の後佛軍が各渡河點よりドナウを渡り、墺軍の一部隊を擊破しつつマックの主力に向ひ右旋回をなし來るや、マックは一度之を突破するに決せるも、爾後逡巡して實行に至らずして止んだ。



軍司令官フエルヂナンド大公はウルムに駐止するを危險なりとし速かに同地を撤退せんことを欲したが、マックは之に應じない。是に於て大公は軍司令官の身を以て騎兵の一部隊に護られて自からウルムヲ去り其の部下軍隊を見捨てた。言語同斷と謂はざるを得ぬ。

斯くて十月十六日奈翁はウルムに對し砲擊を試みた後、開城談判に移り、二十日に至りマックは其の守兵三萬を以て佛軍に投降した。實に最初の脱兎的行爲に似ず腑甲斐なき終りであつた。而して此の方面に於ける他の墺軍も所在佛軍の追擊を受け或は投降或は殲滅せられ、以てウルムの役は終結したのである。

其の二　フランダース殲滅戰大要

フランダース殲滅戰は、和蘭征服に引續いて行はれたる大規模なる作戰行動であつた。此の作戰の總指揮官はブラウヒッチ元帥、其の總參謀長はハルダー大將であり、其の統帥下に左の三集團軍が屬せられた。

右　翼
ボック集團軍
司令官　ボック元帥

中　央（主力軍）
ルンデステット集團軍
司令官　ルンデステット元帥
第十四軍、第十六軍、第十二軍、集團機械化第二十二軍、同第十九軍

左　翼
レーブ軍
司令官　リッテル・フォン・レーブ元帥
第一軍、第七軍

第十八軍、第十六軍、集團裝甲機械化第十五軍、同第十六軍

各集團軍の任務要旨

一、左翼に在るレーブ集團軍は、突破集團軍たるルンデステット元帥の率ゐる中央軍及右翼に在るボック集團軍が蘭、白を席卷しつつ英、佛軍に對し殲滅的大打擊を與ふべき作戰行動を容易ならしむるため、瑞西國境よりライン河に沿ひモーゼル河に亙る間を堅固に守備し次で突破主力軍の作戰進捗に伴ひ攻勢に轉ぜしむ。

二、ボック司令官及ルンデステット司令官は、左レーブ軍の掩護に信頼して一意攻撃前進を敢行し、モーゼル河より北海に亙る敵の全正面に於て國境陣地を突破し、而してボック軍は和蘭全土を攻略せば直ちにアントワープ市ダイル陣地に向ひ前進し、主として首都ブリユッセルを目標に、爾後はリース河畔に沿ひ北部白耳義地區をフランダース平野に向ひ前進せしむ。

ルンデステット軍はリエージュ要塞を攻略せば左方面に攻撃の重點を指向し、マース河に直進し、裝甲機械化兵團の重點をセダン附近に堅持し速かにナムール、デイナン、ジヴエー間に於て各、マース河を渡り、集結し得べき全裝甲機械化兵團を以て獨、佛國境マヂノ陣地に殺到し一氣に之を突破す。其の突破正面をセダン、モーブーシユの線約百粁の地區と豫定す。

國境突破後、機械化主力軍を以て左をオアーズ河、エーヌ運河及其の他の河川に托して大なる急轉回を行ひ、ドヴア海峡に向つて突進しフランダース、アルトワ地區になる英佛軍を包圍して殲滅又は海中に壓倒せしむ。

特にルンデステット元帥には重要なる一任務が課せられた。即ち本突破作戰乃至包圍殲滅戰の進行中に於て左側を十分に警戒し一九一四年の第一次歐洲大戰巴里進擊中マルヌ河畔より佛軍に反擊せられたる如き悲劇を斷じて繰返さぬを要すと。

經過の大要　開戰第一日(五月十日)の朝、獨空軍は大擧して白、蘭、北佛方面を襲ひ以て敵軍民の膽を寒からしめた。爾後其の猛威を重加して、要塞、鐵道、工廠、飛行場其の他の重要施設に爆擊を加へ又多數の敵飛行機を擊墜して、殆ど空中權を短時日に掌中のものとした。

進擊中間もなくマース河の障碍に衝突した。此の渡河戰には火力の絶對多數を以て壓倒するの主義を採つた。空爆と重、輕火砲其の他を以てする猛擊とにより、準備せる浮囊舟隊を以て一齊に渡河を敢行し苦もなく突破に成功した。

要塞の攻略も同樣であり、殊に地上砲火と相俟つて空中よりする協力が有效であり、何れも難なく獨軍の手に收まつた。落下傘又はグライダーの利用により奇襲的に奪取した要塞もある。此等の事は個々の戰例として既に周知のことであるから玆には之を省略する。

斯くて右翼ボック集團軍は和蘭を數日間に征服し轉じて白耳義に進入し、先づアントワープを屠り、ブリユッセルには無血入城をなし將にフランダース平野に突進せんとするの勢ひを示し、中央ルンデステット軍も亦南部白耳義、ルクセンブルグ大公國を通過しマース河を强行渡河し、セダン、モーブージユ間でアルデンヌ森林地帶を踏破せんが爲猛進中で、其のマース對岸に到著したのは五月十三日であつた。然るに其の正面前には佛第九軍團(三師團)があるのみであつた。此

の佛軍團は其の任務の重大なるに鑑み大に奮鬪を試みたが、獨軍の怒濤の如き勢に敵すべくもあらず、斯くしてルンデステット軍はマヂノ線突破に著手すべく、先づヂベー要塞を力攻して之を陷れ以て北佛進入の天嶮を突破した。愈〻マヂノ要塞の攻撃である。難攻不落と誇稱したマヂノ、十年の長時日と巨億の財を投じた鐵壁、之を驚く勿れ獨逸は二日間で突破した。佛軍は驚いたらう、否な全世界は啞然とした。

「獨軍マヂノ線突破」の飛報は夢かとばかり佛軍統帥部を面喰はせ、爾後の難局を誰しも想はぬ者はないと同時に直ちに巴里が危いと直覺し、あらゆる軍隊を急遽かき集めて之が防禦に努力した。併し如何せん、狼狽、混亂の極に達せる無數の避難民は交通を杜絶し之が整理の手段なく、急速の兵力轉用に大なる障碍を與へ、重大なる危機に迫られた。此の間獨軍の宣傳は飽くまで「巴里へ」であつた。此の宣傳は佛の軍民のみならず獨逸國民も軍隊も將た全世界も斯く信じた。

急轉回と殲滅戰　マヂノ線の一部を難なく突破した獨軍は佛の小抵抗を排除しつつルンデステット集團軍の先頭たる機械化第二十二軍は快速を以て西南エーヌ河に向ひ突進し又右縱隊たる第四軍はサンカンタン及其の附近ソンム河に、左縱隊たる第十二軍はヴェルダン方面に進擊し、恰も巴里に殺到せんとする氣勢を示した。然るに此の兩軍の急追擊は其の到達線に於て、一時停

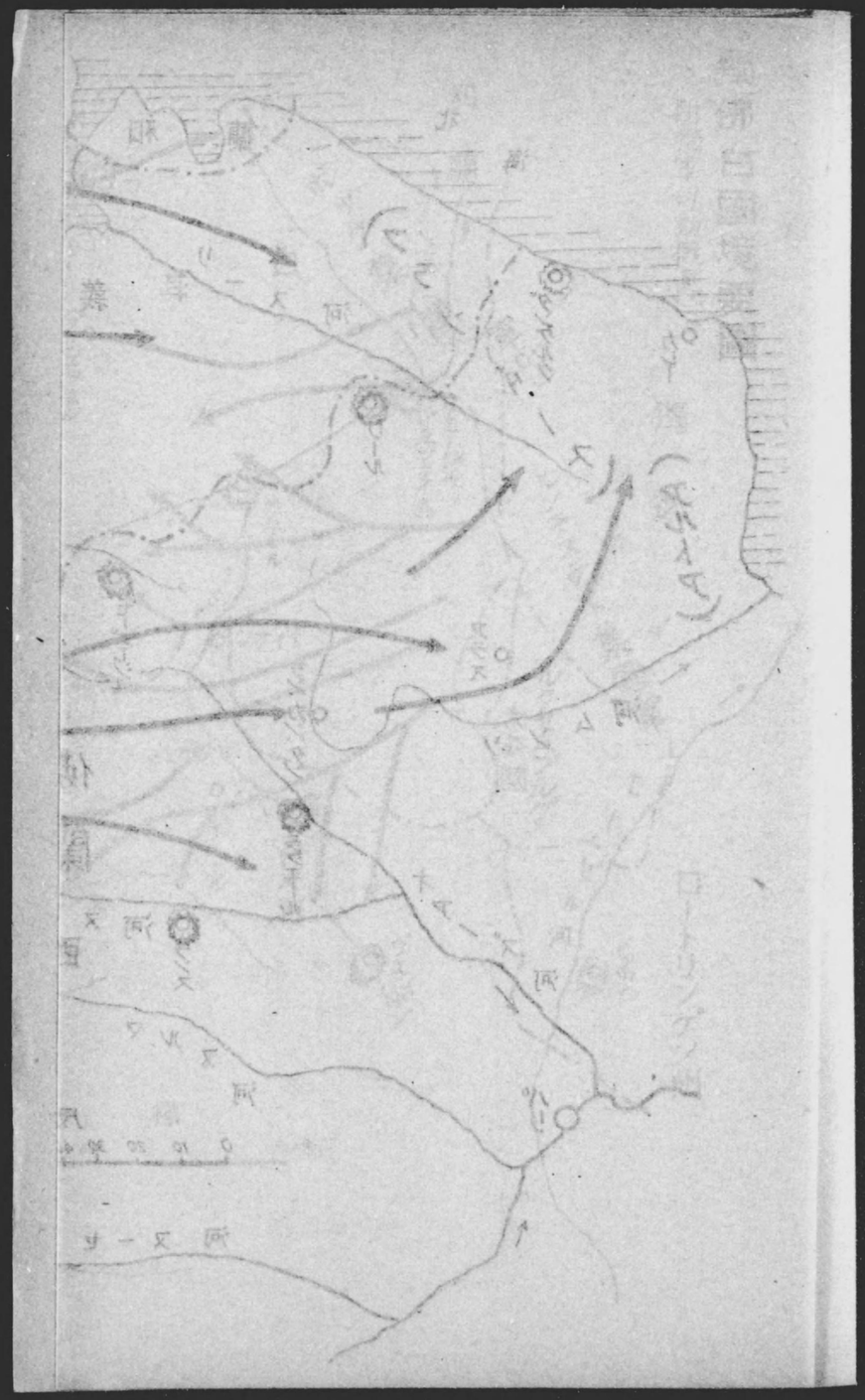
止された。是卽ち南方に對する抑へであつて、佛軍の北上に備へ、獨軍主力の海岸に向つてする急轉回の側背掩護であり、第一次大戰當時マルヌの反擊に敗れたる教訓に基くものである。

是に於て殲滅戰の直接スタートが切られた。前記機械化第二十二軍は電光石火、急に機首を北方に轉じた。恰も五月二十日の早曉である。斯くて右翼方面より突破前進せる第十六軍及機械化第十九軍と策應して海岸線カレー、ダンケルクを一般の目標線としてアルトア地方に進入し、茲に白耳義に在る英佛軍と佛國に在る佛軍とを完全に分離遮斷し、以て大殲滅戰達成に勇躍した。

前記兩機械化集團軍は時速四、五十粁の快速を以て巧みに河川と平行せる道路を利用し、別段の障碍もなく進擊した有樣は寧ろ驚くべき早業である。恰もアベヴィーユ市の練兵場で佛軍が呑氣にも演習中であつたのに對し、忽然として奇襲を試みた程に全然敵の意表に出でた。

最右翼のボック集團軍も前述の如く破竹の勢で急進し、爾後運河の敵前渡河には相當の激戰を交へたが、機を失せず進擊を續けた。

斯くて五月二十五日には第八十六圖其の一の如く包圍網は完成し、逃げ口は唯海路あるのみとなつた。爾後フランダースの平野は面積僅かに三萬方粁の狹小なる地域に、獨軍對英、佛、白軍合計約二百萬が互に入れ亂れて紛戰、亂鬪數日に亙つたのである。五月二十八日には同圖其の二



の如く佛第一、第七軍團及機械化兵團は一團となりて獨軍に完全に包まれ孤軍奈何ともする能はざるに至りて大損害の後に投降した。白耳義軍五十萬も亦二十八日其の國王レオポルド三世と共に兜を脱いだ。

老獪に徹した英軍は、佛第一軍團と白軍とに自軍の退却を掩護すべきを要求し、自軍はオステンド、ダンケルク間五十粁の海岸から多數の運送船と軍艦とを以て、獨軍の空陸よりの猛攻に狼狽しつつも佛軍の犠牲によつて辛うじて本國に逃げ歸つた。

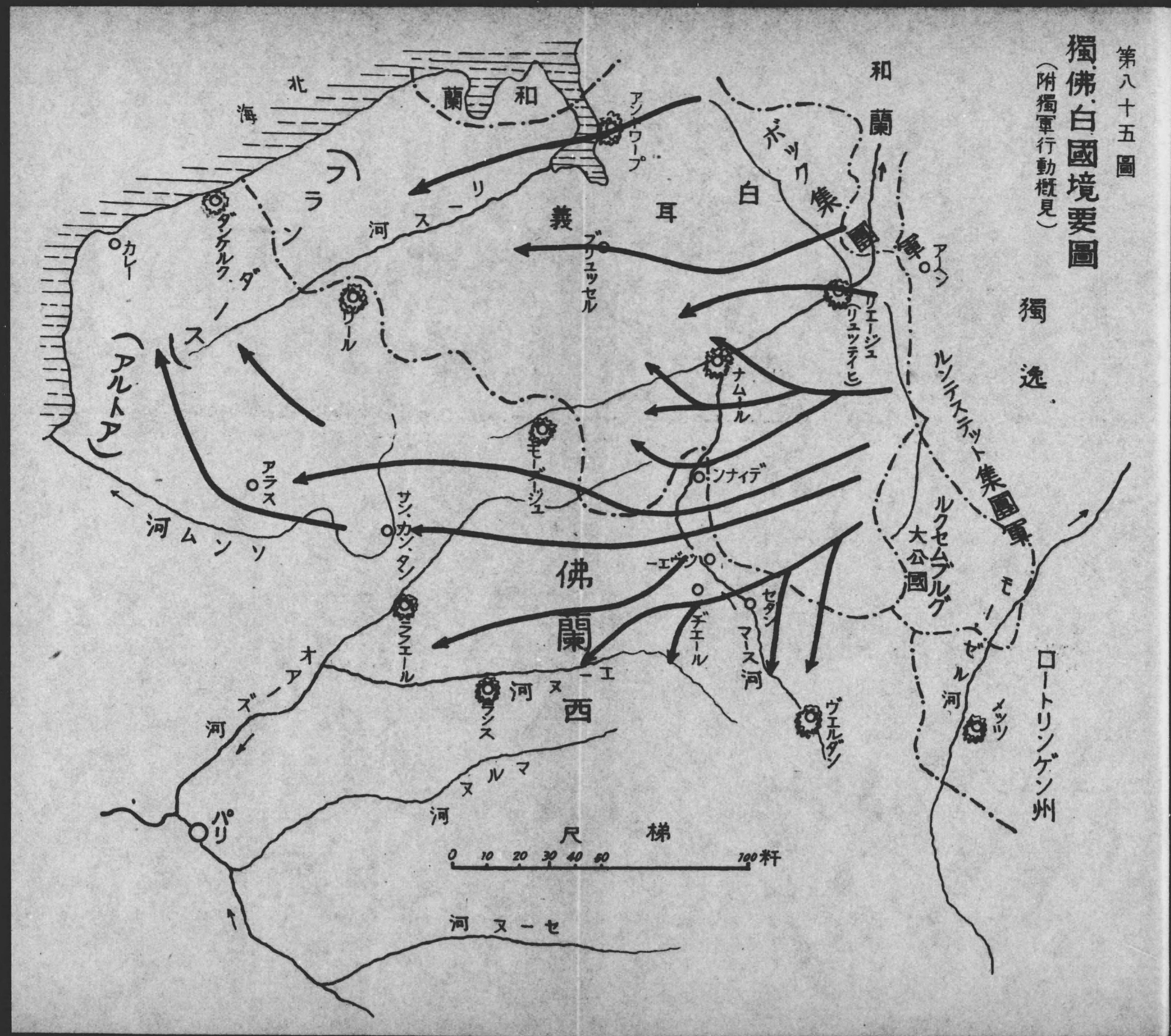
獨軍の敢行せる殲滅戰は斯くして終幕となつた。其の赫々たる戰果は實に有史以來のものとして記錄さるべきであらう。聯合軍の捕虜合計百二十萬以上(死傷を含まず)、飛行機の撃墜千八百四十一機、巡洋艦五、驅逐艦七、潜水艦三、其の他九隻、運送船六十六隻は撃沈せられ、大損害を與へたものは之に數倍の數に達した。其の他獨軍の鹵獲せる武器は約八十師團分に相當する。獨軍は死傷六萬數千、飛行機四百三十二機を損したに過ぎぬ。

次で獨軍は鋒を轉じて巴里方面に進撃し約三週日を以て全佛軍を壓服し、休戰に至らしめたことは周知の通りであり、之によりて更に捕虜百九十萬人、鹵獲資材五十五師團分及マヂノ要塞の全裝備等多量の戰利品を獲得したのであつた。

第八十五圖

獨・佛・白國境要圖

（附獨軍行動概見）



第八十五圖

獨.佛.白國境要圖

（附獨軍行動概見）

獨逸

和蘭

白耳義

佛蘭西

ロートリンゲン州

ルクセムブルグ大公國

ボック集團軍

ルンデスティット集團軍

アーヘン軍

アントワープ

ブリュッセル

リエージュ（リュッティヒ）

ナムール

モーブージュ

ヴェルダン

メッツ

ナンシー

ヴェルダン

ランス

ラフエール

サン.カン.タン

アラス

ダンケルク

カレー

ボーヴェー

ルーアン

パリ

ムーズ河

ムーズ河

ルマヌ河

セーヌ河

ライン河

ゼル河

マース河

セダン

ヴェルダン

（アルトア）

北海

尺梯

0 10 20 30 40 50 100粁

第八十六圖

其一（五月二十五日獨軍包圍完成）

其二（五月二十八日包圍圍收縮）

第八十六圖

其一（五月二十五日獨軍包圍完成）

其二（五月二十八日包圍圈收縮）

其一（五月二十五日獨軍攻圍狀況）
第八十六圖

其二（五月二十八日獨國攻略）

甲圖

ラ
イ
ン
河
ストラスブルグ
シュワルツウルド森林
壊軍
ムー
ミュンヘン
露軍

乙圖

獨軍
北海
英國
ダンケルク
カレー
日
佛
アントワープ
ブリュッセル
吉耳義
ライン河
獨逸
ソンム河
ルクセンブルグ國
河ヌーワ
河ヌーエ
河ヌーセ
巴里
佛

評論

一、ウルム戰とフランダース戰とは其の構想乃至形の上に於て相似たるものがある。卽ち別紙甲圖に於ける如く一部を以てシュワルツウワルド森林通過と見せて、墺軍を其の方面に牽制し、主力は北方より墺軍の北側を迂回しドナウを渡河するや急轉回を以て墺軍をウルムに完全包圍圈を完成し此の間一部を東方に派遣して露軍の西進に備へしめた。又乙圖に於ける如く獨軍主力は主力を以て北部白耳義を通過すると見せて英、佛、白軍の大部を該方面に牽制し、次で中央軍を以てマヂノ線を突破し、直路巴里を衝くと見せて北方に急轉回をなし、ダンケルク、カレーの線に向ひ包圍圈を壓縮し、此の間一部を以て巴里方面より北上する佛軍に備へしめた。此の兩戰の關係は斯くの如く相通ずるものがあり、何れも痛快なる殲滅戰たるに於て更に意義深きを感ずる。前者は奈翁の非凡の統帥力を以てせる電擊戰であり、後者は空軍、機甲軍の活躍に基づく電擊戰であつた。凡そ時代の推移に從つて、其の用ゐる兵器、資材が異なり、個々の戰法に於て差があるとはいへ、其の用兵の精神に於て相通ずるものがあり、原則に於ては古今同樣不變であることが首肯される次第である。

而して奈翁はウルムの役後直ちに長驅して遠く東に進み、アウステルリツクに露、墺兩皇帝の指揮する軍に殲滅的打擊を與へて一八〇五年戰役を終了したのであるが、フランダース會戰後に於ても獨軍は直ちに其の鋭鋒を南に轉じて佛軍を席卷し、以て降を軍門に請はしむるに至つた經過も亦兩者相似の形であつた。

二、戰鬪の勝敗に就ては、ウルムもフランダースも其の原因餘りにも明瞭であり、玆に具體的說述の必要はあるまい。指揮統帥の巧拙、軍隊素質の精粗等は言はずもがなであるから、唯玆では次の一平凡事を揭げて戒とするに止める。

ウルムもフランダースと共に勝者は常に主動の位置に立ちて、而も神速機敏に行動し、敵の意表に出で、殆ど對應の處置をなすの暇なからしめた點である。卽ちシユワルツウワルドより進出するかと待ち構へて居る內に、其の側背に突如として迂回し、東進するかと見る間に早や自己の前面に群がり、奈何んともする能はざらしめたのは奈翁であり、又北部白耳義に殺到すること前大戰に於けるが如しと見せかけたる獨軍が、突如中央よりマヂノ線を遮二無二突破し、次で巴里に向ふと宣傳しつつ急に北方に轉回せる早業によつて、佛軍指揮官をして既に精神的に自失せしめたのが後者の勝利であつたことに想到すべきである。

第七例　一八〇六年戰役大追擊戰及フランダース會戰後に於ける大追擊戰

前者は奈翁戰役中の精華とも稱すべきもので、其の大追擊に依りて徹底的に完全に敵を殲滅屈服せしめたる戰例であり、後者は周知の如く現戰役西方戰場に於ける獨軍の電擊的作戰によりフランダースに英、佛、白の大軍を包圍擊滅したる後、鋒を轉じて佛軍に向ひ、巴里を占領し更に遠く佛國內に挺進し遂に佛軍の全面的降服となりたるもので、殲滅戰的追擊戰に於て兩者相通ずるものがある。依つて兩者を併せて其の大略を研究する。

其の一　一八〇六年戰役大追擊戰

兩軍の編成、作戰方針及集中の大略

普國は、一八〇五年戰役に於て當然起つて露、墺と協同作戰に出づべき好機であつたに拘らず逡巡して墺、露を見殺しにした。然るに翌一八〇六年に入るや奈翁の政策に刺激せられて國論が沸騰し始めた。英國は自己防衞の見地から盛んに普を煽動し、其の魔手に躍らされた普は孤獨以て奈翁の鋭鋒に刄向ふべく、王后ルイゼの如き女だてらにあられもなく、名譽隊長とかの資格で

駿馬に跨り、戰爭熱鼓吹の爲狂的運動に奔走した。其の甲斐ありてか、普國は自力をも顧みず、所謂飛んで火に入る夏の蟲となるに至つた。

斯くて八月九日を以て普軍の動員令は下され、左の三軍が編成せられた。

總司令官兼本軍司令官　ブラウンシユワイヒ公

本軍	歩兵六師團	五萬四千人
ホーヘンローヘ軍	歩兵五師團	四萬人
リユツヘル軍	歩兵三師團	一萬八千人
計		十一萬二千人

普軍首腦部では、九月下旬に入り諸將をナウムブルグに集めて作戰計畫を討議した。目睫の間に迫れる大戰の危機に臨み、恰も議政壇上に於ける如き甲論乙駁の議論に互に相讓らず、荏苒時日を空過したが、結局最初の積極的方針が漸次消極的となり、會戰直前には第八十七圖に示す如く、主力はイエナ西方高地に、一部はワイマーよりエルフルトに亙る間に位置し、佛軍の退路遮斷を恐れて、一先づ北方ヤウムブルグを經て北方に退避し以て後圖を策すると云ふ不戰退却案にまで墜落した。

佛軍は奈翁の一貫せる方針の下に左の如く編成せられ、十月初め概ねアムベルグ、ニユルンベルグ、ウユルツブルグの線及其の附近に集中し、前進の準備に在つた。

近衞軍團（歩兵一師團、騎兵一師團）	九千人
第一軍團（歩兵三師團、騎兵一旅團）	二萬五千人
第三軍團（歩兵三師團、騎兵一旅團）	三萬三千人
第四軍團（歩兵三師團、騎兵一旅團）	三萬五千人
第五軍團（歩兵二師團、騎兵一旅團）	二萬三千人
第六軍團（歩兵二師團、騎兵一旅團）	二萬一千人
第七軍團（歩兵二師團、騎兵一旅團）	一萬六千人
巴威里軍團	八千人
特科兵	八千人
計	十九萬八千人

奈翁は、露軍が普軍と連合せざる内に各個擊破を策し、十月八日を以て三縱隊となりて北進を開始し、十二月十二日第八十七圖に示せる如く敵とザーレ河を挾んで其の一部は北方敵の連絡線

を遮斷するの位置に進み、一部はイエナ附近にて近く相對し、主力は尙相當の距離にあつて行進中であつた。併し兩軍共此の日未だ敵の位置に就て明確なる報告に接せず、奈翁としては敵の主力がイエナ西方高地に在りと判斷し、十四日を以て之と決戰を交ゆべきを豫想し其の準備に最大の努力を拂つた。

普軍では當時既に北方退避に決したので、ホーヘンローヘ軍を以て本軍の右側背を掩護せしめ本軍はワイマーよりナウムブルグを經て退却するに決した。而して佛の有力なる兵團が、既にナウムブルグ方面に到達しありとは信ぜなかつた。ところが豈に測らんや、ナウムブルグ方面より佛第三軍團が十四日濃霧中、西進して北方より佛軍主力と策應すべく行動中であつて、突如アウエルシユテツト附近で普の本軍は優勢を以て不期遭遇戰を交ゆるに至つた。然るに結局普軍は其の二師團をも戰鬪に參加せしめず、佛の三師團に對し略、同等の兵力を以て對抗せしめたのみで、可惜勇戰奮鬪の甲斐もなく敗北した。(此の戰鬪の狀況に就ては戰史評論第十八古今遭遇戰例第三例及同附圖第三十四圖を參照)

イエナ會戰經過大略　(第八十八圖參照)

會戰は十月十四日イエナ西方高地及ナウムブルグ西方アウエルシユテツト附近の二箇所で惹起

せられた。後者は前述の如く佛の第三軍團の三師團と普軍主力五師團との間に起れる不期遭遇戰で、其の戰況は既に遭遇戰の部で紹介したから、玆には前者の戰鬪に就て追擊戰研究の前提として略述する。此の會戰は、奈翁の主力と普のホーヘンローヘ軍及リユツヘル軍との間に起れる遭遇戰で、何れも五萬數千の兵力を以て決戰をなし、兩軍共に勇戰奮鬪したが、結局佛軍の勝に歸したものである。

十四日早曉迄は佛第五軍團のみが前日來優勢なる普軍の前面に近く孤立して位置し、頗る危險なる狀態に曝されてあつた。奈翁は前夜來親しく第一線を指導して萬一の爲の戰鬪の準備に徹夜したのであつた。

愈、十四日となるや、佛の諸兵團も强行軍によりて逐次イエナに到著しつつあるを確認したる奈翁は、攻擊の火蓋を切り、戰鬪の幕は開かれ、逐次敵の一部を壓迫、擊退しつつドルン高地附近の線に進出するまでは、比較的容易に各個擊破の功を收めた。然るに同線に進出せる頃ホーヘンローヘ軍の主力がフイルツエーン、ハイリーゲン附近の線に展開した。當時佛軍は尙逐次後方兵團の增加中で、兵力が劣勢であり、一時は苦戰をなしたが、各兵團が第一線に展開するに伴ひ戰勢は漸次佛軍に有利に進展し、午後に入り遂に普軍は大損害を蒙りて敗退し始めた。恰も此の

時頃リュッヘル軍一萬五千は悠々と戰場に到著し、友軍の敗退を既倒に回すべく奮鬪したが、騎虎の勢に殺到する佛軍を支ふべくもあらず、忽ち全軍潰亂した。

是に於て此の方面の全普軍を擊破したる佛軍は、直ちに戰場追擊に移り、ワイマー東側森林中に集合中の敵敗殘兵を更に潰亂せしめて、イエナの會戰を終つた。此の會戰で佛軍は五千の損害を受け普軍のそれは二萬に達したであらう。

小評論 イエナ附近の會戰は本研究の主目的ではないが、戰鬪の勝敗に就て一言を試みる。

一、此の會戰に於ける兩軍の兵力は、五萬數千略、伯仲の間に在りて大差がなかつた。而して普軍の爲に勝利の機會があつたか何うかといふことを史的に觀察すれば、確かに之を發見することが出來る。卽ち戰鬪の前日に於て佛は第五軍團のみが孤立してザーレ河の西岸に進出し、普の五萬數千と對して居つたのであるから、普軍が思ひ切つて主力を擧げて出擊したならば、此の第五軍團に痛擊を與へることが出來たのである。

二、翌十五日に於ては、普軍の一部が獨立して突出位置した爲、却つて佛の第五軍團から叩かれて大損害を蒙り退却したのに對し、第五軍團は逃げるを追うて少しく孤立挺進に過ぎた。後續兵團は未だ第一線に加はらざるに、普の主力は攻勢に轉じた。正に是瞬時を爭う

て猛攻を爲すべき好機である。劣勢なる佛軍は爲に一時危地に瀕し苦戰を嘗めたが、能く其の位置を維持しつつある間に後續梯團が逐次增加し頽勢を挽回せるのみならず、戰況は有利に進展して普軍の敗北となつた。之が彼我處を換へたならば、普軍は忽ち潰滅せられたであらうが、佛軍の精鋭にして而も新戰法卽ち散開戰術を以て敵に當つたから、勝利に導く迄の苦戰に堪へたのであつた。畢竟普軍は密集大目標を呈し百發百中の損害を受くるに反し、佛軍は能く地物を利用し目標を小にし損害を免れたこと及各將兵の戰場に於ける勇敢なる動作竝に平素訓練を積めること普軍に比し遙かに優つて居つたことに基因する。

三、尙リュッヘル軍が牛步漫々として戰ひ敗れたる後に戰場に到著し、其の戰渦中に捲き込まれてリュッヘル自身も負傷し散々に打ちのめされたのは、各個擊破の機を佛軍に與へたものである。傳ふる所によればリュッヘルは協同心に乏しくホーヘンローヘより救援の請求を受けたとき故意に前進を遲くし、普軍が大に苦戰しつつある頃、自から佛軍に當り功名を一身に收めんとしたのだといふことである。若し然りとすれば軍の危險之より大なるはなしである。

未曾有の大追擊戰經過（第八十九圖參照）

マグデブルグに至る追撃（自十月十五日至十月二十日）　奈翁は敵主力の退却方向をエルフルト（要圖南端）及ワイセンゼー（エルフルト北方二十五粁）を經てマグデブルグ（ワイセンゼー東北百十粁）方向に取るならんと至當に判斷し、卽夜追擊部署を定めた。但し奈翁は、會戰の翌日卽ち十月十五日九時に至り始めてアウエルシュテット附近にも會戰ありしことを知り、自己の前面以外にも尙敵の大軍ありしに氣著いた。從つて追擊部署は少しく訂正せられたが、其の大要は次の通りである。

右追擊縱隊

第三軍團　ライプチヒ（イエナ東北六十五粁）を經てウイッテンベルグ（エルベの河畔）に向ひ追擊

第五軍團　ハルレ（ライプチヒ西方三十粁）を經てロスラウ（エルベ河畔）に向ひ間接追擊

第七軍團　第五軍團に續行

中央追擊隊

第一軍團　クエルフルト（イエナ北方五十粁）方向に敵本軍の追擊

左追擊縱隊

ミュラー騎兵團
第六軍團　エルフルト方向より直接敵を追擊

第四軍團はエルフルト方向に退却せる敵とアウエルシュテット附近で破れたる敵本軍との遮斷に任ず

小評論　右の部署に依れば、奈翁の判斷せる敵の退却方向卽ちマグデブルグに對し其の退路に尾して直接の追擊に任ずるものは左追擊縱隊で、二軍團と騎兵集團とを以てし、間接に捷路を取つて右方から追擊に任ぜしめたのが右追擊縱隊であり、之が主力約四軍團である。而して兩縱隊の中間に一軍團を進めて兩縱隊の連絡乃至機に應じて何れにも轉進救援し得る如く配置したものと觀ることが出來る。奈翁が突嗟の間に斯くの如き部署を執り之を躊躇なく斷行したのを偉とすると同時に、其の著眼も流石と謂ひ得るであらう。若し追擊各兵團の速度が現今に於ける機械化兵團の如きものがあつたならば、恐らく普軍はマグデブルグに到著せざる內に捕捉せられたであらう。然るに斯くの如き廣地域に亙り行動する各縱隊は、現今の如き通信機關もなく、從つて各縱隊指揮官の獨斷專行の能力に俟たねばならぬ。此の見地から觀察すると、後述の如く十分ならざる點多く、敵の大物を捕捉し得ずして更に追擊續行を要

するに至つたのである。元來奈翁そのものは偉人であるが、其の各級指揮官は戰場の勇士ではあるが、獨立して戰略行動を律し得る能力が甚だ不十分であつた。之は奈翁が萬事親ら直接之を行ひ、部下に斯くの如き才能の士を得る如く養成するの注意を怠つたことが、主なる原因であると思はれる。我が皇軍に於ては各級指揮官をして各〻其の位置に應じ十分に獨斷專行せしめ得る如く其の能力が養成せられてある筈であるが、特に將來戰に於ては大切な事項である。

左追擊縱隊方面の概況　ミユラー騎兵團長は獨斷を以て其の騎兵約五師團を率ゐ、西方エルフルトに向ひ追擊した。此の決心は彼として上出來であつた。斯くて同隊は十月十五日十四時エルフルトの直前に達した。同地の敗殘部隊指揮官メルレンドルフは降服を申出で、約一萬の普軍は十六日朝を以て降服條約の締結を見た。それまではミユラーの爲好結果であつたが、右の談判交渉の爲ミユラーは注意を奪はれた爲、他の敗殘部隊が其の近傍を通過せるを知らず、又捕虜の誤れる言を信じ、普王及ホーヘンローへ司令官が西方ランゲンザルツア方向に在りとなし、主力を率ゐて同方面に向ひ、爲に追擊の機を失した。

又ミユラーが西方に轉進する際、北方に派遣せられたるクライン騎兵師團は、敵本軍の退路上

に向ひ得た譯であるが、恰も十六日ワイセンゼー(エルフルト北方二十五粁)に於て、普の後衞たるカルクロイト師團と偶然遭遇した。然るにカルクロイトは僞つて「普王は目下奈翁と休戰條約締結中なるにより戰鬪を避けたし」と申込みたるに對し、クライン師團長は寧ろ滿足の意を表し直ちに自軍の傍を通過せしめた。奈翁は後に此の事も知るや叱責して「何時から予は敵を介して命令を諸將に傳ふるに至りしや」といつたのは當然である。

佛第四軍團長スールは、十六日猛烈に追擊を行ひグロイセン(ワイセンゼー西北方十粁)に於て前述のカルクロイト師團に追及した。カルクロイトは再び前述の如き休戰僞報を以てし兩軍共戰鬪を交ゆることなく宿營に就かんことを提議した。思慮比較的到れるスールは、當時唯騎兵の一部を率ゐしのみなりしにより、陽はに之に應ずるの狀を示し、午後に入り軍團の主力が到著するに及び、始めて之に明答して曰く「予は休戰に就ては何等知らぬ」と。卽ち攻勢に轉じ損害を與へて擊退した。

斯くの如くミユラーの失策に依り追擊は機を失し、普軍は敗殘部隊を以てマグデブルグに集合するを得たのであつた。

中央追擊縱隊方面の概況　第一軍團長ベルナドットは、豫定の如く追擊に移り、十七日バルレ

（イエナ西北六十粁ザーレ河畔）附近に普軍の一部を撃破しマグデブルグ方向に追撃を續行した。

右追撃縱隊方面の概況　豫定の如く追撃行動に移れるも、其の進路上には殆ど敵なく、依然伯林方向に前進中で、左追撃兵團が十月二十日マグデブルグ前面に到著した頃には、尙エルベ河南方地域を北進中であつた。

マグデブルグより普軍主力降服に至る間（自十月二十一日至十月二十九日）**の概況**　十月二十日マグデブルグ要塞下に集合せる普の敗殘部隊の指揮を委任せられたるホーヘンローへ侯は、續いてステチーン（第八十九圖東北端伯林東北百二十粁）に向ひ、疲れたる足を更に引摺りつつ退却を續行するに決し、其の要塞に殘置する兵力二萬餘の外卽ち約二萬四千の兵力を率ゐ之を次の縱隊に區分した。

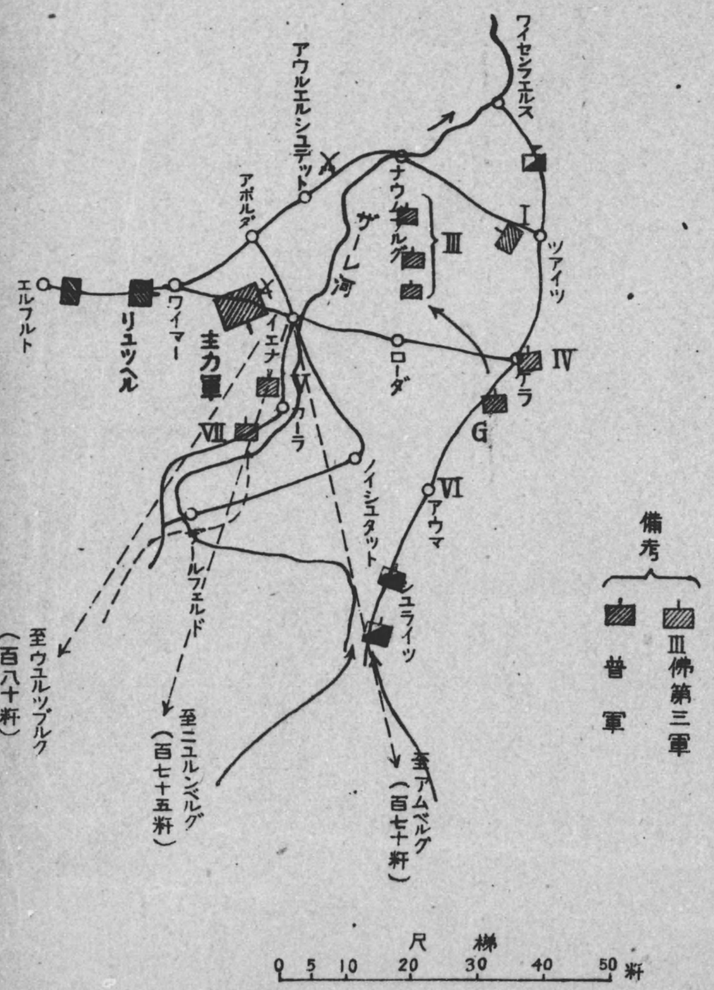
右　縱　隊　騎兵二十六中隊、歩兵三大隊半附屬
中央縱隊（主力）　歩兵二十二大隊、騎兵十中隊（三師團に分つ）
左　縱　隊　騎兵五十中隊、歩兵五大隊附屬
最　左　縱　隊　歩兵二大隊半、騎兵十五中隊

右の各縱隊の通路は、煩雜を避けて省略するが、大體要圖に示す如く、中央縱隊はホーヘンロ

第八十七図

普佛兩軍ノ位置

於十月十二日



（イエナ西北六十粁ザーレ河畔）附近に普軍の一部を撃破しマグデブルグ方向に追撃を續行した。

右追撃縱隊方面の概況　豫定の如く追撃行動に移れるも、其の進路上には殆ど敵なく、依然伯林方向に前進中で、左追撃兵團が十月二十日マグデブルグ前面に到著した頃には、尙エルベ河南方地域を北進中であつた。

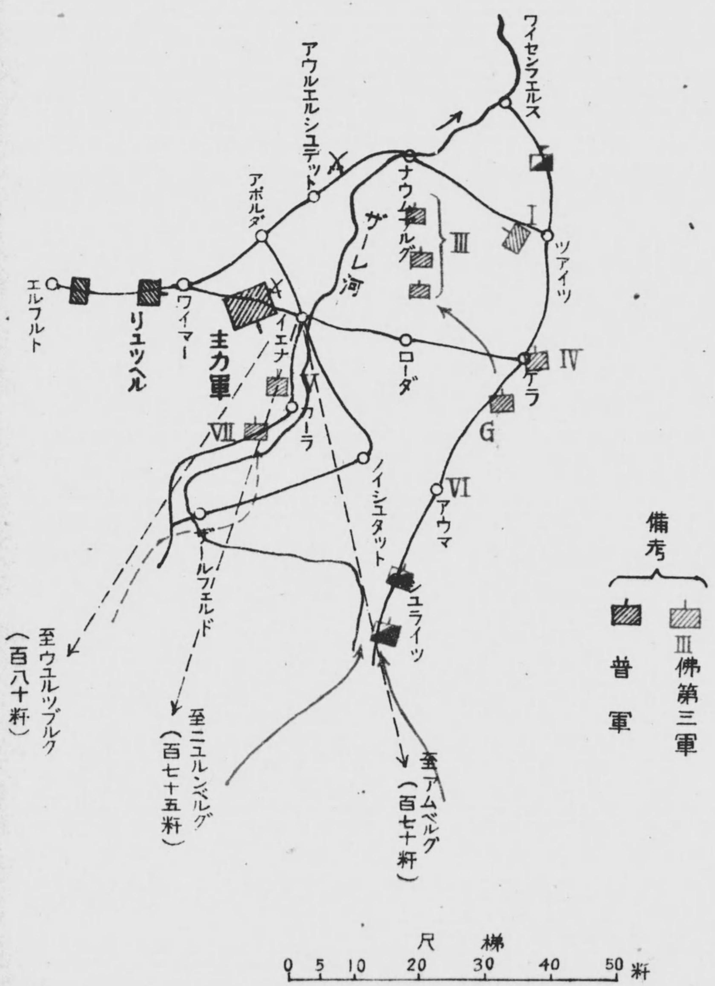
マグデブルグより普軍主力降服に至る間（自十月二十一日至十月二十九日）**の概況**　十月二十日マグデブルグ要塞下に集合せる普の敗殘部隊の指揮を委任せられたるホーヘンローヘ侯は、續いてステチーン（第八十九圖東北端伯林東北百二十粁）に向ひ、疲れたる足を更に引摺りつつ退却を續行するに決し、其の要塞に殘置する兵力二萬餘の外卽ち約二萬四千の兵力を率ゐ之を次の縱隊に區分した。

右　縱　隊　騎兵二十六中隊、歩兵三大隊半附屬
中央縱隊（主力）　歩兵二十二大隊、騎兵十中隊（三師團に分つ）
左　縱　隊　騎兵五十中隊、歩兵五大隊附屬
最　左　縱　隊　歩兵二大隊半、騎兵十五中隊

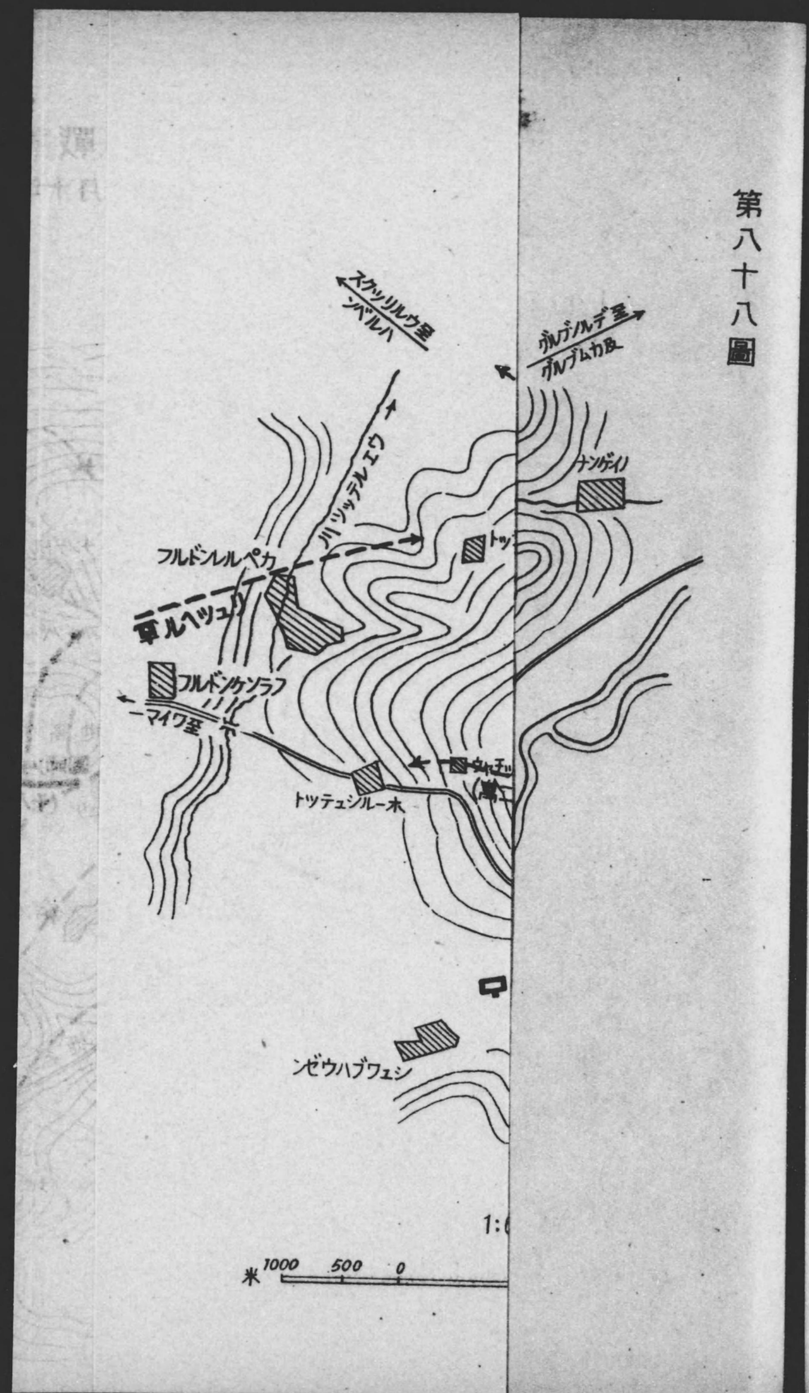
右の各縱隊の通路は、煩雜を避けて省略するが、大體要圖に示す如く、中央縱隊はホーヘンロ

第八十七図

於十月十二日　普佛兩軍ノ位置



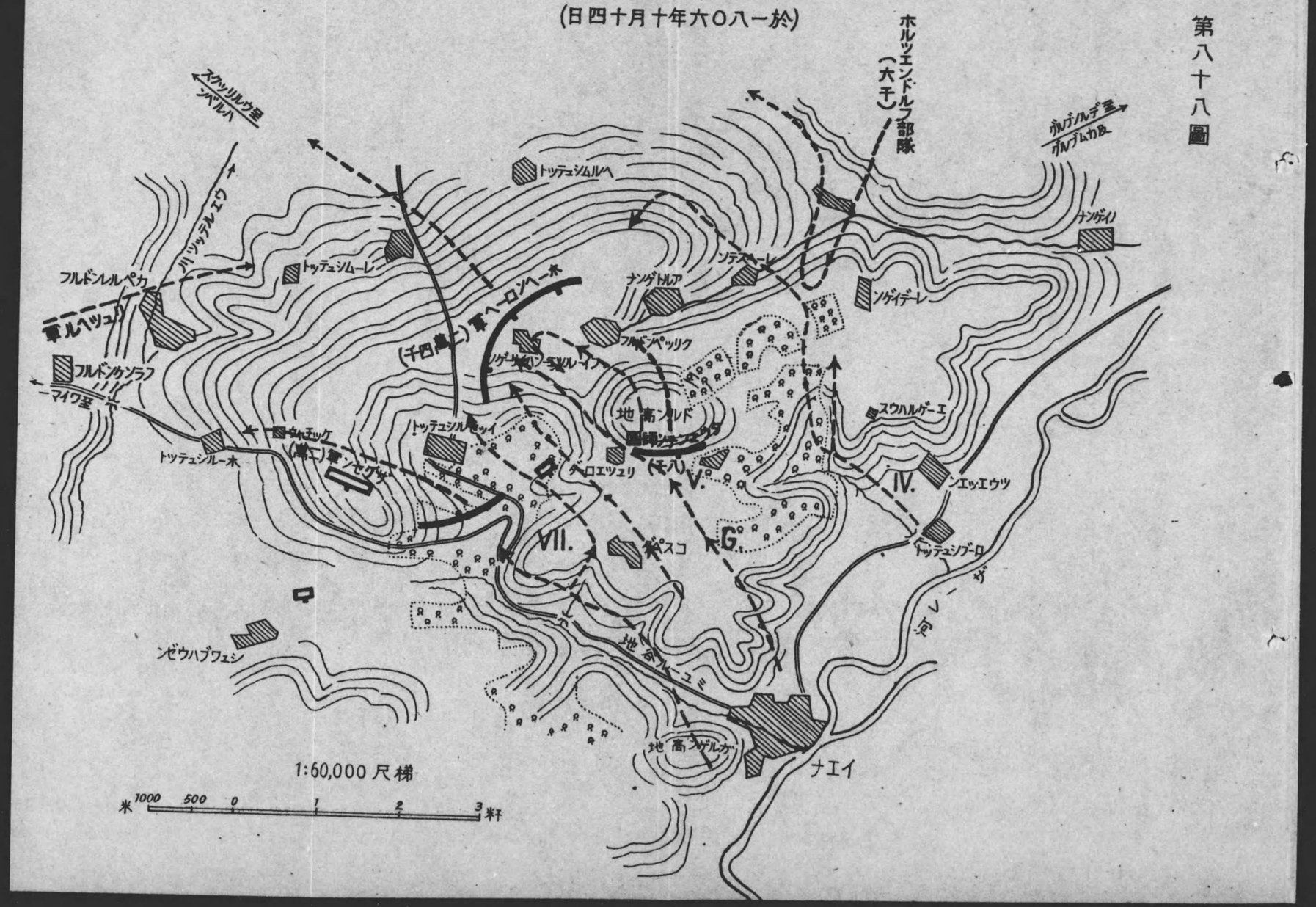
第八十八圖


スクッリルウ至
ンベルハ
ルブナルデ至
ルブムカ及
ナンバイ
ッテルエウ
フルドンルルペカ
草ルベッュ
フルドンケンラフ
マイウ至
トッテュシルー木
ンゼウハブワェシ
1:
米 1000 500 0

第八十八圖

イエナ會戰要圖

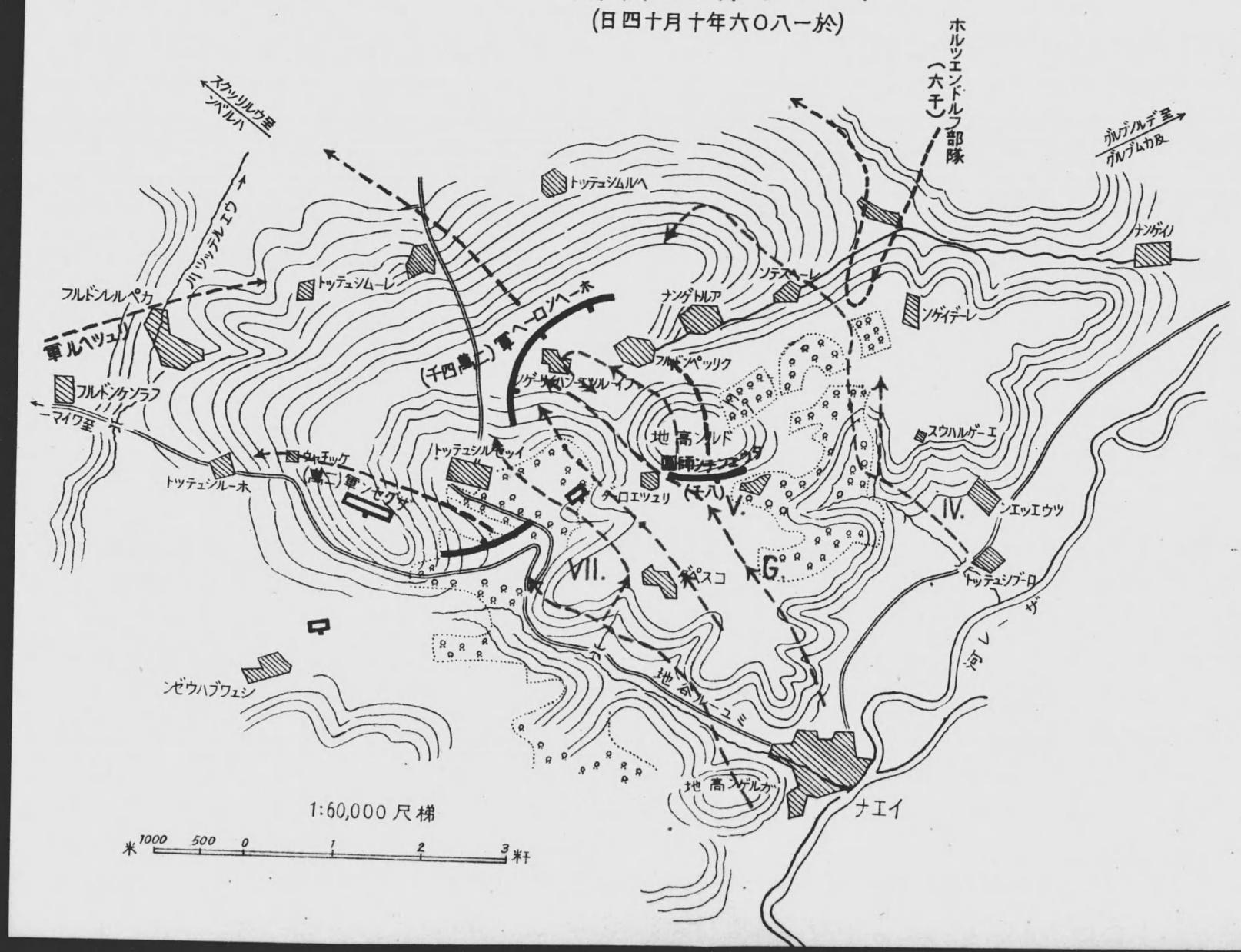
(於一八〇六年十月十四日)



第八十八圖

イエナ會戰要圖

(於一八〇六年十月十四日)

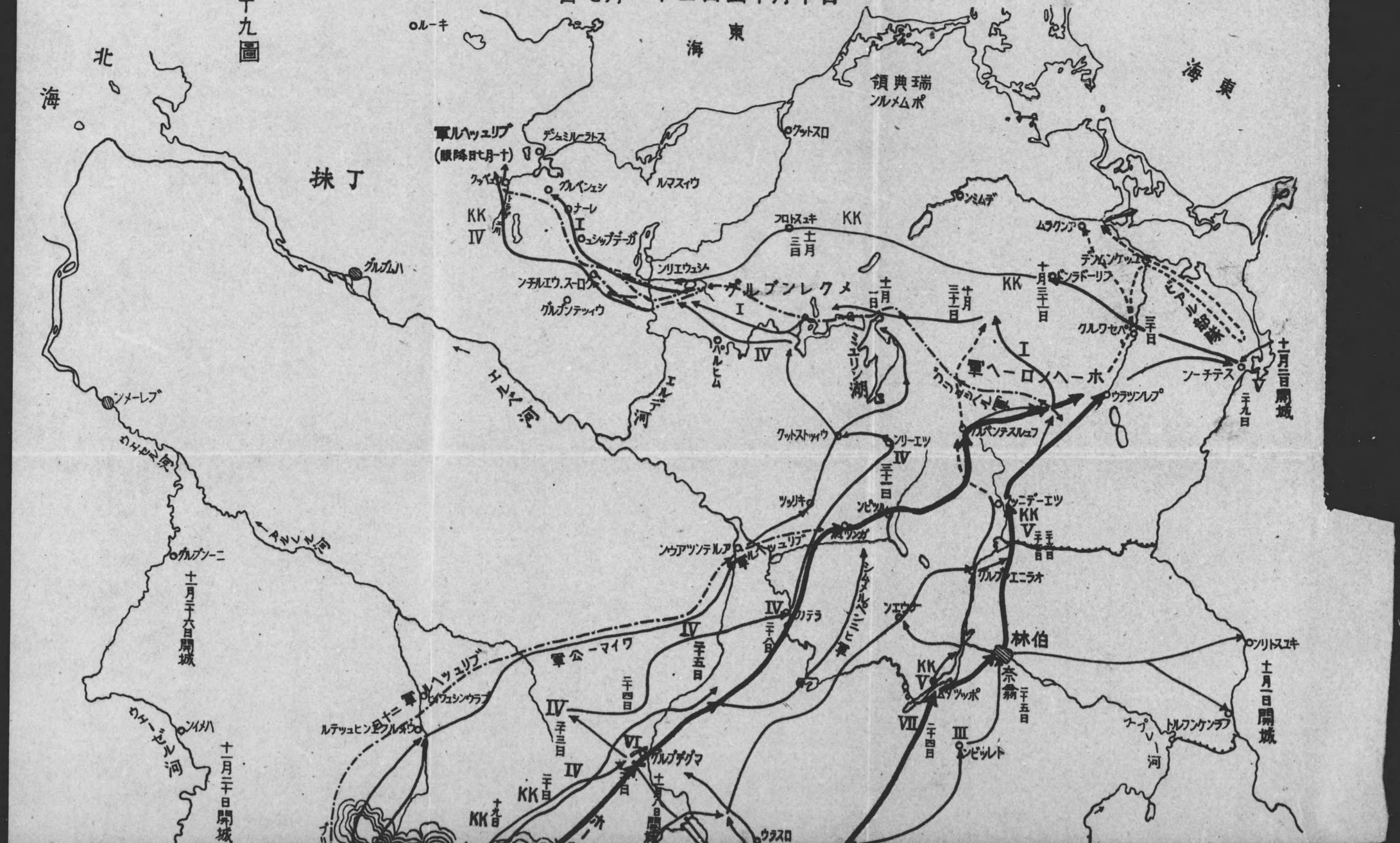


1:1400,000
10 5 0 20 40 60

第八十九圖

イエナ會戰後ニ於ケル大追擊要圖

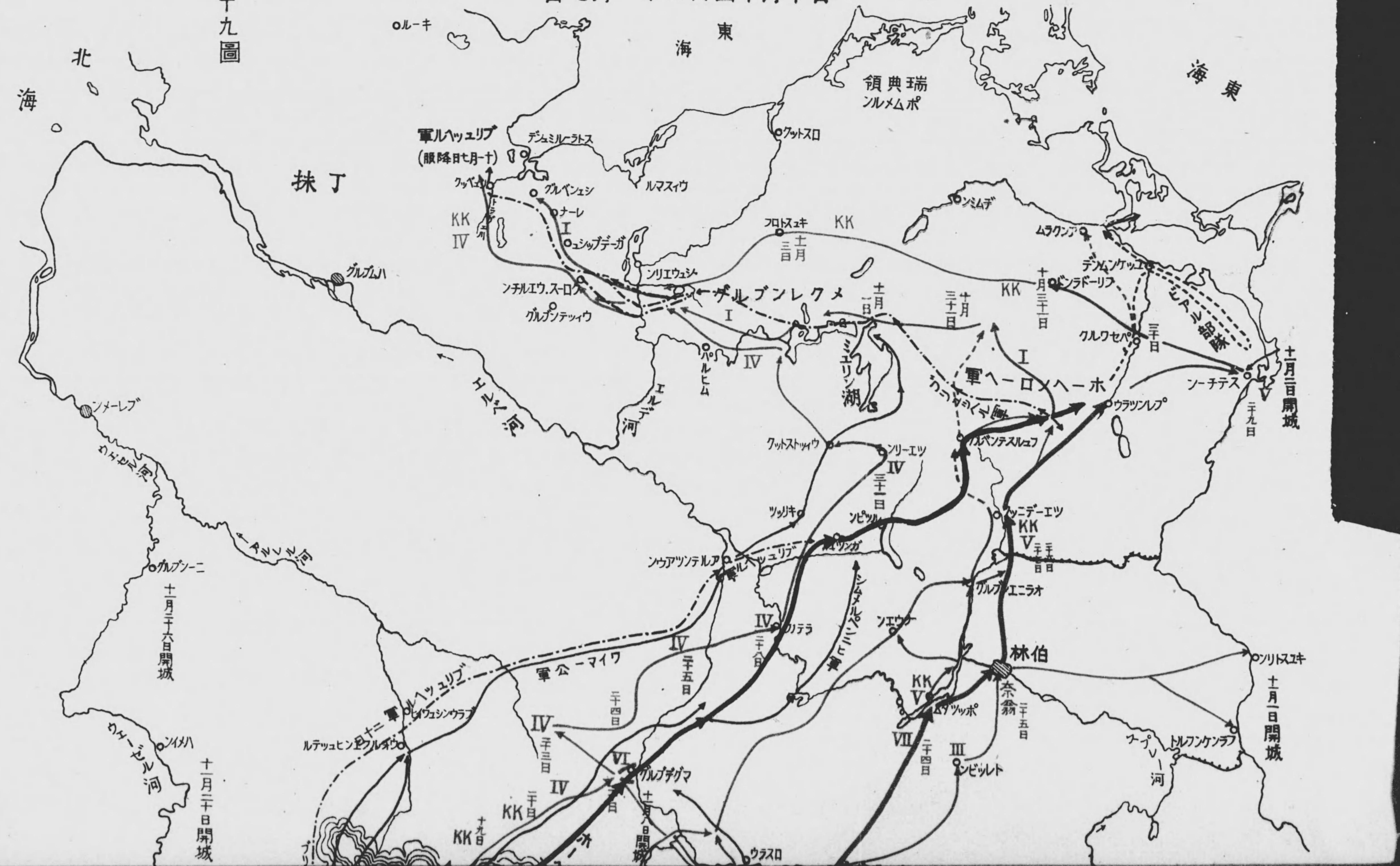
自十月十四日至十一月十日

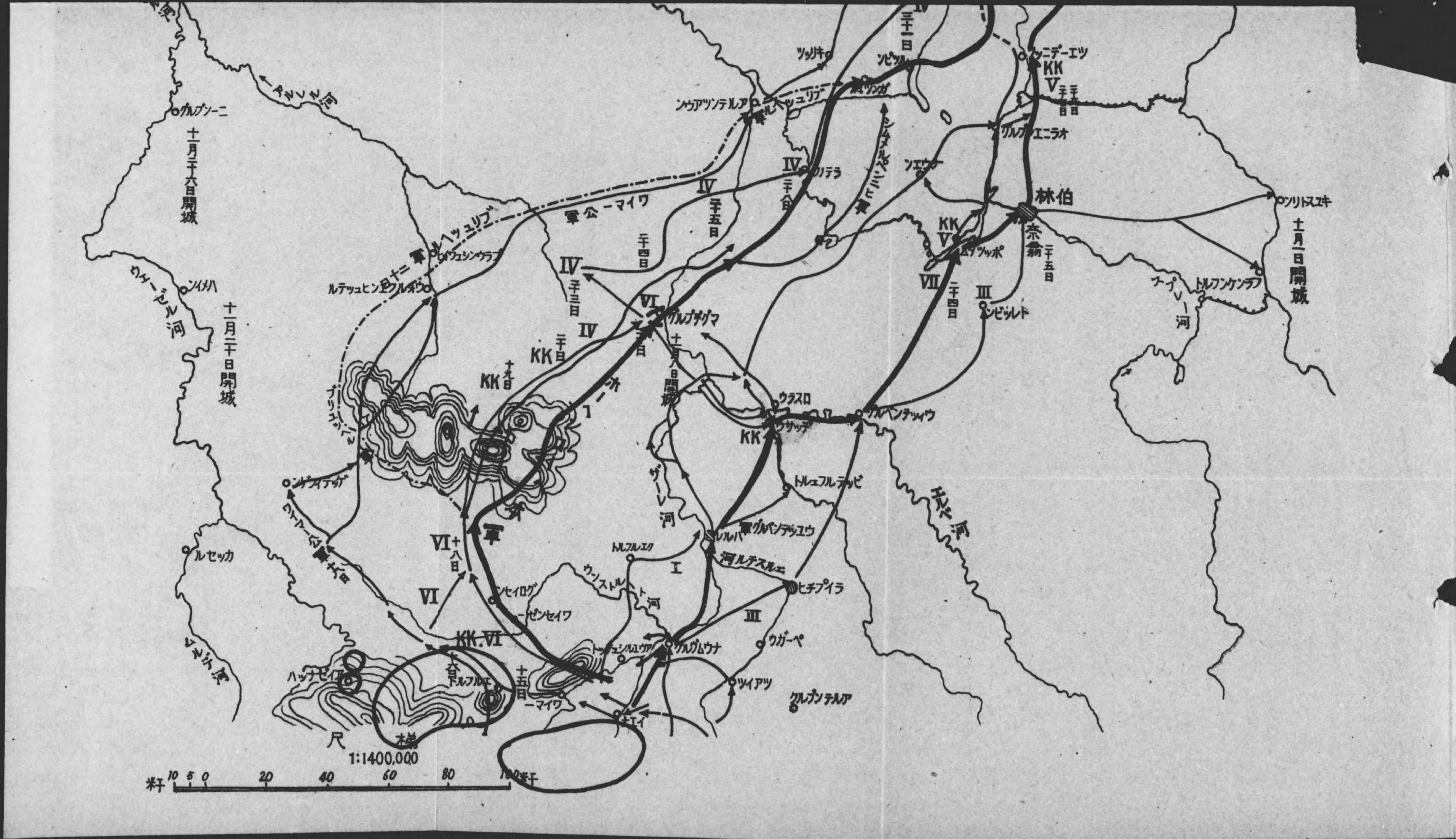


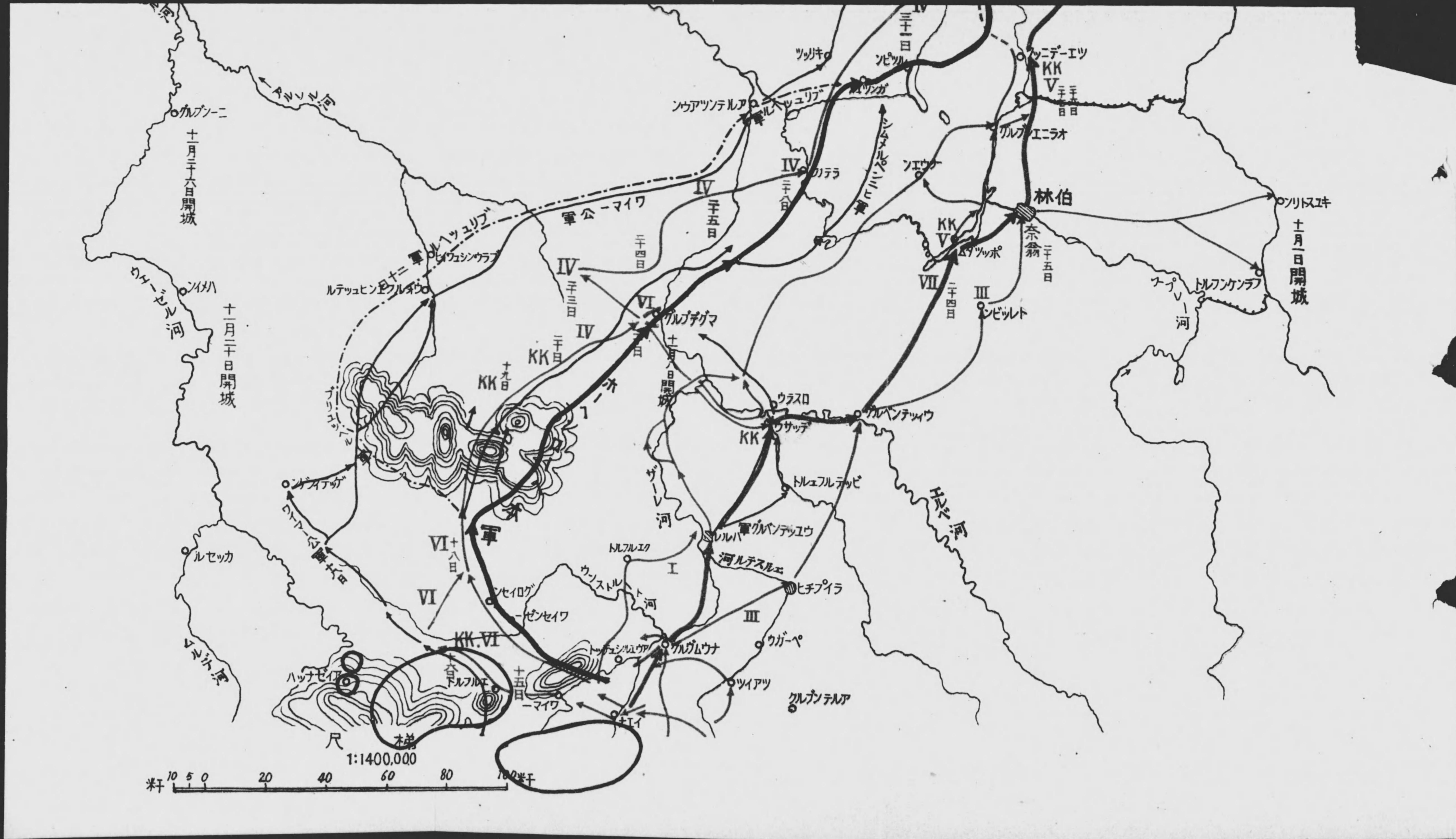
イエナ會戰後ニ於ケル大追撃要圖

自十月十四日至十一月七日

第八十九圖




1:1400,000
10 5 0 20 40 60 80 100

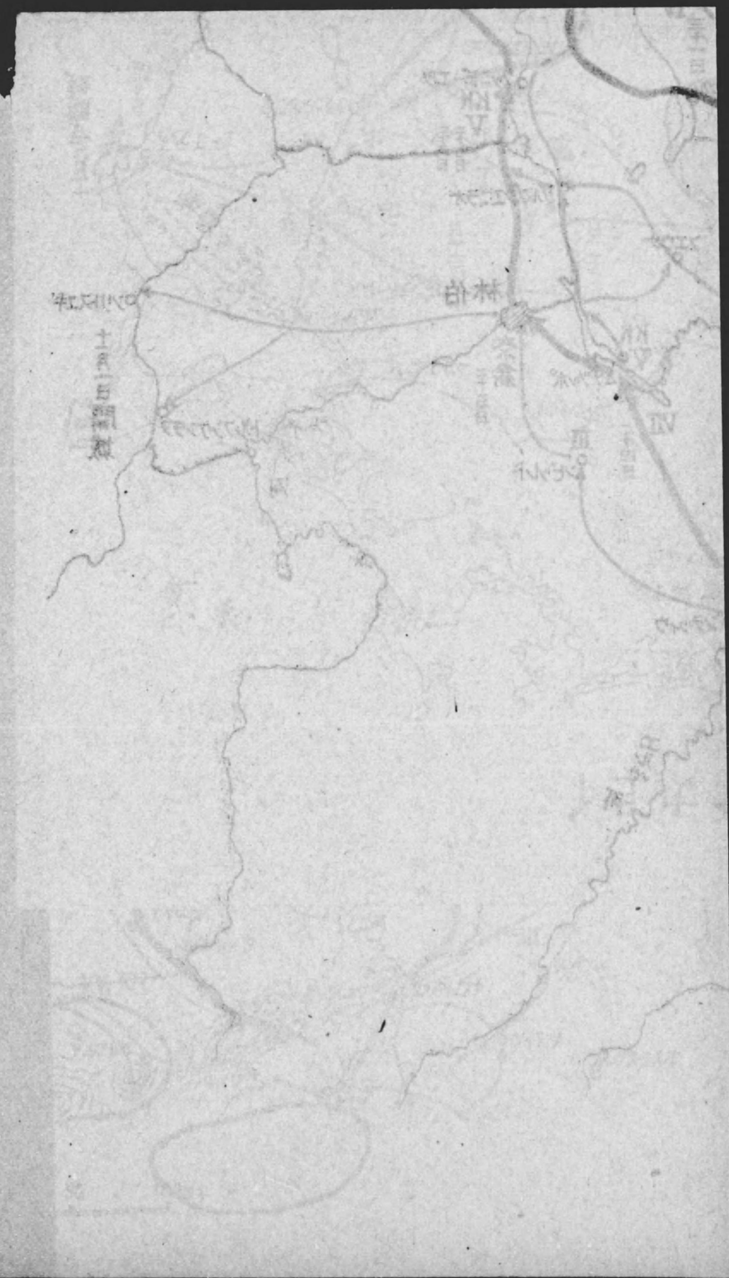


林伯
奈翁
二十五日
十一月一日開城
ソリトスユキ
トルフンケンラブ
ーブプレ河
ンビッレト
グルブンエニラオ
ンビッル
ツリキ
ンウアツンテルア
ツニデーエツ
IV ノテラ
二十四日
二十三日
二十五日
ンエウグ
グルブデグマ
十月八日開城
ウラスロ
サッデ
ルベンテッィウ
エルベ河
トルュフルテッビ
ザーレ河
軍グルベンデッスユウ
レルバ
トルフルエク
河ルテスルエ
ヒチプイラ
ウガーペ
ツイアツ
クルプンテルア
グルグムウナ
ウンストルート河
ンセイログ
ーゼンセイワ
ハッナセイア
トルフルエ
ーマイワ
ナエイ
ルセッカ
ンゲノイテッグ
ウェーゼル河
十一月二十日開城
十一月二十六日開城
グルブンーニ
ルテッュヒンエウクルイク
ヒイフェシンウラブ
軍公ーマイワ
ワイマール公軍
レルライ河
尺　梯
1:1400,000
粁 10 5 0 20 40 60 80 100粁

ーへ直接の指揮を以てマグデブルグから東北方にラテノフ、ルッピンを經、プレンツラウに通ずる道を辿り、首都伯林を遠く右方に見つつ之を捨てねばならぬ狀態に在つた。其の他の縱隊は結局主力縱隊の兩側近距離に在る道路を選び、何れも殲滅せらるるの旅路に就いたのである。

右追擊縱隊は、敵の抵抗を受くることなく開放せられたる大道を濶步しつつ十月二十四日其の先頭を以て伯林に進入し、奈翁も二十七日入城し暫く同地に位置して各方面の情勢を接受しつつ夫れ夫れ必要の指令を發した。

飜つて普軍は、絕えず佛軍騎兵より脅威され、攻擊を受け、連日損害を累加し、志氣の阻喪、疲勞困憊の結果捕虜も日毎に增加した。此の悲むべき普軍の退却は前途の光明を失はしめ、斯くて主力縱隊はホーヘンローへ指揮官と共に十月二十八日を以て目的地ステチーンを西南方に距る五十粁のプレンツラウ要塞に佛騎兵部隊とマラソン競走宜しく、殆ど同時に到著した。此の苦難を嘗めたる退却行にホーヘンローへ司令官は心身共に精根も盡き、最早抵抗の意義なきものと歐洲式の判決を心の中で決し、直接手許にある約一萬の敗兵と馬一千八百、砲六十門を擧げてミュラー騎兵團長に降服した。退却行約二週日普軍主力の運命は之で終りを告げた。主力の降服を傳へ聞いた他の普軍や要塞は相次で佛軍の前に兜を脫ぎ抵抗を中止した。



ブリユツヘル軍の降服（至十一月七日）　普軍の腑甲斐なき末路の中に在つて、多少の異彩を放ち普軍中に其の人ありと首肯せらるるものをブリユツヘル將軍となす。彼は十月二十九日朝、主力軍に續いてブレンツラウに向ふ途中、ホーヘンローヘが降服したことを知つた。此の突然の凶報に接したるブリユツヘルの心境や如何、他の諸普軍は此の報を聞くや相次いで主力に倣つたのである、獨りブリユツヘルは最早目的地ステチーンに向ふの不可能なるを思ひ、方向を轉じて敵を西方に誘致し、エルベ下流を渡り以て後圖を策するに決したのは、痛快なる覺悟である。斯くて往く往く殘兵を合し兵約二萬、砲百門を指揮し十一月三日困難ながらもシユウエリン（ブレンツラウ西方百六十粁）に到著した。然るに佛ミユラー騎兵團、第一軍團、第四軍團等の追擊も亦甚だ急であり、何れも近く一日行程以内の距離に在りて右側背、左側背から押し寄せつつあつた。是に於てブリユツヘルも最初の決心を實行するの不可能なるを察し、十一月五日西北方海岸に近きリユベックに辿り著いた。然るに翌六日には佛第一軍團の攻擊を受け、リユベックの城門は奪取せられ慘烈なる市街戰となり、城内の軍隊は力盡きて其の大部は降服するに至つた。ブリユツヘルは後方の陣地に於て潔よく最後の一戰を交へんとしたが、諸將の反對により實行するに至らず、怨を呑んで翌七日七千の兵を擧げて降服を申出でた。斯くて此の大追擊の幕は閉ぢ、十數萬

の普軍は事實上全滅するに至つたのである。

小評論　此の追擊戰に就ては、追擊者卽ち佛軍を主とせずして普軍の退却を叙して佛軍の追擊が猛烈徹底的なるを了解する如く記述したのであるが、顧みて佛軍の追擊に就て觀るに、イエナ會戰迄に數百粁の强行軍をなし、激戰を交へたる後、更に約二週乃至三週間追擊を續行し、若干軍團は一日の休憩もなく繼續し、ミユラー騎兵團の如きは此の間に行程一千粁以上を突破せるものと想察せられる。其の困難なる行動なりしことは判斷に難くない（此の件に就ては後述する）。

又ブリユツヘル將軍は、後日奈翁を滅ぼしたる主なる人物である、此の退却行動も消極ながら他の將軍に比し異彩を放つて居る。歐洲式に判決すれば、彼の降服は他の諸將の降服せるものとは日を同うして語るべからざるものであり普國軍の名譽を完うせるものとして賞讃せらるるのも宜なりと謂ふべきである。併し之は飽くまで歐洲式であり、斷じて日本式ではないことをはつきりと心得て居らねばならぬ。

其の二　フランダース會戰後に於ける大追擊戰

巴里陷落迄の概況

五月十七日セダン、モーブージュ間約百粁のマヂノ線の所謂難攻不落の堅壘が苦もなく突破されたとき、佛の首腦者連は愕然として自失した。佛軍總司令官ガムラン將軍の悲痛なる布告が其の危機を裏書して居る、其の要旨に依れば、

祖國フランスと我が聯合國及世界の運命は現に進行中なる我々の戰鬪に總てがかかつて居る、フランス史上、重大危機に方つて、我々は勝たねばならぬ、然らずんば死あるのみ。云々

彼は「陣地を捨てねばならぬ場合には其の場に戰死せよ」と叫んだ。併し彼自らも亦其の軍隊も戰死よりは退却を選び、陣地も捨て大砲も敵に贈つて遂に兜を脱いだ。

重大危機に迫つた佛國は、内閣を改造しペタン元帥を副總理に迎へガムラン將軍を罷免してウエイガン將軍を以て總司令官に任じた。新總司令官は獨軍がフランダース地方で英、佛軍を猛攻しつつある最中に、佛軍の殘餘を擧げて之が救援を企圖したが、獨軍の睨みが能くきいて居り、前大戰に於けるマルヌ會戰の失敗を繰返さない樣に十分なる備へがあつた。是に於てウエイガン司令官も一先づ攻勢を斷念し敵を迎擊すべく、オワーズ河を中心とし左はソンム河、右はエーヌ河を障碍に利用する所謂ウエイガン陣地に據つて敵の猛進を支へ、機を見てマルヌ戰の好果を夢みんとした。併し其の陣地は之を構築するの餘日なく、單なる野戰急造陣地に過ぎなかつた。

獨軍の進擊　六月五日を以て開始せられ大擧堂々南方に向つてする追擊的前進は極めて猛烈であつた。斯くてウエイガン陣地の左翼方面は獨のボック集團軍から攻擊を受け、ソンムの障碍も容易に獨軍の突破する所となつた。七日の早朝から獨のボック軍を以て佛ウエイガン陣地の左翼に、又ルンドステット軍を以て同陣地の右翼に對し空軍との協力を以て猛攻を開始し、三日間の激戰の後、佛軍は完全に擊破されて仕舞つた。

ホート大將の指揮する機械化兵團は、敵陣地を突破するや、直ちに挺進してセーヌ河下流ルアン(巴里西北方)に突入した。佛の敗退部隊は此の突進兵團の爲其の退路を遮斷せられ、更に海岸方面に逃走したる佛の部隊はルアブールの三角地帶で殲滅せられた。斯くして獨の各軍團は先づ巴里を目標として追擊を强行した。

此の間左翼軍たるルンデステット集團軍は、エーヌ河を突破したる後、シャンパーニュ地方に進出し、其の機械化兵團は佛軍の後衞部隊を乘り越して之を遮りて降服せしめ、更に其の主力に追及して之を强襲し、散々に之を蹴散らしつつ數日の後、瑞西の國境にまで進出した。

六月十一日は全佛軍と獨逸軍との間に大會戰が交へられた日であり、セーヌ河口附近から東部のマヂノ要塞線に亙る廣大なる戰線で死鬪が行はれたが、最早獨軍の敵ではなく、左翼方面で相

當頑強なる抵抗が試みられたのみで結局總崩れとなり、十三日には獨の全軍は概ねマルヌ河畔に達し、巴里を指呼の間に望むを得るに至つた。

佛國政府は此の日(十三日)悲痛なる發表を行つて曰く、

ウエイガン陣地は脆く突破せられ獨軍は首都を目指して進みつつある、其の兵力は百乃至百五十師團を算し三方より半圓形に迫り危機は愈〻眼前に逼迫した。

依つて文化の精粹たる巴里を戰禍により破壞せらるるを救はんが爲巴里放棄に決し無防備都市たらしむることとした。

と。斯くて十四日獨軍は無血の入城をなし、ハーケンクロイツ國旗は巴里城頭に翻つた。

巴里占領後に於ける獨軍の追擊戰

六月十五日ヴエルダン要塞は陷落した。第一次大戰の際は獨軍半歲に亙る攻擊も終に之を拔く能はざりし要塞であつた。爾後更に新式に改修せられ堅固なる不落的築城を以て稱せられたる要塞が、難なく落城せしめられた。結局人である、守るに其の人なければ如何なる堅塞も駄目である。

ルンデステット集團軍は、追擊戰鬪に移るや擊破されたる志氣阻喪の佛軍を到る處に捕捉し、降

服か殲滅かの二つの內を選ばしめた。併し斯く四分五裂せられたる佛諸軍團の內、尙整然と抵抗を敢てせる後衞部隊又は收容部隊もあつた。彼等は大損害を受けつつも頑强に死守し接戰搭鬪勇敢に死鬪し、多くは戰死の道を選んだのは、全般の醜態中に於ける一の閃光とも謂ふべきであらう

ルンデステット軍の活躍により六月十七日にはアルサス、ローレイヌ兩州の佛軍は殆ど全部包圍せられ、隨所に降服か又は殲滅せられ、メツツ要塞も此の日陷落した。

海岸方面ではボツク集團軍が其の機械化兵團とライヘル軍とを以て西部佛蘭西を南下追擊し、炎暑を冒しロアール河の線に猛進した。尙直接海岸に沿うて南下せる支隊は無抵抗の儘ナントを占領し更に敗敵を追うて南進を續けた。斯くて六月二十三日右翼方面追擊兵團はブレストに達し中央追擊兵團も潰走する敵を追うて其の退路を遮斷し之を捕捉するに成功した。

以上の狀勢に對し佛國政府は匙を投げ六月十八日休戰を申出でた。

六月二十一日ヒツトラー總統は怨みは深きコムピエーニュの森を休戰條件通告の爲の地に選びつけられたる同一の列車內で極めて寬大なる休戰條件を提示し、其の後の戰局發展に資する爲佛國を刺激せざることに勉めた。

戰鬪の結果　此の大追撃戰の成績乃至損害等は次の通りであつた。

獨軍の損害　　シユペック軍團長の戰死の外

戰　死	將校以下二萬七千七十四人
行方不明（戰死と認めらる）	一萬八千三百八十四人
小　計	四萬五千四百五十八人
負　傷	十一萬一千三十四人
合　計	十五萬六千四百九十二人

佛軍の損害

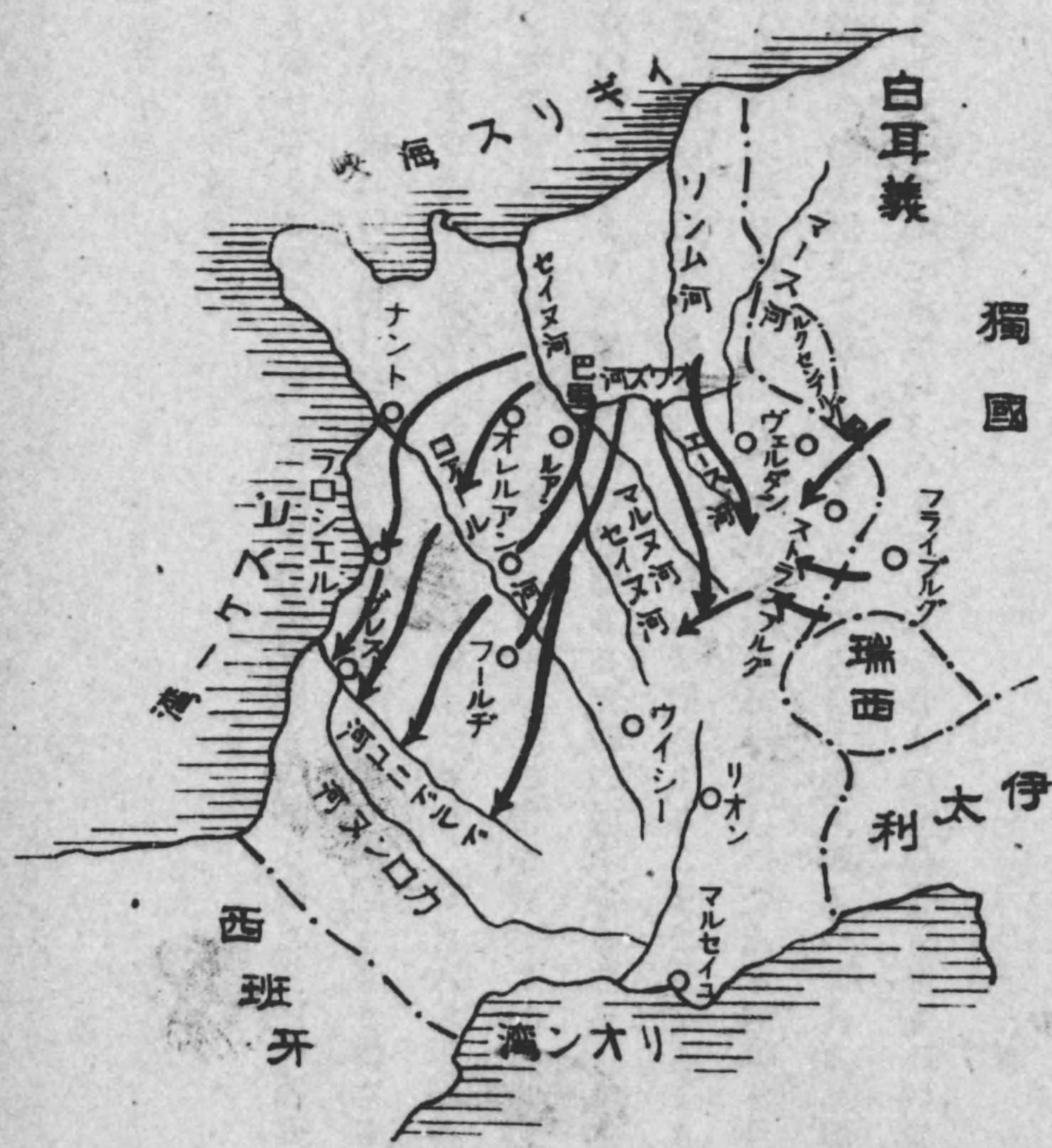
捕　虜	百九十萬人
死　傷	捕虜の數より遙かに少數
鹵獲せられたる兵器	五十五師團分及マヂノ要塞の裝備全部其の他多數

小評論　此の追撃退却戰は極めて簡略に紹介した爲、具體的の事實に就ては明確ではないが、要するに獨軍は其の機械化兵團の優勢を利用して之を思ひ切り挺進せしめて敵の背後に進出して之を遮斷し、優勢なる空軍は其の進撃の掩護と戰鬪に協力とに活躍し、以て所謂電撃戰

第九十図

獨軍追撃要圖

於一九四一年六月



第六十圖

を遂行したのであり、佛軍は其の戰法的奇襲により、手も足も出でざる如く機先を制せられ殆ど角力にならぬ醜態振りを暴露したことは恰も一八〇六年戰役に於ける普軍に近似して居る。

又巴里を無防備都市として之を戰禍から免れしめたことは、吾人の立場よりせば不同意であり、須らく其の首都の防衛の爲殊死して戰を繼續すべきことを主張するものである。現にレニングラードが孤立能く獨の大軍に對し久きに亙りて尙頑强に抵抗しつつある精神を見上げたものとするに躊躇せぬ。而して百歩を讓り此の文化都市を保全することを許すとするも、爾後更に健鬪以て死を求むべきことガムラン將軍の悲壯なる告辭の如くならざるべからずと斷ずる。然るに間もなく双手を擧げ、極めて脆く膝を屈したる其の腑甲斐なさは眞に遺憾の極である。併し之は佛國の事であり、彼等は之を以て其の國土を救ひ、尊き人命の犧牲を少なからしめたと信ずるのかも知れぬ。併し之が我が皇國に關する限り問題となり得ざるものであることは今更言ふを要せざるもので、若し所謂文化が佛國人の見る如きものであるならば、毫も保全に値しないものである。

評　論

一、追擊の困難　古來追擊に依りて敵を殲滅したる戰例は極めて稀であり、本會戰の如き兩者共其の適例と申すべきであらう。就中奈翁の敢行せる大追擊は、當時としては實に破天荒に屬し、其の困難なりしことも看逃がしてはならない重要事項である。

例へば佛のスール(第四)軍團、ネー(第六)軍團の如きも、既にエルベ河に達する前に、嚴重なる制裁を以て軍紀の弛緩、軍隊の離散を取締らねばならなくなり、落伍、掠奪等日を經るに從つて多きを加へたと云ふことである。又ベルナドット(第一)軍團の如きは開戰の際には二萬五千の兵員を有したが、戰鬪による損害は殆ど算ふるに足らず(イエナの會戰に參加せず)單に追擊行動の爲、十月末には約半數の損害を受けたとのことだ。更にミュラー騎兵團の如きも十一月五日の報告に依れば軍隊は非常に疲勞しあり、今後の行動を繼續する場合には、某胸甲騎兵師團及某龍騎兵師團を殘留せねばならぬと訴へた。而して斯くも大追擊に堪へたのは、追擊途中普軍より鹵獲せる良馬と多數交換したる結果であり、然らざれば其の大部は殆ど騎兵の用をなさざるに至つたであらう。

以上の如き困難は現今に於ても亦免るべからざる所であり、我が軍が支那各地に於て勇戰奮鬪追擊を强行せる戰例は乏しくないが、其の行動には涙ぐましき將兵の苦難があつたのである。

數日に亙り携帶、追送の食糧なく、饑を忍びて活動を續けたことは既に周知の事である。併し統帥部としては輜重、兵站の施設乃至運用に就て更に大いに工夫を凝らし以て將兵をして其の苦難缺乏を極減せしむる樣努力せねばならぬ。空輸施設の擴充整備は特に焦眉の急を要することと信ずる。

二、戰場殲滅と追擊殲滅　古今の殲滅戰例は其の殆ど全部が、戰場に於てなされて居り、追擊に依りて完遂された例は極めて稀れであることを示してゐる。是卽ち後者が言ふべくして其の實行の容易ならざるを證して餘りありと謂ふべきである。故に吾人は勉めて戰場擊滅の目的を以て計畫するを本則とし、而かも戰場に於て之を逸したる場合には飽くまで追擊を强行し得る如く、軍隊を訓練するのみならず、後方の整備、活動に對して注意を倍加するの要ありと主張するものである。

三、本戰鬪勝敗の原因に就ては詳述を省くが、要するに、前者に於ては普軍にフリードリヒ大王の養成したる精神が沒却せられ唯形式のみが傳統的に殘され、內部は腐敗して居り、諸將互に軋轢して和せず、其の戰法も唯舊套を脫せず、爲に奈翁の一蹴に脆くも潰え去つたのであり、後者に就ては、既に周知の如く、佛國が勝つて兜の緒を締めず前者に於ける普國と同樣に唯舊

套に墮して、物質に重く精神に輕く、所謂浮華是事とせしに對し、獨の臥薪嘗膽、國を擧げて雪辱の意氣に炎え、電擊的作戰を案出して佛軍を一蹴した結果であると謂ふことが出來やう。他山の石以て吾人の戒とすべきであり、其の詳細具體的なる教訓は、歐洲大戰教訓斷片を參照せられんことを望んで止まない。

第八例　ドレスデン附近の會戰

本會戰は一八一三年秋季に於て奈翁軍と反佛同盟軍(墺、普、露、瑞典)の內墺、普、露の三國軍との對戰である。而して奈翁は一八一二年露國遠征に殲滅的慘敗を喫したる後、急遽新軍を編成して一八一三年春季に普、露連合軍とグロース、ゲルシユン及バウツエン等に戰ひ繞かに之を破り、勝利を獲得したる後、連合側の提議を容れて休戰を諾し、更に秋季に於て再び作戰行動に移り、ドレスデンに戰つて勝利を得たのであるが、之を殲滅戰的見地から觀察するとき、奈翁の卓拔なる構想にも拘らず、其の實施の不徹底なること等に就て教訓を求め得る。

休戰締結時に於ける兩軍の配置(第九十一圖參照)

奈翁がバウツエンの戰鬪に辛うじて戰勝したる後、敵側の休戰提議を容れたのは、自軍の整頓

增强を圖らんとする意思であつたが、事實は敵側により大なる利益を與へ、普、露、瑞典の外墺國をも反佛同盟に加はらしめ、全般の形勢は前途に一層の困難を豫想せしむるに至つた。

その休戰時期の終了は八月上旬であつたが、其の終了時に於ける兩軍の配置は第九十一圖に示す如く、反佛連合軍は北方卽ち伯林附近に瑞典國王ベルナドットの指揮する一軍が、佛のウージノー兵團と相對し、南方では墺軍を主力とする墺、普、露の連合軍がエルツ山脈の南方から東方に亙つて配備せられ、普のブリユツヘル指揮下のシユレヂエン軍が更に其の東方に配せられ、之に對し奈翁軍は其の最右翼ドンスデン附近から東方に亙つて廣地域に第一乃至第十四軍團及ミユラー騎兵團が敵と相對して居る。其の外エルベ河口卽ちハムブルグ附近にダブーの指揮する一兵團がベルナドット軍に對し北方地域に侵入せらるるに備へてあつた。其の兵力關係を比較するに野戰軍として同盟軍四十八萬九千に對し佛軍三十八萬三千を算するの狀態であつた。

奈翁は其の作戰方針として北方ウージノー兵團及ダブー兵團等を以て伯林方面に對し攻勢を取らしめ、主力は一時待機の姿勢にあらしめ、敵の行動に應じて迎擊するの策を定めた。之に對し、サンシール軍團長及マルモン軍團長は各其の反對意見を述べたことは從來に例を見ざる所であつた。其の反對意見の內容に就ては茲に省略するが、マルモンの意見中に「小官は皇帝が、一勝を得

て決戰を交へたりと信ぜらるるの日は卽ち他の二正面の作戰に敗れたることを知らるるの日であらうことを慮る」と具申したことは、一の卓見と謂ふべく、連合軍の作戰方針も奈翁の主力軍に對しては退避作戰を以て鋭鋒を避け其の間他正面の軍は猛烈に攻勢に出で、斯くして佛軍を疲勞困憊に至らしむるに在つた。但し其の實行に就ては必ずしも圓滑には實行し得なかつた實情はあつたが、結局奈翁は最後にライプチヒに包圍攻擊を受けて慘敗するに至つたのである。

レーウエンベルヒ附近の戰鬪　同盟軍中傑出したる將帥を普のブリュッヘルとなす。彼は西方に在りてシュレジエン軍を率ゐ、他の正面に在る同盟軍に比し積極的意思を懷き、他軍の爲に率先犧牲を忍んで活躍したのであり、奈翁をして結局ライプチヒに再び慘敗を喫せしめられたのも、此のブリュッヘルに負ふ所が多い。

奈翁は全般の狀況に鑑み、先づ此のシュレジエン軍を打つべく、主力を擧げて東方ボーベル河畔に進み、ブリュッヘルに決戰を挑んだ。ブリュッヘルは全般の作戰方針に則り決戰を避けて東方に退避した。奈翁は直ちに之を急追せんとするや、八月二十二日夜ドレスデンに在る第十四軍團長サンシールからの急報に接した。曰く「敵主力軍はエルツ山脈を越えて北進を開始し、爲にドレスデンは危機に瀕した。」と。是に於て奈翁はドレスデンの戰略要點を確保する爲、之に向ひ

て主力を轉用するの必要を認め、東方に向ふ追擊を中止した。

ドレスデン附近の戰鬪

反佛同盟軍の行動　同盟軍側では、奈翁が、北方軍に向ひ攻勢に轉じたとの誤報に接した。是に於て之を牽制する目的を以て西北方ライプチヒ方向に前進するに決した。是は、奈翁が同盟軍の前進を知つたならば、エルベ河右岸地區を捨てて主力をライプチヒ方面に移すならんと判斷したからであり、敢て決戰を求めんが爲ではなかつたのである。右の決心に基き第九十二圖に示す如く概ね四縱隊を以て北進を開始し、八月十九日には其の先頭を以てエルツ山脈の南麓に達した。而して八月二十二日に至り其の右縱隊はベルヒギースヒューベル(ドレスデン東南二十粁)附近で佛の一部隊と衝突したるも、他の縱隊は僅かに佛の前哨に遭遇したのみであつた。此の頃迄の情報によると、ドレスデン附近には佛の第十四軍團が存在するのみで、他の主力は豫想に反し全部エルベ河の右岸地區に位置しあるを知つた。

是に於て同盟本軍司令官たる墺將シュワルツエンベルグは、目標を變更して近くドレスデンに採り、圖示の如く右方旋回をなさしめ、八月二十六日を以てドレスデンの總攻擊をなすべく決した。此の時まで同盟軍側では奈翁がシュレジエン方面に在りとの情報を信じ、ドレスデンは僅か

の部隊のみ留まるものとなし、攻撃奏功の容易なるを確信した。

奈翁の會戰計畫案（第九十二圖參照）

此の計畫案は流石に奈翁の徹底せる考案であると思はれるに依り特に之を紹介する。

一、第一、第二軍團、新近衞師團、近衞騎兵師團は八月二十五日迄にストルペン（要圖東北方、ドレスデン東方二十粁）附近に集合し待機の姿勢に在らしむ

二、但し右の第一軍團は八月二十六日拂曉軍の總前衞としてケーニヒスタイン（ドレスデン東南二十五粁）よりエルベ左岸に進出し同地附近に前進し來れる露（ウユルテムベルヒ公）軍（一萬三千を）擊退したる後西方に旋回しエルベ河に沿ひビルナ（ケーニヒスタイン西北十粁）に向ふ

三、ビルナには二箇の橋梁を架設し他の兵團の渡河に供す

四、八月二十七日を以て前記兵團十萬を以てドレスデンの前面に迫れる敵の背後に進出し之が殲滅を企圖す

五、以上の行動を秘匿する爲、有力なる騎兵團及騎砲兵をエルベ河畔に配備し以て佛軍主力が其掩護によりドレスデンに向ふ如く欺騙するに努めしむ

六、敵若し眞面目の戰鬪を交ゆることなくコムモタウ（ドレスデン西南六十五粁）方向に退避せんとする場合には前記騎兵團はドレスデン直接守備に當れる第十四軍團と共に直接追擊に任じ、軍主力はベーメン州方面に南進し、ノルレンドルフ（ドレスデン東南三十五粁）を經由するエルツ山脈道を敵に先だちて占領し敵をして止むなく西方の道路を經て退却するに至らしめ、此の間佛軍は要すれば捷路を經てブラーグ（第九十二圖東南端）方向に挺進す

小評論　要圖を被見しつつ此の計畫案を觀察するとき、極めて壯烈痛快であり、放膽にして而も徹底せる殲滅方式であることが首肯かれる。而して之を當時に於ける同盟軍側の行動と對照するときは、益、其の殲滅效果を擧ぐるの公算を大ならしむるを思はしめるのである。蓋し同盟軍は奈翁が遠く東方シュレジエン軍方面に在りと誤信し、安心して、守備劣勢なるドレスデン攻擊を敢行するの實狀に在つたから、此の意想外の側面、背面攻擊を喰つたならば其の悲慘なる結果を想ふに十分であるからである。

奈翁の計畫變更　總ての準備や兵力の集結は奈翁の意圖の如く八月二十五日夕迄に完了したにも拘らず、奈翁は其の痛快なる前記の計畫を變更して平凡案となした。曰く

第一軍團のみは敵の側背に向ひ行動、其の他の兵團は二十六日朝現在地を發しドレスデンに向

ひ前進し、同地に於て決戰を期す

といふのである。前記積極的放膽案が、斯く消極的、攻勢防禦案に墜したことは、恐らく左の理由に歸するであらう。

イ、新募未熟の新編成兵團の運動性極めて不完全であり、奈翁の欲する如き機動に堪へ兼ねる、從つて、ケーニヒスタイン及ピルナ附近に於ける敵前渡河の困難、又エルベ左岸地區に於ける複雜不良なる地形道路の通過に危險を冒すよりは、寧ろドレスデンの既設陣地に據り、攻勢防禦を以て敵に對するを穩當なりと認めたこと

ロ、第十四軍團長サンシールよりの急迫せる狀況の報告や、特に派遣せる視察將校の復命等により、第十四軍團が十倍する敵の攻擊に對し數日間を支持すること覺束なしと認めたこと

其の他にも理由はあらうが、之が主なる變更の動機となつたものと想像される。

小評論　前記の如く、痛快案が平凡案に變更されたことに就ては、之が奈翁によりてなされたことにより一層教訓に富むものとして等閑に附すべからざる所以である。筆者は右の痛快なる案が新募未熟の軍隊を以てしては困難なることに異論はない。併し、奈翁の如き殆ど超人的神技の持主として、親ら其の軍を指揮する限り、何とかして之が實行を遂げ得ざることは

なからうと思ふ。勿論奈翁としても非常の努力を要することは明かであるが、彼が始めて伊太利軍司令官となりたるとき、其の軍隊は給養極めて不良、志氣は阻喪し戰力著しく低下し到る處に墺軍の爲に打ちすくめられたる慘じめな軍隊を率ゐ、之を戰場に導くや、急に偉大なる威力を發揮し、墺軍を散々に打ちのめしたことを想ふとき、ドレスデンの場合に於ても、往年の氣力が奈翁にあつたならば、斷行して拔群の成績を擧げ得たであらうと信ずるものである。此の事件に關し獨國將軍フライタハ、ローリングホーフェンは次の如く批判して居る。

奈翁が此の考案を實行するに躊躇したことは、延いて全戰役を失敗に歸せしめたる端緒となつた。縱ひドレスデンの舊市街は陷落しても右岸に於ける新市街は遙かに堅固で之を維持することは可能である。

更に下流に在る複橋頭堡が確實に兩岸を支配するに足るものなることは、奈翁自身も之を認めた所であるに於てをやである。云々

是に由つて之を觀るに、奈翁が從來の獨裁に似ず、部將に因り或は部將の反對意見に耳を貸したりしたことは全然異例に屬することで、彼が其の軍隊に信用を置き得ざるに至つたのみならず、彼自身の體力、精力が頓に沈衰した爲、良好なる考案を有するも斷行の氣力減衰せ

るの兆を認めざるを得ぬ。精到なる軍隊と卓越なる指揮者とは、恰も車の兩輪の如く戰勝の爲の無二の條件である。奈翁すらも其の軍隊の未熟を顧慮して名案の實行を中止するに至つた。況んや彼に若かざる指揮者に於てをやである。又軍隊が其の指揮官に信賴し得ざるに至つたならば其の威力は著しく減退すること、前の場合より更に危險なるものであることに思を致し、指揮官たる者は其の精力、體力の旺盛と統帥指揮の卓越とを期せねばならぬ。

戰鬪の概況（第九十三圖參照）

同盟軍は奈翁在らずと信じ佛軍を一蹴すべく八月二十六日早朝からドレスデンに對し攻擊を始めた。佛軍は最初其の防禦陣地に據りて極力敵を拒止しつつ動かず、機の至るを待ちつつあつた。午後に入り奈翁は後續兵團を戰線に加へ斷乎として攻勢に轉じた。同盟軍は此の豫期に反したる出擊に面喰つて第一線を舊位置まで後退するの止むなきに至つた。恰も此の時、佛第一軍團は豫定の如くケーニヒスタイン附近でエルベ河を渡り露のウヨルヲムベルヒ軍を擊退した。戰鬪第一日は此の狀態を以て未決の儘に終つた。

第二日（八月二十七日）は、佛軍の攻勢であり、奈翁は手裡にある全力を擧げて敵の半圓形をなして包圍的態勢を採れるに對し速かに其の兩翼から逐次に擊破した。同盟軍は之に對し無爲にして策の施すべきを知らず、形勢不利の狀態を以て此の日の戰鬪を終つた。

第三日（八月二十八日）　奈翁は尙決勝を獲得しあらずとの判斷の下に、攻擊を再興せんが爲、天明を持ちつつあつた。然るに敵は既に退却を開始したことを知つた。之に於て問題は如何に追擊を部署すべきかである。其の部署の大要次の通りである。（第九十四圖參照）

一、ミュラー騎兵團長をして第二軍團及第一騎兵軍團を率ゐ敵の左翼兵團を追擊してフライベルグ（ドレスデン西南三十粁）方向に

二、第六軍團をして當面の露軍を追擊しつつデイッポルスワルデ（ドレスデン南方二十粁）方向に

三、第十四軍團をしてマクセン（ドレスデン南方十粁）方向に

四、近衞はピルナ（ドレスデン東南十粁）に通ずる街道を追擊

五、第一軍團はペーテルスワルデ（ドレスデン東南三十粁）に通ずる街道を追擊

小評論　戰鬪の狀況を總括的に觀察するとき、佛軍の勝利に歸したとはいへ、何となく活氣に缺け、而かも第二日に於ける同盟軍の不利敗退を豫想し得るに拘らず、奈翁の烱眼之を察知して之を捕捉するの處置に出でざりしが如き、又追擊部署が奈翁の既往に似ず僅かに戰場追擊に止めた如き、消極的處置以上に出づる能はざりしは、何となく奈翁の爲に寂莫の感なき

を得ぬ。結局、新募未熟の軍隊が會戰前數日に亙りて强行軍を實施したる後、間斷なき降雨の裡に二日間の戰鬪を交へ、心身疲勞の極に達せる爲であり、往日の如き活躍が出來なかつたのである。併し奈翁の個人的精力が往日の如くであつたならば、疲勞の極に達せる軍隊も電擊的刺激を受けて十倍の力を出さしめ得たのではないかと想ふとき、秋風落莫の悲哀を覺えしめる。

佛第一軍團全滅事件の突發　第一軍團長ワンダンムは、奈翁から其の自己軍團の外、騎兵一師團、第十四軍團の一師團、第三軍團の一旅團を指揮しベーテルスワルデ方向から南下してベーメン州に進入すべき命令を受け、他の兵團に比し活潑に追擊行動に移り、クルム（エルツ山脈の出口）附近に進出し、退却中にある露軍の一部隊を攻擊したが、奏功に至らずして二十九日は暮れた。然るに、同盟軍はワンダンム軍團が孤立して前進し來れるに對し、急に積極意思を起し優勢を以て逆襲に轉じた。是に於てワンダンム軍團長は之に對しクルム附近の要地に陣を布き極力之を拒止しつつ友軍の來援を待つに決した。斯くて翌三十日朝八時頃から優勢なる敵の攻擊を受けたが、午前中は頑强に抵抗を試みしも、正午頃に至り力支へず山脈内に壓迫せられ苦戰に陷りたるとき、恰も北方から一縱隊が進んで來た。最初は友軍來援と信じて志氣が振つた。所が其の欣

びは瞬間に落膽と變つた。友軍ならずして敵普軍であつたのである。斯くして腹背敵の挾擊により軍團は全滅した。

佛の其の他の兵團は山脈の北側で其の追擊を中止した。同盟軍は泥濘の惡路に困難を嘗めたが、佛軍の追擊中止の御蔭で安全に離脱し得たのみならず、豫期以外に佛の一軍團を逃げがけの駄賃に貰つたのであつた。

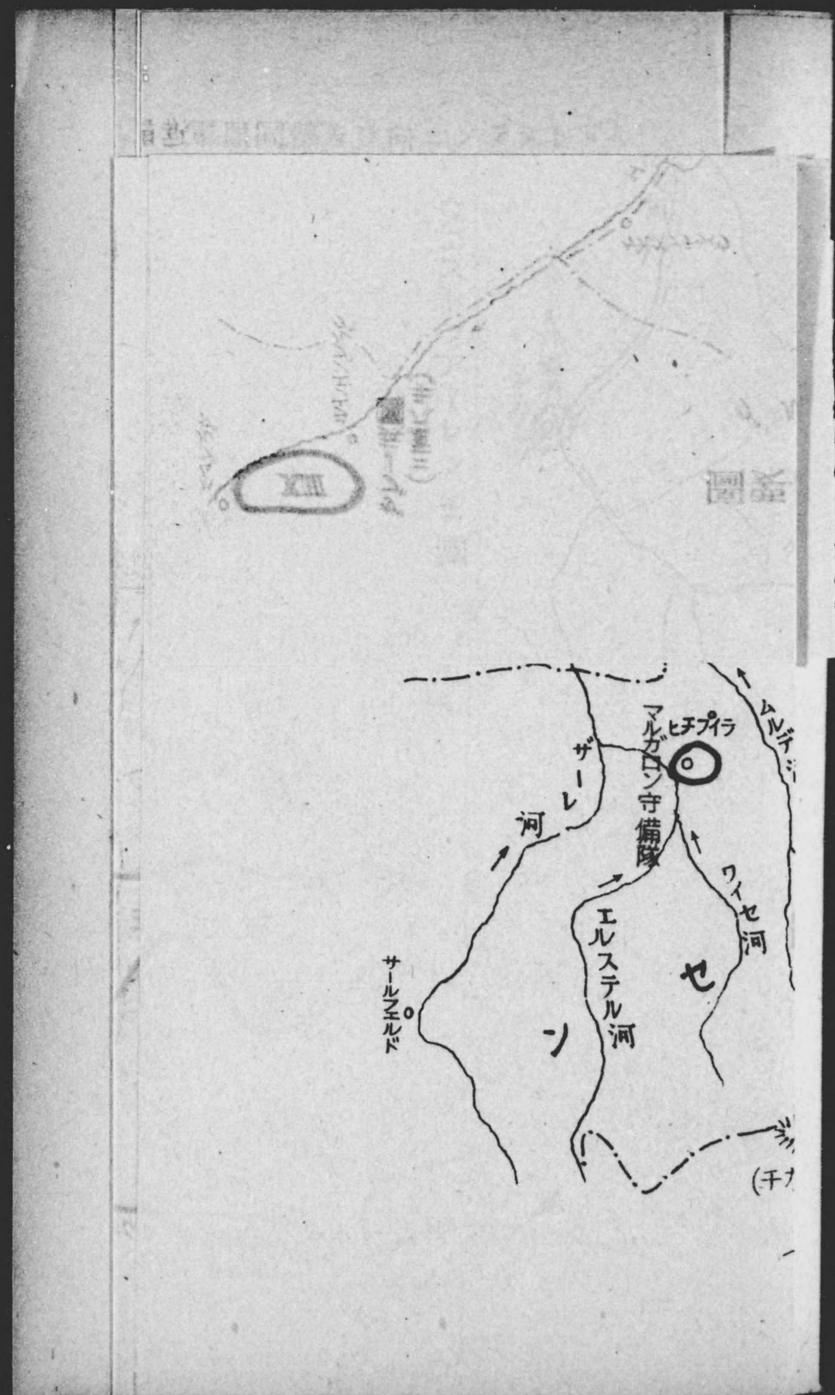
此の追擊行動間、奈翁の既往なりせば、重要方面に親ら挺進して之を指導したであらう。然るに追擊を部署するや、馬車を驅つて、ドレスデンに歸り、二十九日も三十日も依然ドレスデンに滯留して戰況を樂觀しつつあつた。傳ふる所によれば、本戰鬪間奈翁は特に健康を害し胃痛に惱まされつつあつたと。

小評論　ワンダンム軍團全滅事件は、各部將の無爲にして獨斷能力を缺き追擊動作に連繫協同が極めて不十分であつたことが主なる原因であり、之は奈翁自身が身體の不快よりドレスデンに留まり親ら直接指揮することを忘つた應報であらねばならぬ。

併し現今の戰鬪に於ては火器の發達に依り地形の利用宜しきに叶へば相當長く抵抗を續け得るのみならず、通信機關の發達により彼此の連繫協同にも便を加へたから、孤立の危險は往

時に比し減少したとも謂へる。尤も獨軍の所謂電擊戰法により右の思想が多少逆戻りしたとも考へられるが、之に對する防禦の手段方法宜しきを得れば、依然として成立すべき原則である。最近佛軍が一と溜りもなく席卷せられ、堅壘マジノ線も殆ど瞬時に吹き飛ばれたるに反し、レニングラードやモスカウが比較的長時日に亙り獨軍の電擊的猛攻に堪へつつあるに徵しても明かであらう。故に追擊行動の如きは必ずしも常に密接なる連繫のみに顧慮する必要なく、可能なる兵團は一意挺進して敵の殲滅に努むべきである。若し孤立危險に瀕する場合には、時間の餘裕を得る如き手段方法を廻らし以て友軍の來援を容易ならしむる如く注意するを要する。今次支那事變に於ける皇軍の行動や獨軍の追擊行動の如き何れも此の趣旨に則つて居ることが首肯せられる。

佛ウージノー兵團及マクドナルド兵團の敗北　ドレスデンニ滯留して戰況の發展を期しつつあつた奈翁は、曩にマルモン兵團長の具申せる如く「奈翁が一勝を得たるの日は卽ち他正面の敗北せる日」であつた。北方に在つたウージノーは獨斷專行の能力など持合はせがなく、各個擊破の憂目に逢つて敗退した。又マクドナルド兵團長も奈翁から西方シユレジエン軍を擊退すべき命を受けたが、重點に對する兵力部署を誤つて大敗を喫した。

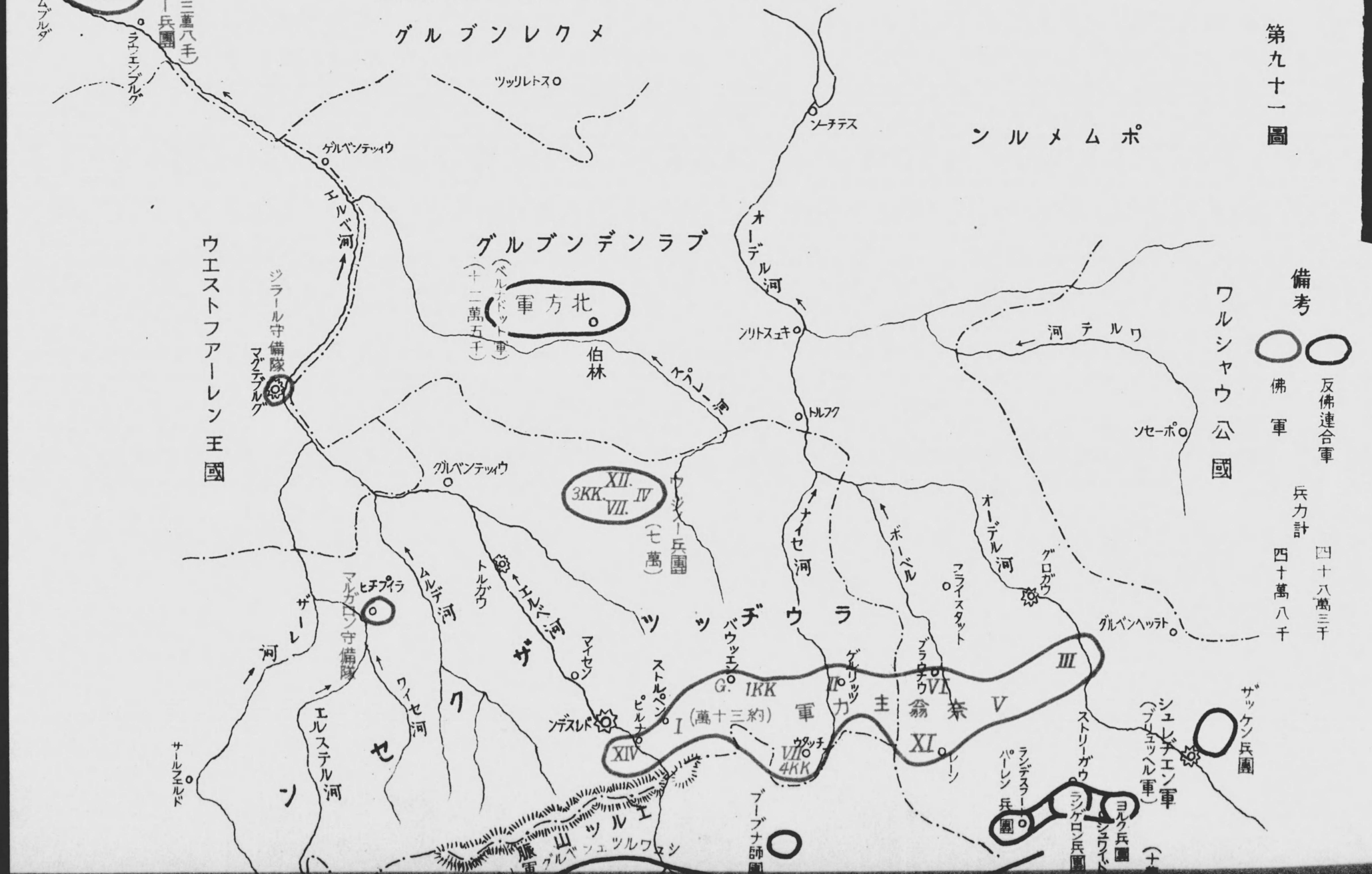


第九十一圖

一八一三年八月上旬休戰末期ニ於ケル両軍ノ位置要圖

第九十一圖

一八一三年八月旬休戰末期ニ於ケル両軍ノ位置要圖



備考

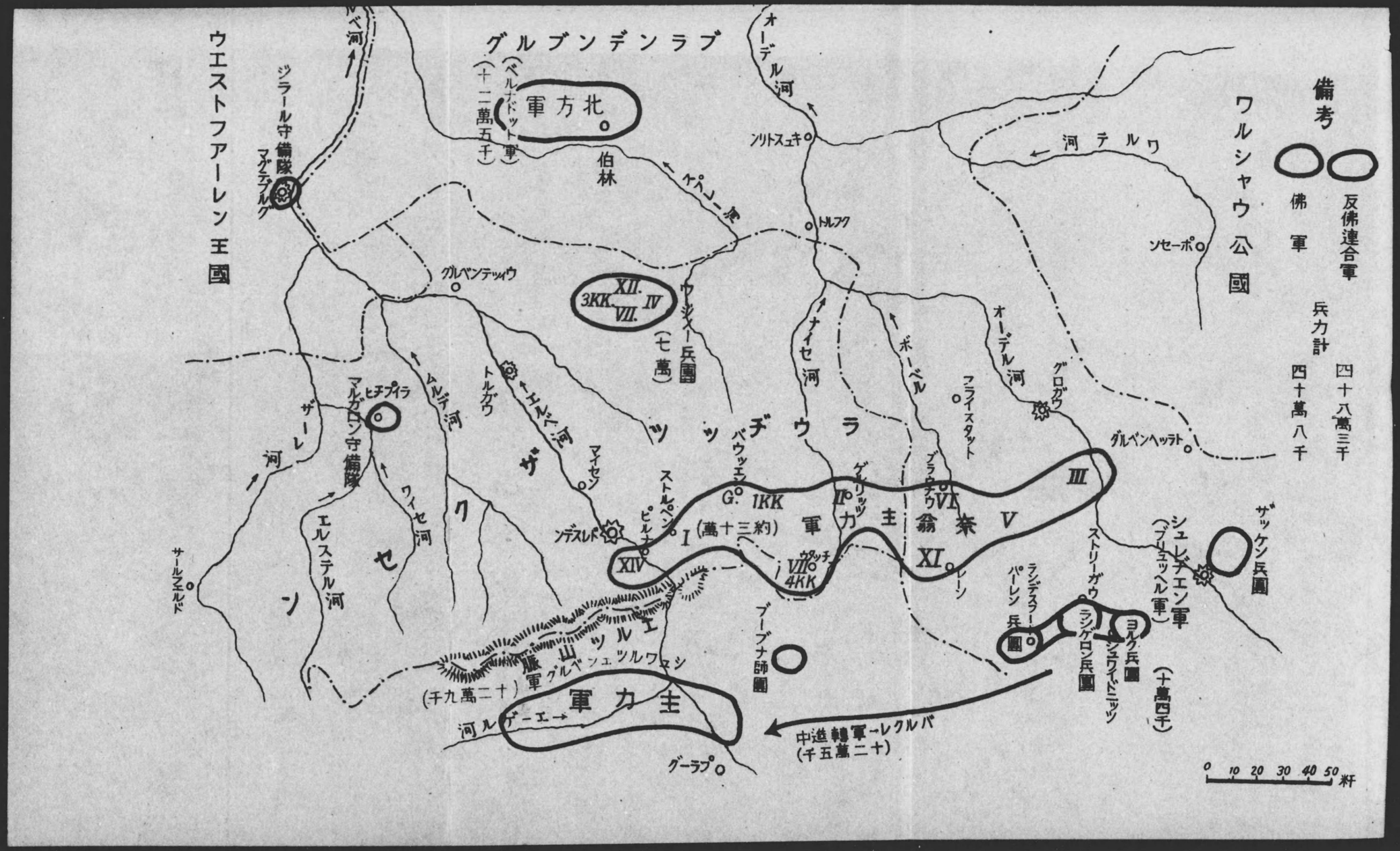
○ 反佛連合軍

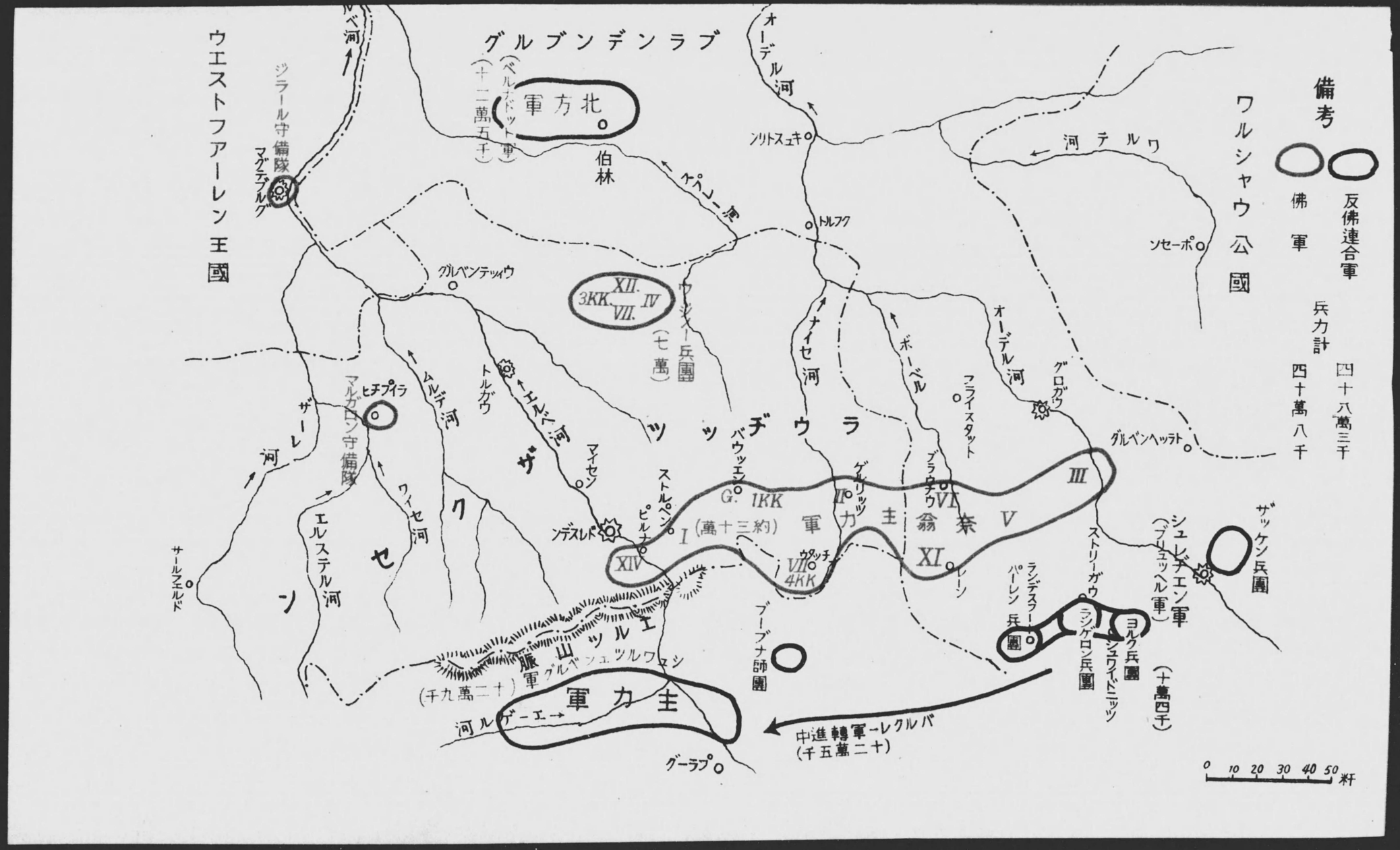
○ 佛軍

兵力計

四十八萬三千

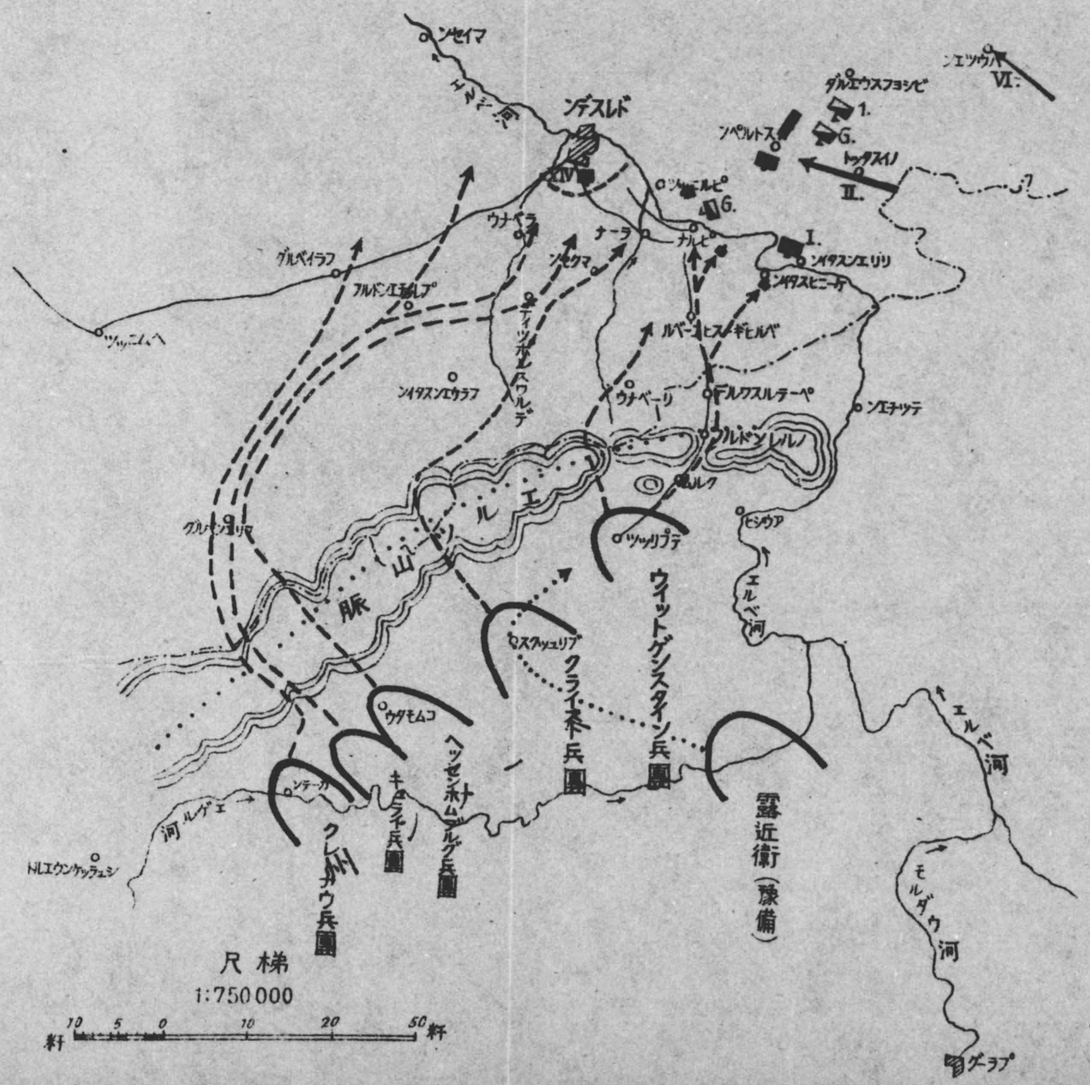
四十萬八千


備考
反佛連合軍
佛軍
兵力計
四十八萬三千
四十萬八千
ワルシャウ公國
ウエストファーレン王國
グルブンデンラブ
北方軍
(ベルナドット軍)
(十二萬五千)
伯林
ポーゼン
ジラール守備隊
マグデブルグ
ソンリトスュキ
トルフク
ソセーポ
グルベンテッイウ
XII.
3KK.
IV
VII.
ウジヤー兵團
(七萬)
ナイセ河
ボーベル
フライスタット
オーデル河
グロガウ
グルベンヘッラト
ムルデ河
トルガウ
エルベ河
マイセン
ヒチプイラ
マルガロン守備隊
ザーレ河
ワイセ河
エルステル河
サールフェルド
ソセ
ク
ザ
ツ
ツ
ヂ
ウ
ラ
バウッエン
G.
1KK
(約十三萬)
I
ストルペン
ピルナ
ゾンデスルド
XIV
ゲルリッツ
II.
カ
主
軍
ブラウンウ
VI
翁
奈
V
III
XI
ウダッチ
VII.
4KK
レーン
ブーブナ師團
ランデスフーパーレン兵團
ストリーガウ
ラシゲロン兵團
ヨルク兵團
シュワイドニッツ
シュレヂエン軍
(ブリュッヘル軍)
(十萬四千)
ザッケン兵團
エルツ山脈
グルベンシュツルワッシ
(十二萬九千)
主力軍
河ルデーエ
中進轉軍ーレクルバ
(十二萬五千)
グーラプ
0 10 20 30 40 50 粁


備考
反佛連合軍
兵力計
四十八萬三千
佛軍
四十萬八千
ワルシャウ公國
ウエストファーレン王國
グルブンデンラブ
北方軍
(ベルナドット軍)
(十二萬五千)
伯林
ポーゼン河
ノリトスュキ
トルフク
ソセーポ
河テルワ
オーデル河
ジラール守備隊
マグデブルグ
グルベンテッィウ
XII.
3KK.
VII.
IV
ウシツー兵團
(七萬)
ナイセ河
ボーベル
フライスタット
グロガウ
グルベンヘッラト
ヒヲプイラ
マルガロン守備隊
ムルデ河
トルガウ
エルベ河
マイセン
ザーレ河
ワイセ河
エルステル河
ツッヂウラ
ザクセン
バウッエン
ストルペン
ピルナ
ゲルリッツ
ブラウ
ヴェルデ
ランデスフート
ストリーガウ
ランゲロン兵團
ヨルク兵團
シュワイドニッツ
ランデスフート
パーレン兵團
ブーブナ師團
ザッケン兵團
シュレヂエン軍
(ブリュッヘル軍)
(十萬四千)
ンデスレド
XIV
I
G.
IKK
(萬十三約)
軍
主力
II
VI
翁
奈
V
XI
VII
4KK
ウタッチ
レーン
サールフェルド
ルツエ
山脈
ルツシュ
ワシ
(千九萬二十)
軍グルベンシュ
主力軍
河ルゲーエ
グーラプ
中進轉軍ーレクルバ
(千五萬二十)
0 10 20 30 40 50 粁

第九十二圖

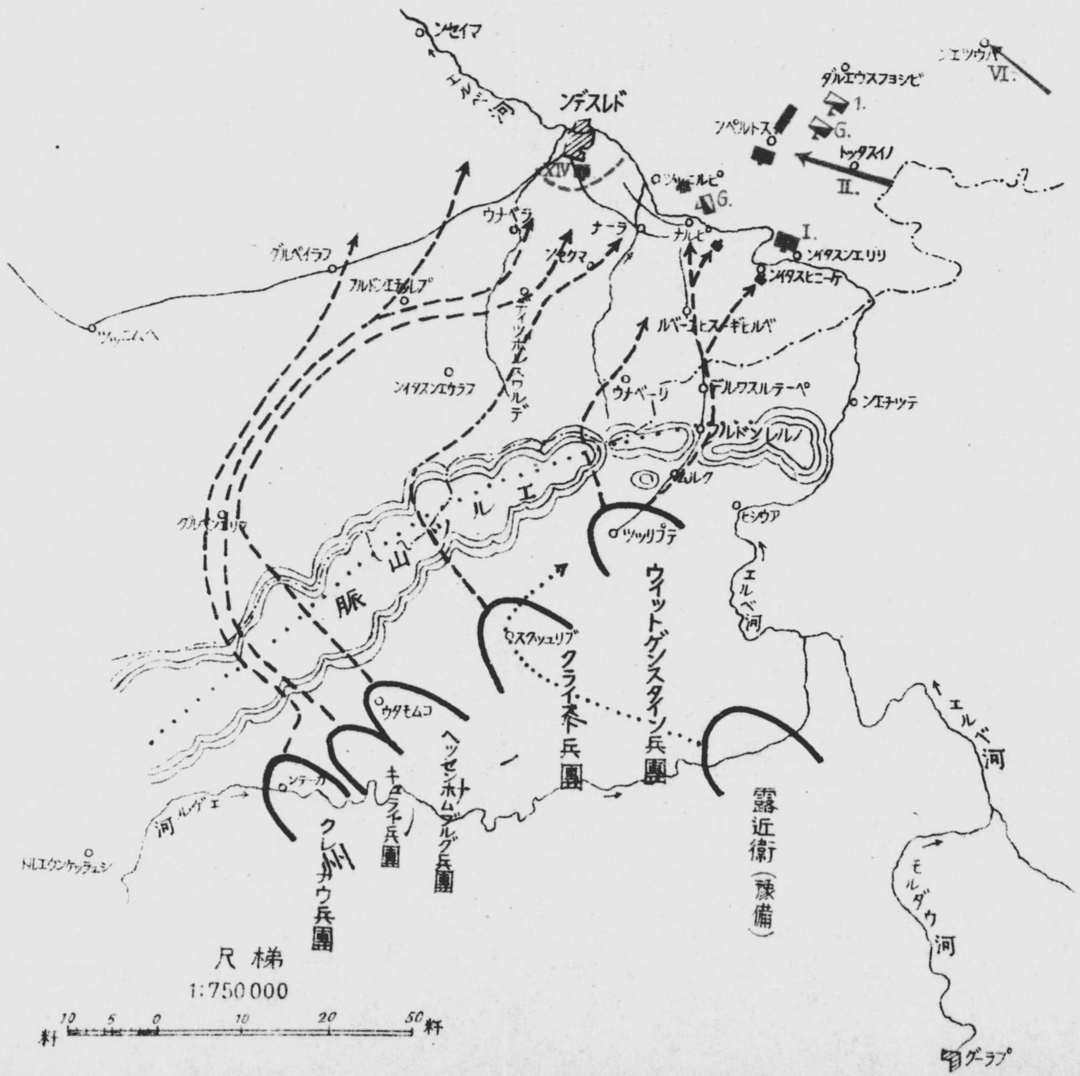
「ドレスデン」ニ向フ反佛同盟軍ノ前進
及八月二十五日ニ於ケル佛軍ノ位置



第九十二圖

「ドレスデン」ニ向フ反佛同盟軍ノ前進

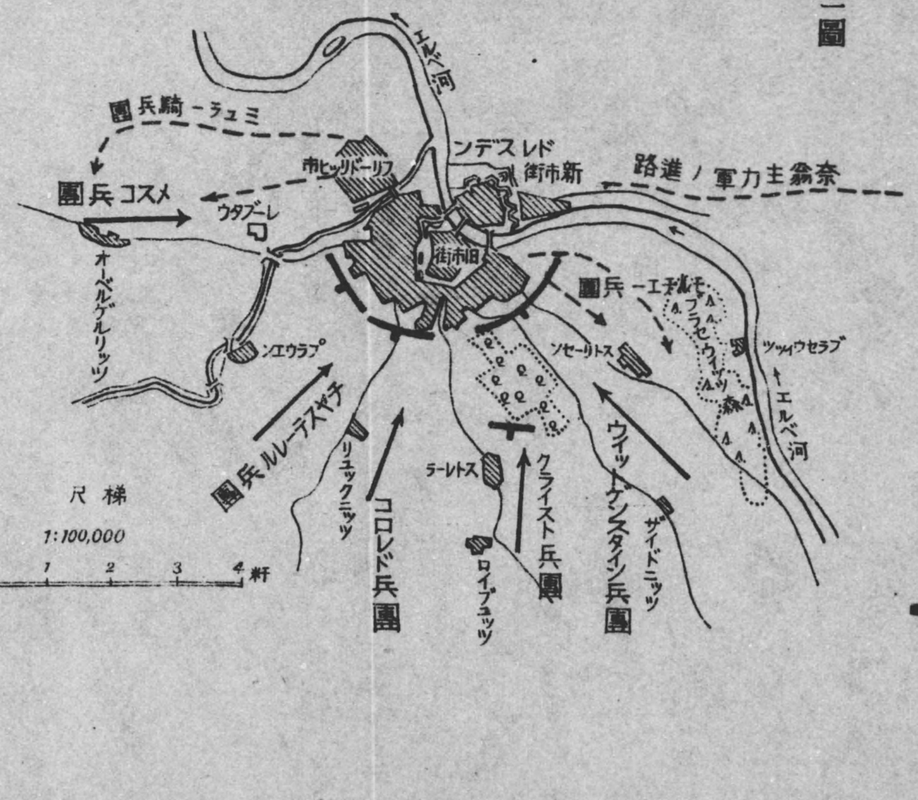
及八月二十五日ニ於ケル佛軍ノ位置



第九十三圖

ドレスデン附近會戰要圖

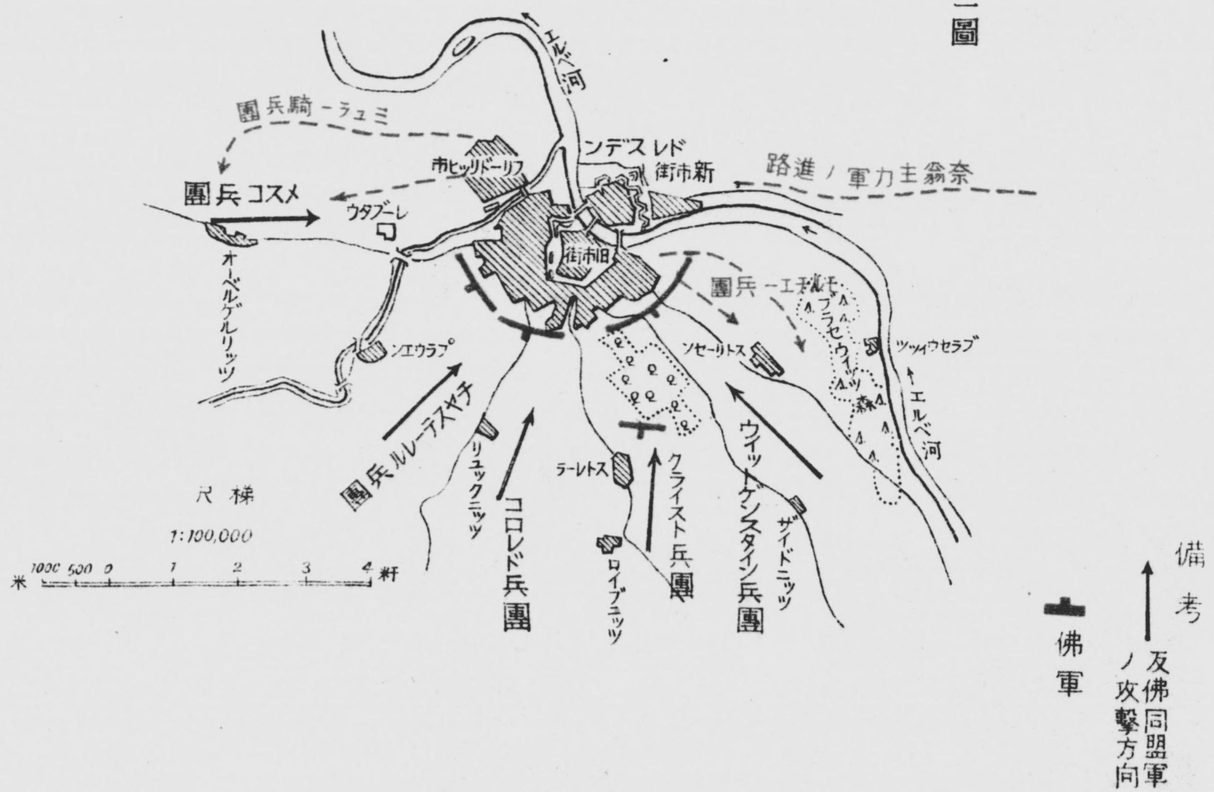
於八月二十六・二十七日



第九十三圖

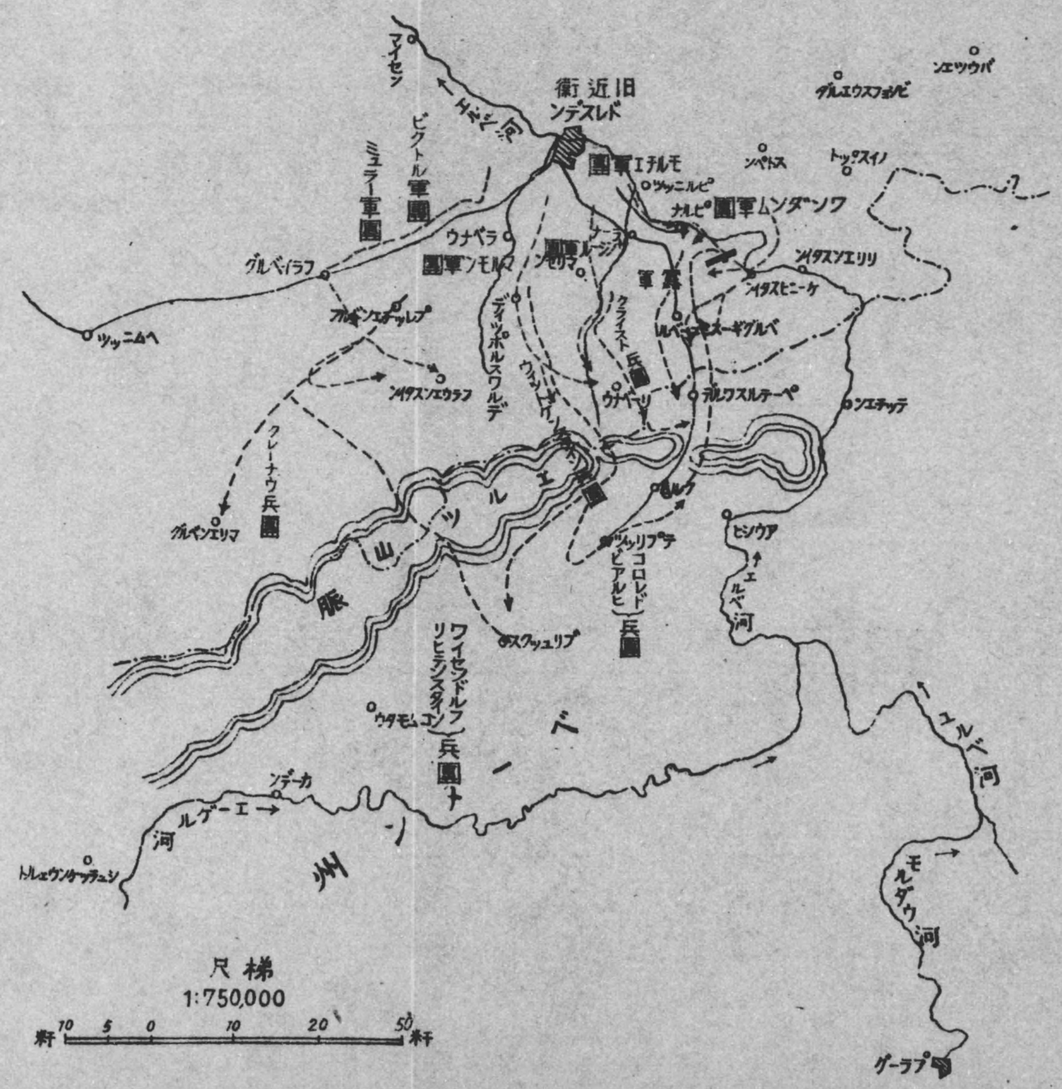
ドレスデン附近會戰要圖

於八月二十六・二十七日



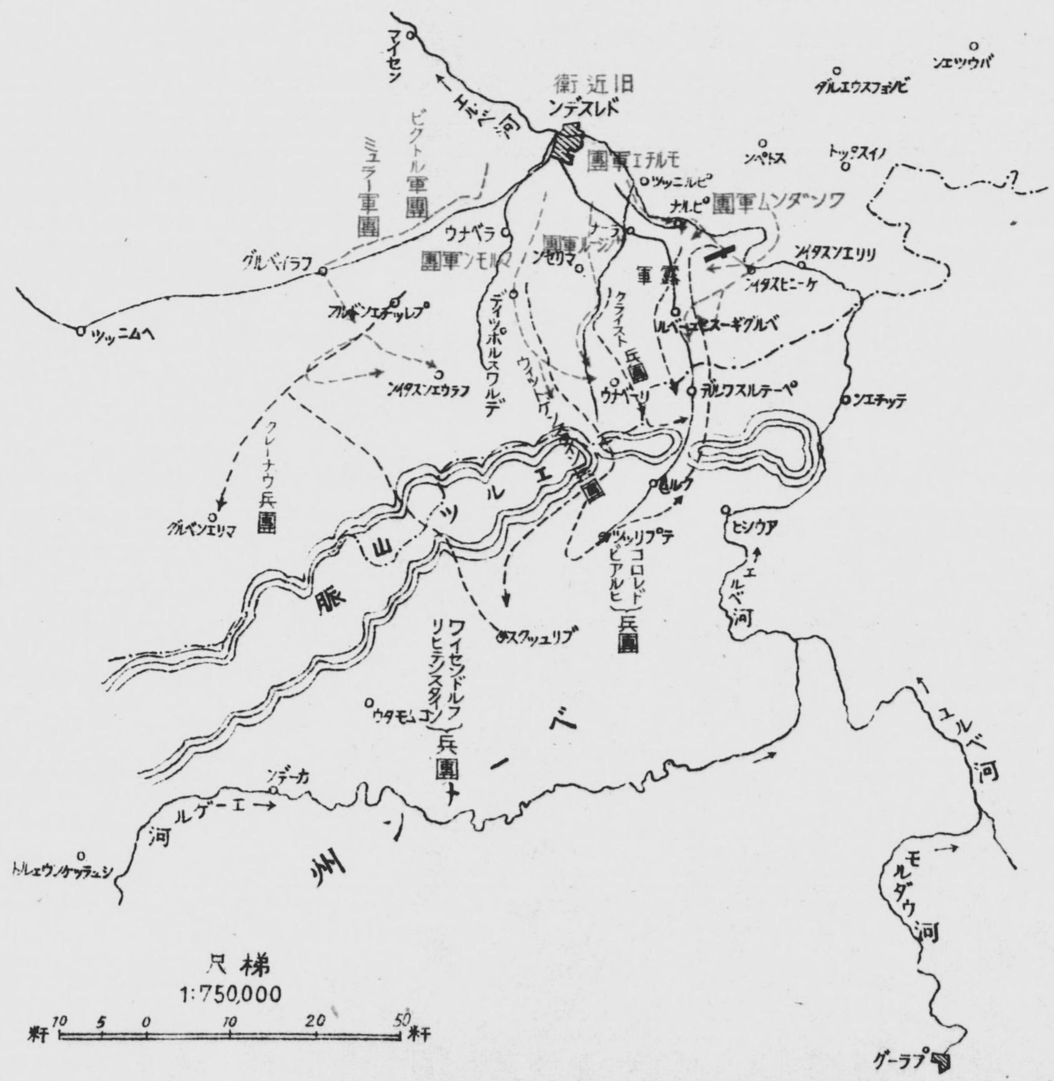
第九十四圖

「ドレスデン」會戰後ノ行動



第九十四圖

「ドレスデン」會戰後ノ行動



奈翁の在らざるとき、戰鬪能力に就ては同盟軍の方が上手となつた。蓋し同盟軍は從來屢、奈翁から苦杯を嘗めさせられ、眞劍なる教育を受けたのであつた。

評　論

一、殲滅戰としてドレスデンを評價すれば、落第である、範例としては適當せぬであらう。而も之を紹介したる所以のものは、全滅せしめ得べき機會が十分であるに拘らず、之を逸したる事項に就て逆に教訓を求めんが爲である。

卽ち、奈翁の策案なる會戰計畫は實に痛快でなり、之が實施を確實に斷行し得たらんには、赫々たる範例を吾人に示したであらう。殊に敵が奈翁在らずとして、積極意思に炎えつつドレスデンに衝突せるとき突如として其の側背に不意の進擊を行ひ得るに於てをである。會戰に於ける殲滅戰の成立には、敵が相當の自信を以て强力に抵抗することが主なる條件となるからである。次に計畫案が變更されて平凡案となりたる後に於ても、若し攻勢移轉を猛烈に實施し、且追擊を徹底的に實施したならば。再びそこに殲滅戰がエルツ山脈の南北地區に於て實現したであらうことである。殊に元來の惡路が降雨の連續によりて更に困難を倍加したる狀況に於て然りである。然るに奈翁自身の不健康が主なる原因となり。部隊の疲勞と相俟ちて不首尾に終りたる

は遺憾至極と謂はざるを得ぬ。

二、理論的に論及すれば、前述の通りである。併し之を實際に就て深く考慮するとき、理論通りに斷行することの極めて困難なることに想到し、眞劍に此の困難を克服して理論通りに實施し得る爲の物心兩方面の研究、練磨が必要である。精兵、良將と相俟つて諸施設就中、輜重兵站の設備特に將來空輸の發達に就て大々整備を斷行することが、我が國軍の爲急務の一であると信ずる。

第九例　奉天會戰（第九十五圖參照）

日露戰爭は、我が國運を賭せる重大なる意義を持てるものなるは今更說明を要せぬが、其の作戰指導の要領を窺ふに、所謂分進合擊の原則に據り敵を遼陽附近に捕捉殲滅せんことを企圖したものと謂へる。然るに開戰の當初に於ては世界に雄を唱へたる露國に對するに蕞爾たる島國日本を以てするのであるから、世界各國共に日本の勝利を疑ひたるは寧ろ當然であり、我が國としても、極めて愼重に其の行動を律するを要するの立前から、露軍の素質就中指揮官の能力に就て、其の實相以上に評價した傾きがあり、且我が軍兵力の不十分なると裝備就中砲の威力に就て敵に

劣り、且彈藥の補給極めて不十分なりし等の關係から、遼陽に至るまで各戰鬪共勝利を得たるも概ね平凡なる前進退却に終始し、殲滅的效果を擧げ得なかつたのは遺憾であつた。

奉天會戰は彼我共に最後の決戰たるべきを覺悟して敢鬪せられたるものであり、我が軍は數に於て劣勢なるにも拘らず、恰もカンネ戰鬪の精神に則り優勢なる露軍に對し兩翼包圍を企圖し、赫々たる勝利を獲得し、以て戰役の終局を誘致するの效果を奏したのである。然し之を學習的に觀察するとき尙遺憾の點がある。依て敢て其の大要を紹介し敎訓を求めんとする所以である。

滿洲軍總司令官は、奉天會戰開始に先だち明治三十八年二月二十日各軍司令官及第三師團長を會し攻擊準備の命令及訓示を與へた。其の訓示の要項を列擧すれば左の通りである。

一、最大の兵力を以て雌雄を決せんとす、此の會戰に勝利を制したるものは卽ち此の戰役の主人となるべし

二、從つて土地を略し壘塹を陷るは作戰大方針の主眼にあらず、敵をして復た起つ能はざらしむるに在り

三、諜報によれば敵統帥クロパトキン大將は今次會戰に於て決して退却を許さず、退走するものは罰して刀劍の錆生すべしと以て其の覺悟の程を窺ふべし

四、頑强なる敵をして敗退に陷らしむるときは之に損害を與ふること愈〻劇甚なること戰理の自然なり、然るに從來の經驗に依れば壁を守り壕に據り頑强否寧ろ執拗に防戰することは彼の長所にして機敏なる活動を以て勝を制するは彼の短所なり、故に我は彼の長所をして其の用をなさしめず其の短所をして益〻短ならしむる如くせざるべからす、之が對策は他なし、壘壕に據るに遇はば腕力を以て之を攻略するを避け、其の背側より之を攻擊し、敵の動搖に乘じ一擧に之を擊破するに在り、然るに敵の陣地に對し直ちに之を攻擊し、其の頑强なる抵抗を受け我が損害大なるに及び始めて側背に力を用ひんとするは、交戰者の常態とは云ひながら其の施策既に遲しと謂ふべし、今日迄の經驗によるに此の點に於ける缺陷なしとせず、結局偵察の不十分なるに起因せずんばあらず

五、沙河會戰の當初注意を與へたる各團隊間の協議が讓り合ひの弊を釀生するの件に就ては今次會戰に於て各團隊の任務上、協議の餘地なき如く作戰を指導せんことを重ねて希望す

六、敵の捕虜の創痍を檢するに我が砲彈による負傷は極めて稀なり、是深く注意を要する所なり、我が砲彈の製造力上全軍の爲僅かに十二、三萬發を蓄ふるのみ、故に一發たりとも無效の彈丸を發射せざる樣留意を要す、若し渡河會戰の結局の如く彈藥の缺乏を訴へ、爲に果敢

なる戰局を結ぶ能はざる如きことあらば吾人は無益の戰鬪を交へたるの責を免る能はず

小評論　以上は訓示の要點を抄錄せるものであるが、當時を想うて轉た感慨なきを得ぬ。要は奉天會戰を最終決戰と覺悟し殲滅戰を企圖せられたのであり、而して敵が我と同じく決戰の覺悟を以て臨む樣であるが、之は殲滅戰の爲には却つて都合がよいと云ふことを示され、次で從來の經驗に鑑み陣地の正面に對し力攻を避け勉めて側背に向へと指示し、特に砲彈の無效消費を戒められたのであつて、當時の實狀よりして蓋し適切肯綮に中るの訓示と申すべきである。併し今次の獨ソ戰の例に鑑みれば、露軍の行動、戰法等に就て特に異色あるを看過し得ぬものがある。之は後述するが、「露軍の側背感受性の强きこと」の件は必ずしも日露戰の例と異なるものがあり、特に注意を要する事項である。

會戰の概況　鴨綠江軍は大本營直轄であるが、滿洲軍の右側卽ち日本軍の最右翼に在つて先づ敵を該方面に牽制し且敵の左側を包圍する如く二月二十日から運動を起し、嶮峻なる山地に據れる敵に對して攻擊を開始し、二十四日には清河城を占領し、次で之を追擊せんとしたるも、敵の頑强なる抵抗に作戰の進捗を見ず、爲に滿洲軍の作戰に頓挫を生じた。此の間滿洲軍總司令官の管轄たる第一、第四、第二軍は、當面の敵に對して砲擊を繼續し、第三軍は最左側に在りて敵の

騎兵を驅逐しつつ繞回運動を繼續しつつあつた。又二十八珊の榴彈砲が第四軍の正面に据附られたことは周知の事であるが、旅順港内の敵艦の殲滅に偉功を奏したる當時の最大口徑砲が野戰に使用せられたのは、破天荒の手段であり、敵の志氣上に及したる效果は大なるものがあつた。併し實際の物質的損害は土地の凍結の爲豫期の如くには擧らなかつたのである。

總司令官は以上の狀況に於て三月一日を以て全軍の攻勢移轉を開始することを企圖し、二月二十八日を以て其の命令を下した。卽ち

一、第一軍は益、包圍運動を擴張して敵の左翼を攻擊し敵の左側背に對する脅威を完成し傍ら所要に應じ鴨綠江軍の進出を間接に援助せしむ

二、第四軍は三月一日より萬寶山の敵に對し攻擊を開始せしむ

三、第二軍は三月一日より長灘、三臺子間の敵に對し攻擊を開始せしむ

四、第三軍は三月一日より四方臺附近の敵を成るべく西方及西北方より攻擊せしむ

五、滿洲軍總豫備隊(第二師團及後備步兵三箇旅團)は大東山堡、狼洞溝間の地區に集合せしむ

以上の部署を以て三月一日より全軍の總攻擊が開始せられたが、敵の頑强なる抵抗殊に兵力も優勢で鴨軍、第一、第四、第二軍何れも苦戰を續けつつ、三月七日に及んでも尙大なる進展を見

ぬ。總司令官は此の間に處し若干の兵力轉用をなし、總豫備中第三師團を第二軍に復歸せしむる等の處置をなし攻擊進展を督勵しつつあつた。

然るに七日第一軍正面前に於て敵兵退却の兆あり、偵察中、敵は第一軍戰線の隊長に休戰の提議をなし以て我を欺かんとせる等、愈、全線退却を判斷し得るに至つたので、總司令官は八日午前各軍に對し左の要旨の追擊命令を下した。

一、第一軍ハ敵ヲ追擊シ其ノ全力ヲ以テ興隆屯附近ニ於テ渾河ノ線ニ達スベシ

二、第四軍(第四師團及一支隊欠)ハ敵ヲ追擊シタル後長嶺子附近ノ線ノ後方ニ於テ速カニ隊伍ヲ整ヘ鐵嶺方向ニ大追擊ヲ爲スノ準備ヲ完了スベシ

第四師團及富岡支隊ハ此ノ命令受領後直チニ第二軍司令官ノ令下ニ復スベシ

三、第二軍ハ奉天附近ノ敵ヲ擊破シタル後奉天西南方ニ於テ隊伍ヲ整ヘ兵力ヲ集結スベシ

四、第三軍ハ奉天附近ノ敵ヲ擊破シ後奉天北方ニ於テ隊伍ヲ整ヘ兵力ヲ集結スベシ

但シ少クモ一師團ノ兵力ヲ蒲河ヲ經テ瓢家屯(鐵嶺東南二十五粁)方向ニ差遣シ敵ノ退路ヲ遮斷セシムベシ

三月九日正午頃から烈風砂塵を捲き呎尺を辯ぜざる程であつた。併し此の風の方向が敵に向つ

て居つた爲、我が軍には寧ろ好都合であつた。鴨軍、第一、第四軍は敵を追擊して此の日夕刻には概ね渾河の線に達した。第二、第三軍方面は尙優勢なる敵を力攻しつつ敵を牽制した。恰も此の日十三時奉天北方約八粁に在る觀音屯附近を攻擊中であつた第一師團は、左翼に敵の大逆襲を受け一時危殆に陷つたが、辛うじて之を拒止した。但し最左翼に增加せられたる後備旅團は、此の逆襲に對し力支へず後退の止むなきに至り、一時は潰亂狀態を呈したが、全軍には別に影響を與へずして濟んだ。此の逆襲は、敵の總豫備隊が鴨軍方面の脅威に牽制せられて遠く該方面に移るや其の主攻擊にあらざるを知り反轉して第三軍の包圍完成に近き頃側面に向つて殺到したもので、一時は我が軍を憂慮せしめたが、時既に遲きのみならず出擊も徹底を缺きたる爲、僅かに我が左翼兵團の進展を一時阻止せしめ得たるに過ぎなかつたことは我が軍の爲には幸であつた。

小評論　敵將クロパトキンは、我が第三軍が旅順の攻略後北方に轉進した方面を日本軍の最右翼卽ち鴨綠江軍を以てそれなりと誤斷したのである。蓋し鴨軍中には第三軍に屬せる第十一師團が編組中に在つたので、諜報の誤を信じたのであらう。加之、鴨軍が各軍に先んじ二月下旬より攻擊前進を開始したので、其の總豫備隊を該方面に轉用した。鴨軍は地形の嶮難と優勢なる敵に對し苦戰はしたが、滿洲軍としては目的を達し得た譯である。

次で敵將は我が第三軍が豫期に反し西翼より其の雄姿を現はせるに狼狽し、急遽之を再び西翼に轉用し、遲れ馳せに九日になつて我が第三軍包圍翼に突き當つて來た。其の兵力も相當優勢であつたので、我が最左翼の後備步兵旅團は不利の戰鬪を交へて退却の餘儀なきに至つた。此の退却の狀態は不意を襲はれ一時は潰亂狀態を呈したことは遺憾であるが、當時の後備隊は第一線に使用するを主目的としたのでなく、編制、素質、裝備共に低下せるものであつて、斯くの如き團隊を第一線に使用せざるべからざる程我が軍では兵力が不足であつたのである。併し斯くの如き部隊を使用するに際しては、之を側翼の如き重要にして危險なる方面を避くる如く運用に就て特に注意するを要することを記せねばならぬ。

三月十日は各軍追擊の幕である。鴨軍は敵を驅逐して撫順及其の上流地域に兵力を集結し、第一軍は主力を護山堡東南地區に集結して第四軍の側面を掩護し、其の近衞師團及近衞混成旅團は敵を追擊して奉天北方蒲河附近に進出し、鐵嶺街道を退却する敵の大兵團を潰走せしめた。第四軍は奉天東方地區から突進し敵を潰走せしめつつ魚鱗堡附近に進出し、南面して敵の退路を遮斷し第二、第三軍と呼應して奉天を包圍した。第三軍は鐵道線に沿ひ包繞運動を完成せんとして早朝來極力努力したが、敵は頑强に抵抗して屈せず、殊に我が最左翼第九師團方面に約一師團の敵

が逆襲に轉じでくる等、敵も大いに奮戰に努めた。之が爲我が軍は夕刻迄に北陵、觀音屯、冬常上の線に進出したが、爾後攻擊進展を見るに至らぬ。此の間敵の大縱隊は陸續として北方に退却しつつあるを遙かに望見しつつも、奈何んともする能はざりしは殘念であつたことであらう。

是に於て總司令官は一般の態勢に鑑み一部を以て追擊に任ぜしめ、主力は隊伍を整頓し戰力の恢復をなす爲、概ね現在地に集結を命じた。

本會戰に參加したる兵力及損害は左の通であつた。

日本軍　歩兵二百四十大隊、騎兵五十七中隊半、砲九百九十二門、機關銃二百五十四、工兵四十三中隊、合計二十四萬九千八百、死傷七萬二十八人

露　軍　總兵力三十二萬、死傷九萬、我が軍に鹵獲せられたるもの軍旗三、砲四十八門、俘虜二萬一千七百九十二名

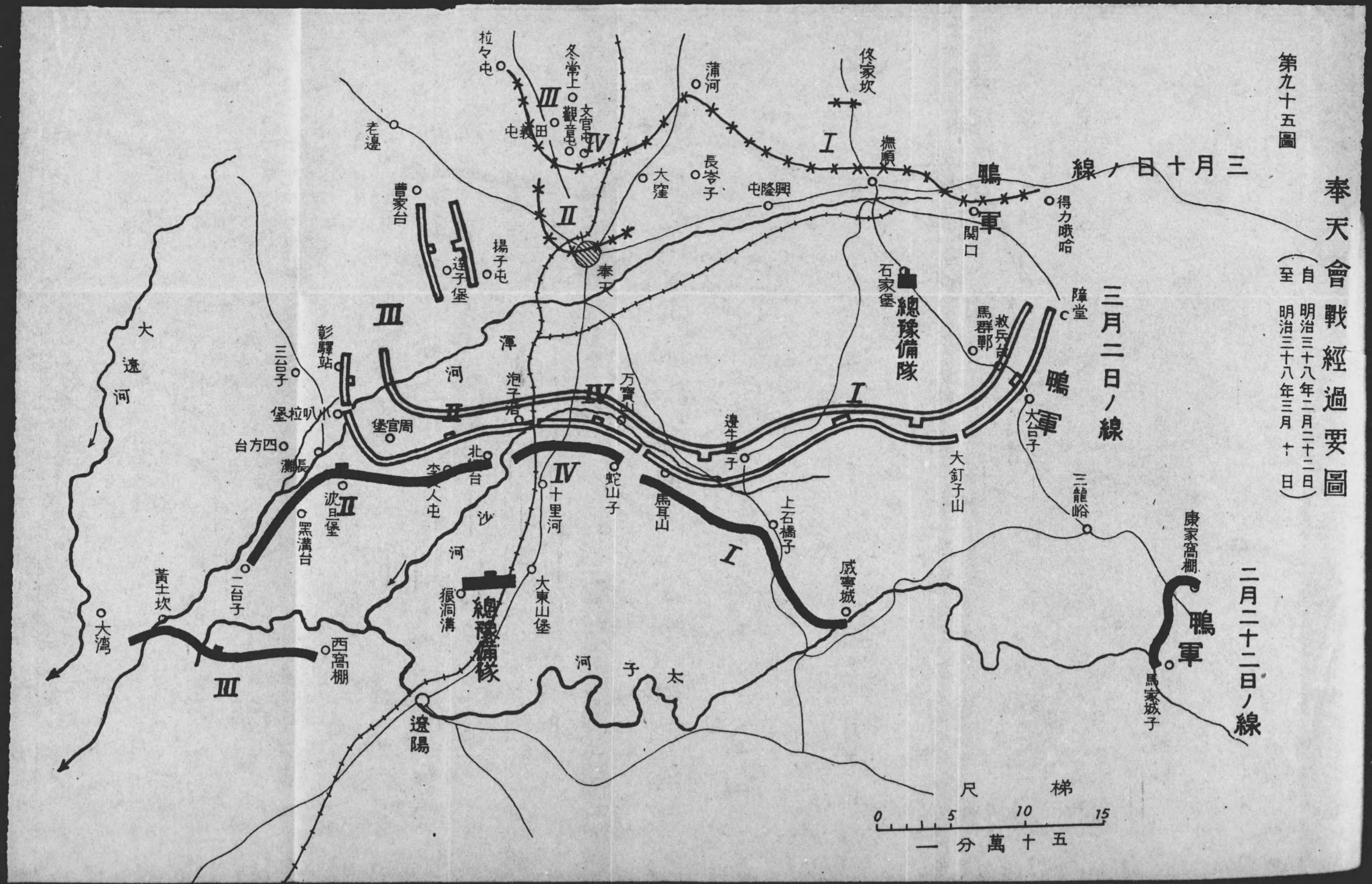
評　論

本會戰は既述の如く我が軍の赫々たる戰勝に歸した。其の將兵の勞苦奮鬪の跡を偲び敬意を表する次第である。併し前にも述べた通り、之を學習的に殲滅戰の見地から考察するとき、結果の上に於て未だ及ばざること遠しと謂ふべきであり、敵の損害は大なりといふものの、其の三分の

第九十五圖

奉天會戰經過要圖

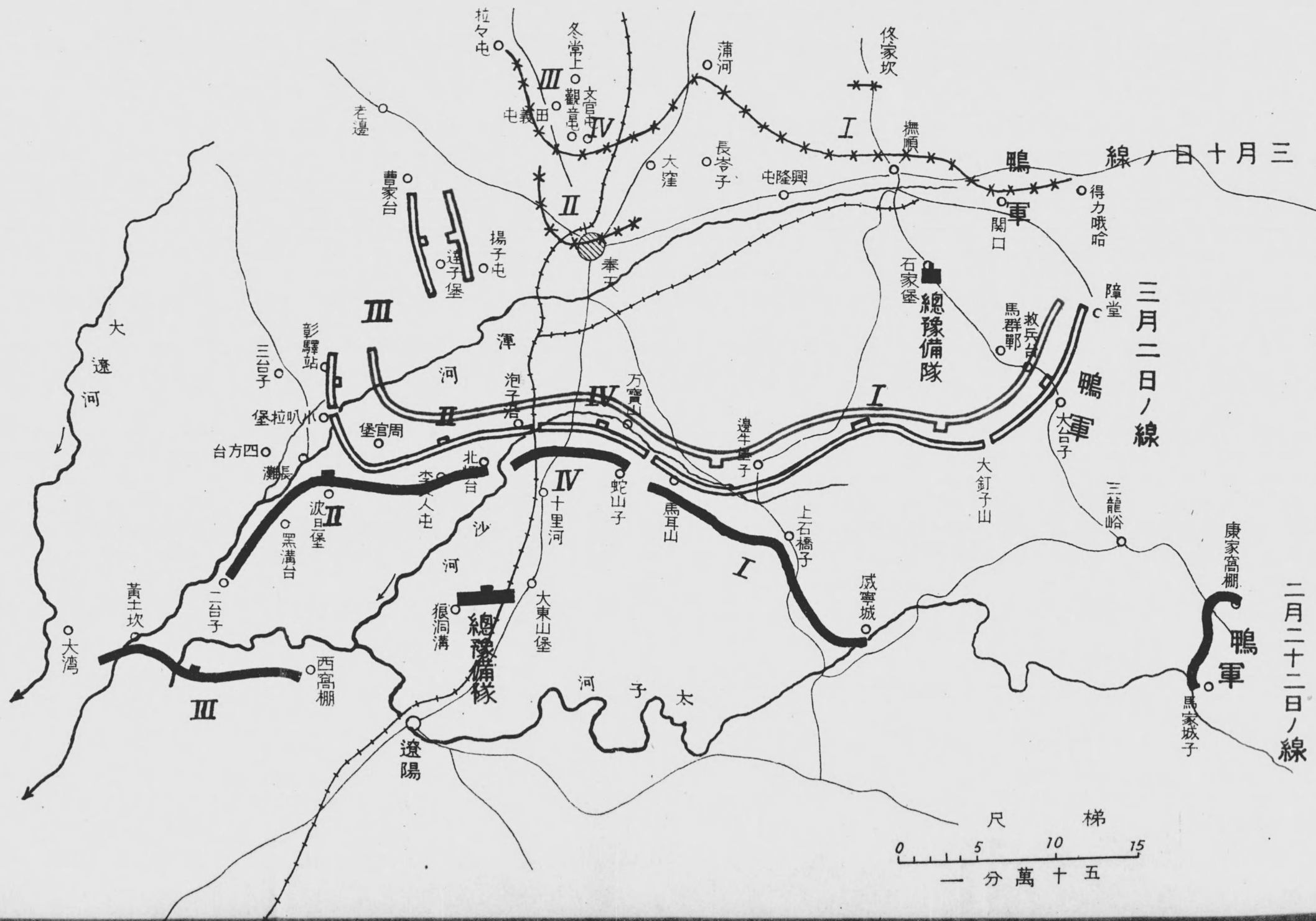
（自 明治三十八年二月二十二日 至 明治三十八年三月 十 日）



第九十五圖

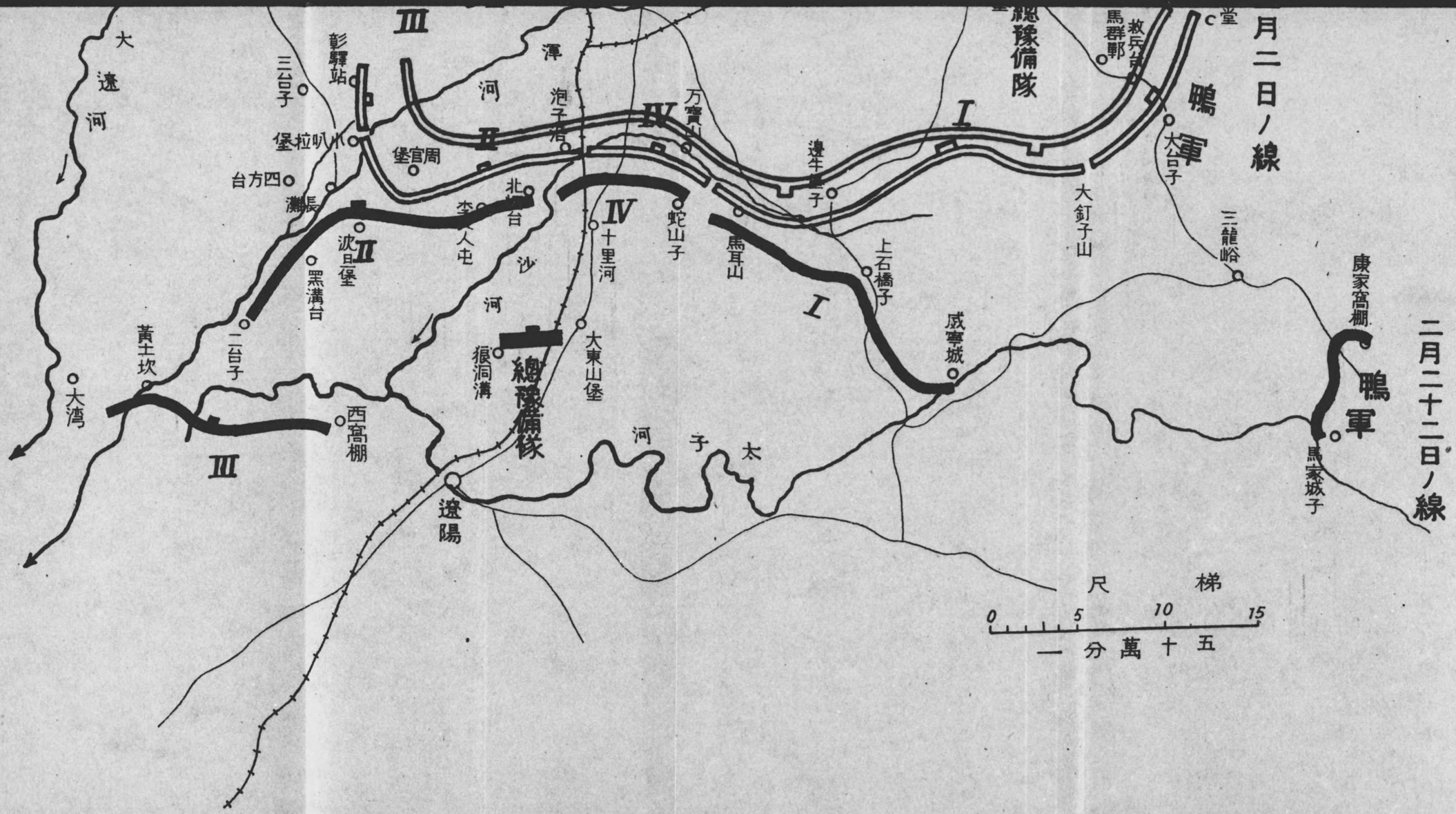
奉天會戰經過要圖

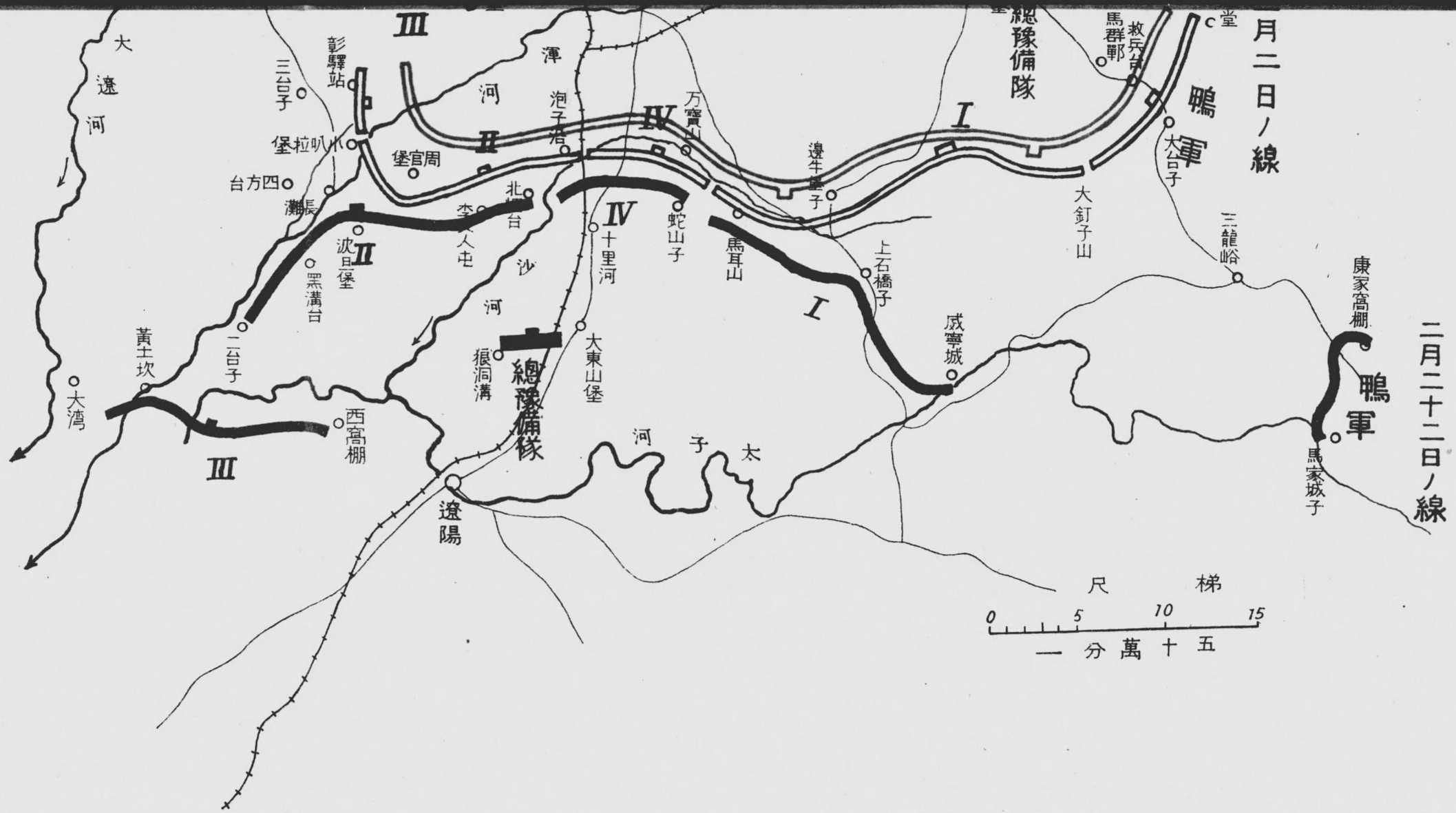
（自 明治三十八年二月二十二日
至 明治三十八年三月 十 日）



戰經過要圖

（明治三十八年二月二十二日
明治三十八年三月十日）



戰經過要圖

明治三十八年二月二十二日
明治三十八年三月十日